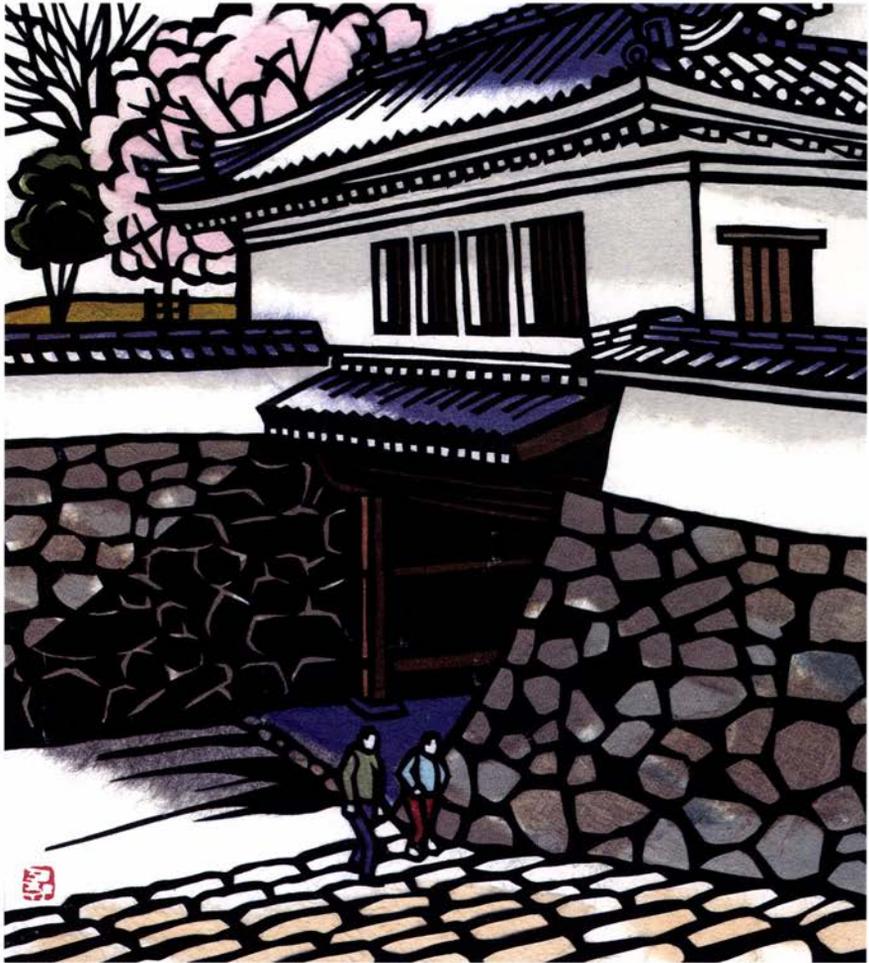


川柳塔



昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
平成三十五年四月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷一〇三二号

日川協加盟

No. 1031

四月号

第19回 川柳塔まつり

と き 平成25年10月12日(土)

午前11時開場・午後1時開会

ところ ホテル・アウィーナ大阪 4階 金剛の間(中・西)

大阪市天王寺区石ヶ辻町19-12 電話 06-6772-1441
(近鉄上本町・地下鉄谷町九丁目下車)

《 同人総会・議事 》

平成24年度事業経過報告・同決算報告・会計監査報告

平成25年度事業計画・同予算案・役員人事・その他

《 各賞表彰式・記念句会 》

表彰式 路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞・檸檬賞・一路賞・各地柳壇賞

おはなし 「津軽発おもしろ景色スペシャル」 川柳塔社 高瀬霜石氏

兼題 「広い」 島根石橋芳山選

「ささやく」 青森松山芳生選

「テンポ」 和歌山木本朱夏選

「机」 大阪太田昭選

「忘れる」 大阪河内月子選

事前投句 「樹」(9月2日必着) 川柳塔社 主幹 小島蘭幸選

◎各題2句・勝手ながら欠席投句は拝辞させていただきます

出句締切 正午(午後4時半終了予定) ※各題の「天位」に賞呈

◎会費 2,000円(当日頂きます) ※記念品呈

ご昼食は各自でお済ませください

《 懇親宴 》

と き 平成25年10月12日(土) 午後5時～7時

ところ ホテルアウィーナ大阪 3階 葛城の間

☆会費 7,000円(会席料理) 先着申込み120名様

☆宿泊 ホテル・アウィーナ大阪 8,000円(朝食付き)

*事前投句および懇親宴・宿泊のお申込はチラシに刷りこみのハガキ(ご希望の方は事務所)にて9月2日(月)までに本社事務所宛、お送りください。

*懇親宴・宿泊のご送金(句会費除く)は同封の振込用紙でお願い致します。

主催 川柳塔社

大阪市天王寺区大道1丁目14番17号201
〒543-0052 ☎・FAX 06-6779-3490
振替 00980-4-298479

句碑100基

小島 蘭 幸

笠岡川柳公園句碑建立100基達成記念井笠川柳会第14回笠岡大会の案内を頂いて、私は居ても立っても居られず、ひとり車を飛ばして100基の句碑と対面してきました。久し振りに見る句碑達は雨上がりの新鮮な空気の中で、しっかりと呼吸しているように感じました。

100基の句碑が全部見渡せるところに立っている、平成14年9月28日に開催された笠岡句碑公園開園式と句碑除幕式の模様が走馬灯のようにくるくると浮かんで来ました。

そこには戸田さだお事務局長をはじめスタッフの皆さんの美しい笑顔がありました。

「笠岡を川柳で元気にしたい」という情熱、努力がやつと実った瞬間でした。

古城山文化の旗がひるがえる

自作の祝吟を高らかに読み上げられた高木笠岡市長は、3年後、5年後、10年後を楽しみにして下さいと力強く挨拶されました。

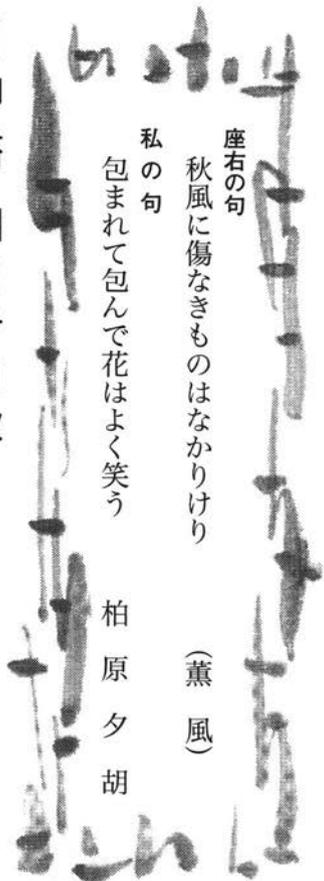
ゴルフなど知らぬトップの作業服 楓 楽
善人の骨があまりに軽すぎる ヒテコ
大好きな人と芒が原にいる 蘭 幸

「古城山句碑公園、念願かなってやつとこぎつけることが出来ました。冬の竹切り、春の新芽退治、そのあと出て来る群生の小笹、除草剤を炎天の下四回、大変な作業でしたが句碑建立の皆様の笑顔を見た時、何とも言いようのない私の喜びでございました」これは川柳公園開園のスタッフの一人として大活躍された三好孝一氏のお便りの一節です。

句碑は毎年5月に開催される笠岡大会と薬誌上大会の優秀作品に贈呈されるもので、開園から11年、市長の言葉通りスッキリと美しく整備された川柳公園に今年、節目の100基に到達したのです。

ヒーローの肩幅で出る映画館 霜 石
大空と遊んでいじめなど知らぬ 無 限
若葉キラキラこはまちがいなくこの世 完 司
会者定離すべて約束ごとの中 礎 石
広辞苑今夜も舟を出すとする 笑 子
アドリブの多い庶民の舞台裏 ヒテコ

100基達成記念、句碑除幕式は5月25日に開催されます。



座右の句

秋風に傷なきものはなかりけり

(薰風)

私の句

包まれて包んで花はよく笑う

柏原夕胡

川柳塔 四月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「龍野城」

■巻頭言 句碑100基	小島 蘭 幸	1
ライバル	瀬戸まさよ	2
川柳塔(同人吟)	小島 蘭 幸 選	4
川柳塔の川柳讃歌 ¹⁰⁰	木津川 計	47
自選集		48
温故知新		51
水煙抄	西出 楓 楽 選	52
中島生々庵句抄		52
新川柳鑑賞 ¹⁴	麻 生 路 郎	76
英語 de Senryu ¹⁶	吉村 侑 久 代	77
誹風柳多留 一 篇 研究 92		78
愛染帖	新家 完 司 選	80
檸檬抄「習 う」	奥田 み つ 子・森山 盛 桜 共 選	84
江戸を楽しむ ^④	小 栗 清 吾	87

ライバル

瀬戸 まさよ

ライバルは好敵手。競い合いながら、互いに高めあうことのできる相手をいう。歴史上では有名な川中島の合戦における上杉謙信と武田信玄。相撲界では大鵬と柏戸、将棋界では大山康晴と升田幸三といったところか。

目を川柳界に転じてみよう。かつては川柳塔と番傘はライバルであった。その頂点に立つ麻生路郎と岸本水府は好敵手であった。柳社の規模は川柳塔の方が小さかったが、二大柳社としての存在感は大きかった。

薰風師がある時「路郎の頃は自分の柳社の人間が他の柳社の句会へ行くと叱咤されたものだが、この頃はそういうこともなくなってきたけどなあ」と感慨深げに言われたことが印象に残っている。

私が朝日カルチャリーの川柳入門教室へ入ったのは昭和六一年一月である。講師は橋高薰風師と番傘の片岡つとむ師であった。両先生とも昭和五五年一〇月に開講

一路集
「痒い」
「植える」
「おやおや」
米田恭昌選 …… (88)
板山まみ子選 …… (89)
倉益一瑤選 …… (90)

民族の詩歌⁽¹¹⁾
「麻生路郎読本」余滴⁽¹⁴⁾
三好專平 …… (91)
乘原道夫 …… (92)

初歩教室「ボール」
太田昭 …… (96)
中原比呂志 …… (98)

川柳塔鑑賞
水煙抄鑑賞
堀正和 …… (100)
木本朱夏 …… (101)

寂しいレモン
冠句を楽しむ
山崎武彦 …… (104)
前田楓花 …… (107)

追悼 会いたい秀四さん
せんりゅう飛行船⁽²⁸⁾
新家完司 …… (108)
三月本社句会 …… (109)

句会燦燦
芳賀博子 …… (113)
各地柳壇(佳句地十選)柿花和夫・高島啓子 …… (114)

四月各地句会案内 …… (128)
柳界展望 …… (130)

■編集後記(ひとこと/佐々木満作) …… (132)
朱夏・いさお …… (132)

座右の句

風みどり命ゆつくりふくらます

(みつ子)

私の句

春風がプラス思考に変えていく

早川孝子

された朝日カルチャーセンターの(川柳入門)の講師として迎えられ、同時期の(朝日なわ柳壇)の選者としても活躍された。偶然とはいえ最初からライバルとしての運命だったのかも。人間としては薫風師は自由人、つとむ師は生真面目な方だった。

あるとき、薫風師は既刊の川柳塔誌を教室の生徒に配られ、川柳の勉強の参考にして下さいとの言葉を添えられた。次の講座の日はつとむ師だった。席に着かれるなり開口一番「カルチャー教室は準公的な場であるから、宣伝のための柳誌を配るなど論外の沙汰である」と批判されたのである。また薫風師が「生徒からの寄贈による大量の短冊に自分の川柳をしたためられ生徒に配られたことがある。つとむ師も次の講座のとき色紙に自分の川柳を書かれ生徒一同に渡された。以後、自然に沙汰やみになった。

既に故人となられた両先生は懐かしいエピソードを残された。川柳をこよなく愛し人間性豊かな川柳作家だった両先生は、天国であるときはどうも、苦笑しあっておられるのではと想像するのである。



小島蘭幸選

藤井寺市 太田 扶美代

風邪ひきが治り初老になっていた

病名が決まって梅が咲きました

垢ぬけた冬を演出するスバル

ネクタイを直してあげた久し振り

鐘の音まだ何一つ悟れない

ボランティア始めましたと春の風

鳥取市 岸 本 宏 章

待つて待つて鳥取道が繋がる

恵方巻生まれ故郷を向いて食う

百歳を夢みたころは若かつた

金回り我が家で止めたことはない

僕の背を誰かが見てるかもしれぬ

大相撲の「張手」暴力ではないか

和歌山市 牛 尾 緑 良

明け暮れの鐘が聞こえる古希以来

嫌いぬいた昨日が消える雪景色

寒気団土鍋を熱くあつくする

腐葉土になって命を全うす

皆おいで春の脱皮をしに行こう

目を閉じて聞く日本語が騒々し

枚方市 伊 達 郁 夫

父の遺書白紙の謎が未だ解けぬ

嫁が来て今年も増えた祝い箸

オフレコの話に猫も来て座る

モノクロで雪に私も溶けていく

座布団が敷かれていないのが身内

初対面シャツの白さに油断する

羽曳野市 三 好 専 平

われもまた枯葉となって弘川寺

大きな蜜柑の皮を剥いて捨てる

だんだんとみじかいことばになってきた

葉をいっばいもらって帰る峠のみち

竹やぶの上を鳩が向こうの方へ飛ぶ

ひとりぼつちの月と仲良くなりたくて

段ボール箱はせつなし春の雪

公園の一部と化した一老人

ゴミ箱を蹴つ飛ばすのは革新か

陸橋のために陸橋渡ろうか

線路の上を歩き続けてみたいかな

手をひょいと上げて薫風消え去りぬ

弘前市 高瀬霜石

桜さくらドナー・カードの話する

ストレスを食べてくださる吟醸酒

他人さまに迷惑かけぬだけ大人

手切れ金みたいなものかお錢別

貸す貸さぬ友だちひとり見失う

肩書きがときどき隠れ蓑になる

鳥取市 両川無限

ぶつかつて優しい人と知りました

パンドラの底に残っていた希望

絶好調また悪知恵が湧いてくる

言い勝ったツケが晩酌までひびく

水仙の香り亡き人連れてくる

三田市 北野哲男

本棚に並んだままのブリタニカ

恐竜が住んでたあたり我が故郷

農の手もコンピュータを追っかける

逆縁の痛みを洗うコップ酒

火の歴史抱いて倒れた母介護

一人っ娘ピアノ残して翔び立った

大阪市 升成好

全癒です医者嬉しいお墨つき

たしなみに変えてお酒の良さを知る

これも浮き世半分義理のスケジュール

やさしさを同じ温みで返さねば

背伸びした視線で今を見失う

鉢巻きの赤は白より強そうだ

高知市 小川てるみ

三寒四温バイオリズムは春モード

どことなくときめく春の時刻表

裁かれる理由は知らない冬の蠅

泣く事も出来ぬ男が可愛そう

冗談も程々血圧があがる

鍵穴の視野で政治が語れない

西予市 黒田茂代

言い足りぬ言葉は今も悔いている

唇が乾く魂が乾く

簡単に死ねそう蒼く深い湖

自信喪失の侘しい影法師

抜け殻のわたしを風が弄ぶ

今日もまたしぐれ無題の日が過ぎる

和歌山市 柏原夕胡

そのことに触れると愛は朽ちてゆく
何もかも終わりにしたい夕茜
尖つて人を嫌いになつて
冷めた目の深いところがあたたかい
バランスが悪いわたしのヤジロベエ
元氣出さなきやと朝日を浴びている

美作市 大石 あすなろ

久し振り噂ひとつを手土産に
身辺整理気軽く言うて下さるな
挑戦はペンだけにして冬ごもり
神様の一本釣りで結ばれる
なんとなく好きと書いてる掌に
失うたものを並べる老いの愚痴

尼崎市 山田 耕治

この方だけに手書きの年賀状
職退いて三連休に気がつかず
竹の子を真冬に食べてすみません
父さんの眼鏡の番はしてません
クラス会一人追加のよい知らせ
かあさんが預かつておくお年玉

横浜市 菊地 政勝

虐待に見えなくもない猿回し
盃の底に沈める今日のウツ
正直に生きたら何も残らない

まだ有ると油断をさせる徳俵
生き残るために磨いている心
忍の字を数えた母の背がまるい

札幌市 三浦 強一

バックミラーああ光陰は矢の如し
里神楽八岐大蛇酔つて舞う
独り飲む窓に優しい雪女

内緒だがぼくにも舌が二枚ある
一行詩あつて嬉しい友の文

混沌の世に天へ向く二十歳の木

香芝市 大内 朝子

絵手紙のたんぽぽふる里が匂う
人生の本番すつびんを生きる
プライドがいつも涙を拭いてくれ
今はもう御伽噺になった恋
運命の川を流れるどんぶらこ
来し方をほろほろ思う日向ぼこ

大阪市 吉村 一風

聞き上手酒は冷えても風和む
健康のお礼言うとか青い空
母親の代りも妻はしてくれ
君が代も歌うジーパン頑張れよ
居酒屋で息子と呑むの夢だった
出る杭を打たれ余生も頑張れる

愛すべき欠点などと自画自賛

大阪市 古今堂 蕉子

繰り言と愚痴は言わぬと決めたはず

ぼかぼかぼか怒るのは止めとこう
これだけの器と思う夕茜
満開の桜が喜寿を誘い出す

ここに来るたび父のこと母のこと

八尾市 内海 幸生

日の丸はそんなに熱い旗じゃない
春は来る夜は明けると言いつづけ
しばらくは見えて見ぬふりをする喜劇

煩惱に目鼻をつけた鏡みる
足るを知る明日はきつとそう思う
何をしていたのか妻逝き十三年
ひとり居てテレビに領き首も振り

和歌山市 楠見 章子

ワンルーム夜逃げのようにお引越し

愛の鞭暴力として世に問われ
色即是空音の無い夜もまた愉し

いち抜けてからの背中は丸くなり
椅子に凭れて夜のしじまを独り占め
効き目ない三日坊主の美顔術

海南市 堂上 泰女

体重計にまだを毎日載せている

曖昧な記憶にスパイスを効かす

川西市 米原 雪子

居眠りが多いよ午後のスケジュール

負けられぬ九十越えた顔並ぶ

嫁寝込む食事段取りがたがたに

振り向けば背丈の伸びた孫の顔

探し物何んと時間の無駄使い

ジャケツトを気まぐれ陽気邪魔にする

大阪市 神夏磯 典子

春の陽さんさんひとりぼっちにも

翔ぶ遊ぶ つつかい棒があればこそ

アイスクリーム食べたらず雪が降り出した

僧侶様老後心配してなさる
大声がたまに出るので家長です

寝屋川市 平松 かすみ

ビッグニュース百歳へおめでとぅ
ありがたい医療費控除せずすみ

原発の損を今年も繰り越した

冷蔵庫何を出そうとしたのかな

僧侶様老後心配してなさる

札幌市 小沢 淳

ハエさんも死んだ振りする寒の底
ハンドルにゆとりが欲しい人間も
身の程を知って人生裏表紙
いくばくの道花を愛で人に副い
ライバルが先に行くので休めない

砂川市 大橋 政良

終点のざわめき伝ってくるレール
風吹けば粉雪が舞う飢えた街
落し穴その端じつこを踏んでいる
脳の鏽落とすジャンプの雪けむり
風の絵の中に心が描いてある

黒石市 相馬 一花

麻酔から覚めて浮世が騒がしい
人生で二度咲きをする茜雲
暗示する人のカリスマ性に惚れ
縁起よい市に集まる美男美女
黒髪に程好く白いアクセント

黒石市 佐藤 古拙

雄叫びをあげて一本決められる
雪消えて土筆よもぎの息づかい
やわらかな蕾をわたる鳥の声
一升びん中に論旨がまとまらず
隠れんぼ夕餉の匂いいち脱ける

平川市 小寺 花峯

雪帽子被ったバラは暖かい
薄味の孤独を吞んで老い一人
誕生日一升瓶があればいい
バーゲンの品は離さない細腕
外は雪今夜も愛す煙がある

弘前市 稲見 則彦

嘘泣きを知っても母の手は温い
地吹雪を衝いてストープ列車行く
無人駅君も辛かる波の花
足跡がくつきり残る今朝の景
轍から抜け出せないと春を待つ

弘前市 岡本 花匠

雪燈籠寒夜ぬくもり情和む
マドンナの声に除雪の励み様
靴下カパー寺友のくれた情ぬくい
指笛のホームに春を呼び和む
ときめきの慕情つのらせ花便り

弘前市 今 愁女

冬さ中陽気なナポリ観て温し
鮮やかな海やまの幸ふんだんに
空の旅も不安になった787
鬼やらい殻つき豆じゃ逃げぬ鬼
雪まつり豪雪忘れメルヘンに

弘前市 須郷井蛙

孫にまで音痴の血統続いてる
不発弾捨てに時々旅へ出る
原稿を書く日ガツチリ鍵をかけ
退屈の文字を知らない母の指
カタカナの汜濫辞典追いつかぬ

弘前市 高橋洋子

肩の荷が下りて背骨が軋み出す
シャーペンは性に合わない力み癖
葬よりも茶毘が切ない送り人
群雀一氣に逃げるいさぎよさ
冬枯野お日さまを抱く福寿草

弘前市 福土慕情

通夜帰りネクタイ外す厄落し
根気よく纏れた糸を解いている
自分史を辿れば戯画へ辿り着く
さくら餅ほんのり春を連れてくる
もう少し酒を頼りにしたい夜

青森県 松山芳生

地吹雪を衝いて乗り込む始発駅
夢ひとつ抱いて走つて来たいのち
子を叱る子が児を叱る半世紀
はしゃぐことは決してしない亡母でした
小さな私を連れて来たのは赤トンボ

横浜市 小野句多留

嬉しきは当てにされてる一人です
家で呑む酒代高がしれている
ピカピカのガラスの壁に突っ掛かる
四季のない母に媚を競わせる
無機質な絵文字で示す非常口(ホテル)

富山市 島ひかる

突然に隣で止まる救急車
生と死の狭間で神の匙加減
逆縁を一途に想う老いた母
死後のこと夫婦で語るこれも愛
御先祖に供えて食べる好きな菓子

可児市 板山まみ子

母の歳越してアルバムめくる夜
週末の雪でよかつた通学路
メジロ呼ぶミカンは此所と決めて買い
酒呑みの失敗談にほくそ笑み
飲兵衛は子には継がせぬ事にする

犬山市 関本かつ子

問い掛けをやさしく包む仏間の灯
充電器のような友に会いに行く
味付けを変えて今夜は残り物
老いたねと言われてやめたダイエット
春はもうホップステップしています

犬山市 吉田 幸子

東京都 岸野 あやめ

年毎に魂何処か置き忘れ
通る路ですと支える温い風
ジェスチャーが通じサンキュウいい握手
習つてるうちにアイディア掘り起こす
孫子守母親介護友多忙

犬山市 金子 美千代

何事も自分で決める小気味好き
希望的余命でリフォーム考える
皺のぼすためにももつと太らねば
野菜高騰ミニ菜園の出番なり
新しい眼鏡だあれも気づかない

愛知県 早川 遯行

渋滞を避けて悪路のすれ違い
死ぬ時はいつしよ高速ハイウェイ
くねくねとハンドル腕の見せどころ
まついいかモミジマークの駐車位置
またやったバックしていてごっつんこ

さいたま市 星野 育子

一味違う工場の夜景ツアー
いい人と人がいいにあるギャップ
辛かった話はいつも過去形で
詰め放題欲もいつばい詰め込む
向き合せて寄り添うている介助犬

働いて来たのよ指紋消えるほど
シミひとつ増えていました病院で
愚痴っぽい話御遠慮致します
油断して暮らせば高い電気料
春風が待ちくたびれた窓を訪う

神戸市 伊勢田 毅

義理チョコも嬉しくてつい笑みが出る
キャンプ地でルーキーチョコの数競う
井の中で自己陶醉の五七五
異動前噂を流す黒い影
ひな人形女系家族にある絆

神戸市 木村 貴代子

見つからぬ物はあきらめ転進す
財政の赤字放置のアベノミクス
孫と娘の写真並べて夜を過す
地震国核ゴミ埋める場所はない
失うもの増えて不安も比例して

神戸市 白川 淑子

今朝も無事池のあひるの数かぞえ
息してるだけでメーター回る音
家計簿をつけぬ私の大人買い
憎まれ口言い合う仲間温かい
夕焼けが団地六畳間を染めて

献血をしたいがわたし薬づけ

神戸市 山口光久

泳ぐのは下手で部下には人気者

ゆつくりと歩きたいけど時がない

薬掴む思いがやつと発芽する

流れ星たまに寄り道したかろう

神戸市 山口美穂

お仏壇へ行つて来ますとただいまと

耳学問誰かにお喋りしたくなる

おぼちゃんに貰った飴はよう喋る

つくり笑い自分に嘘をつけなくて

犬逝つて孤独を埋めるものがない

神戸市 山崎武彦

まず茶飲み友達からと言う誘い

悩みなら聞いてあげると光る星

母看取る涙もろくて激しくて

ひと筋の涙に負けた若かった

子の無口世間の風が解りかけ

神戸市 山田 婦美子

遠い日の記憶の中の雪だるま

鉛色の空マジシャンそして雪

鬼は外鬼に聞かせていいですか

福は内微笑む上寿の姑の面

半世紀絆きらきら時刻む

米寿でも噂を飛ばす元気者

相生市 中塚礎石

紙コップ握りつぶして欠伸する

孫ほどの医者に先生様と呼び

年金へあれもこれもと手が伸びる

お薬をもらつて今日も生きている

明石市 糀谷和郎

褒め言葉若い芽伸ばすサブリ剤

一発を狙うと脇が甘くなる

お悩みの尽きたところが終ですか

正直の順にはならぬ幸せ度

腰掛けのつもりが長い窓の際

芦屋市 黒田能子

足腰にファイトファイトと言ひ聞かす

大好きなキーセットでリフレッシュ

ビッグバン小さな星に住む不思議

素のままの形で眠る大の字で

一発目がチャンスだったのかも知れぬ

芦屋市 竹山 千賀子

一人鍋湯気の向こうに仏様

元氣かい窓から亡夫の声がする

アンテナを張つていたのに蹴躓く

トップの座いつもポッケに羅針盤

もう一度リボンつきたい老いの髪

尼崎市 市坪武臣

本気です君のハートが掴めない
切れそうで切れぬ夫婦という契り
あの角を曲れば主婦の顔となる
初対面歳は聞かずに干支を聞き
大鵬を偲び昭和はまた遠く

尼崎市 加川靖鬼

電子辞書無ければ只の素老人
賞味期限舌に聞いたら大丈夫
監視カメラ心の中も覗き込む
ぼんぼりの灯り仄かな籬の春
失敗を薬としてる脳の贅

尼崎市 軸丸勝巳

通院が仕事になってきた後期
一冊で足りぬ病院待ち時間
冬將軍三寒四温なんて無視
電気料去年と比べやっぱりね
ティッシュ手に献血僕に振り向かず

尼崎市 春城年代

ハイタツチで別れ老女等またあした
タンス階段友は旧家のいとほんで
終の日が近くなったり遠くなったり
煌々と寒夜の月と孤独感
はじめから断る電話待っている

尼崎市 林昭三

三連休寒い降雪待つヤング
加齢する優しくもなり意固地にも
定めとか異境に過す早三歳
電子辞書孫のお古まだ元氣
何は扱て置いても食後の薬呑む

加西市 金川宣子

素颜見てシニア料金してくれる
妻からのたつた一つのバレンチョコ
退院日妻の手料理癒される
外人に席を譲られありがとう
不況こそ知恵を絞って生むチャンス

川西市 西内朋月

独り身もまんざらでない朝帰り
辛党にクリームたつぷりのココア
この世から無くなることはない戦
水茎の跡マドンナの請求書
年金の暮らしに税が増えてくる

篠山市 酒井真由

仮名手本忠臣蔵に雪が降る
東京は雪成人の日を吹雪く
またここで会おう迷路を駆け抜けて
気に入りの仮面をひとつポシエットに
ウインクが通じる猫と日向ぼこ

よかつたと今でも思う家族葬

三田市 石原 歳子

洋式の仏壇に合う花を買う

マイナスをプラスに替えたこの努力

自然求め歩いて気づく草苺

啄木の詞に曲つけた歌が好き

三田市 上垣 キヨミ

検診日医師に元気の自慢する

板チョコを二人で食べた映画館

十指では足りぬ欠点持て余す

欲連れて恵方三社の鈴を振る

訪ね来て友の鬼籍に絶句する

三田市 尾崎 一子

もう十年夫の命日雪の朝

たつぷりの青春老いがおもしろい

欠点と向き合う私生き上手

明日生きる忍の一字で着る病衣

植樹の森継ぐ人知らず陽は昇る

三田市 久保田 千代

レモンテイ冬の時間に歩み寄る

老いふたり明日には触れず日向ぼこ

人生の後片付けで夫婦揉め

元気がで始まる娘との深夜電

子育てに巨人の星は流行らない

父さんのお茶碗だけがよく欠ける

三田市 田中 章子

チョコひとつ妻からもらいませう安堵

食べ残し飢えたこどもの目が浮かぶ

プーメラン故郷にもどるのがベスト

目力をつける訓練しています

三田市 福田 好文

小銭でも貸した人の名忘れない

コンビニのおでんを褒める急な客

肩書きで泳ぐ男の頭が高い

雑魚寝して誰も何にも言わぬ歳

フリーター人並みだよと言う息子

三田市 堀 正和

砂風呂でじつくりと見る薩摩富士

朝寝朝酒朝湯可湯治宿

湯治場でテロのニュースを聞かされる

砂蒸しの刑に遭つてる小半時

カップルも神妙になる砂の風呂

西宮市 秋元 てる

実篤のりんごに変える宝船

時代遅れの信念抱いて母元氣

有難うに使用制限ありません

テロがないだけでもまししかあぁ日本

古里はいい所だけど寒い冬

西宮市 緒方美津子

仮設に灯冬將軍よ居座るな
気づかないふりをしてます嫁のポカ
天下一品亡姑の梅干よう継がず
えいやつと起きて開けます寒の窓
いい過ぎたコーヒー丁寧にいれる

西宮市 片山忠

挑戦者みたいな今朝の雪の量
生ゴミも減らす覚悟で自衛する
オアシスは家に無いからやつかいだ
キープしたポトルにママがキスをする
脱皮した総理が放つ三つの矢

西宮市 亀岡哲子

ちらちらと降りはる雪は可愛らし
まんさくが咲いた知らせに出る炬燵
私を燻すと苦労香り立つ
ああ日本養殖された雑魚の群れ
空つぼの頭で月を見えています

西宮市 西口いわゑ

菜の花を仏に供え春にする
ユニークな孫ピカピカの社会人
6Bとたのしく脳を遊ばせる
ときめいて自分に選ぶチョコレート
いい話レモン一切遊ばせる

西宮市 藤本直

春を待つ明るく温い句のために
老人と呼ばれてもいいもう傘寿
六十がやたらに若く見えて来た
お役目を果しましたと椿落つ
春が来るどんな小さな庭にでも

西宮市 牧渕富喜子

人の目も気にせず力抜けてくる
後から先に埋まって行く遠慮
あきらめる事の多かり雨上る
食べものの列にはつかぬ古帽子
三度目も同じ病室雲走る

西宮市 山本義子

グルメ旅ふところの鍵ゆるくする
バッグのなかときどき鍵は神隠し
つつましいわが城守る鍵の鈴
本籍はふるさとに置き鍵かける
タレントのゴシップ遠慮なく笑う

西宮市 吉井菜々子

愛犬とハザードマップ握りしめ
避難訓練終えてふたたび水枕
おつかれか過激になつてきたジョーク
酸欠にならないように隅にいる
ハートもう強化ガラスになつてきた

西脇市 七反田 順子
コーラスは笑歌でしようかまた楽し

円安が実感できぬ猫の背中
愛情をもらいたいから犬を飼う
哲学の道を歩くと背筋伸び
トンネルを避けてデコボコ道を行く

姫路市 古川 奮水

幼児服買うと着たがる幼稚園
寒の水ゴックン飲んで元気だす
年金の減額告げるハガキ来た
アドリブで舞台の透き間埋めて幕
弁えてゆつくり歩く老いの道

奈良市 阿部 紀子

四月馬鹿毎度の事に引つ掛かり
王羲之の端正な書に引き込まれ
どうしよう酸いも甘いも皆忘れ
猿之助血筋と稽古宙を舞う
誕生日後期高齢しらせ来た

奈良市 岩 本 浩 二

同期会まずは寂しい訃報から
歯痒くて見ではおられぬ息子の家庭
迷信を信じて生きた良き時代
かっと思を剥いてやりたい柩から
呑み助と野次られ反論などしない

奈良市 大久保 眞澄
死にたいと泣いて言うから大丈夫
バツ悪げにたたずむ雄鹿角がない
歩道橋ついたため息が出てしまう
ほつといての言葉がすがりついてくる
優先席もう座つてもいい歳か

奈良市 加門 萌子

地球人どうし果てない殺し合い
命いのち母の気持がわかるから
冬籠り水府泡幻縋いて
熱情と友情迸る先達
路郎師のむつまじいかな夫婦像

奈良市 辻内 げんえい

あと何年何を買うにも老夫婦
ババ抜きで孫を騙してやっとなつ
ハイリスクハイリターンはとれぬ僕
ガン手術生還の友いい笑顔
電飾がうわべを飾り年を越す

奈良市 山本 柳 昌

優しさに触れて病を受け入れる
今は雨季しかと養生する期間
落ち着くとお茶の甘さがしみてくる
あの時の涙くるんでくれた月
唄いまして笑いましてよう晴れてくる

奈良市 米田恭昌

大和郡山市 坊農柳弘

寒いのにまだ寒くする親父ギャグ
二世代同居つけてほしいな姑に鈴
体罰もいじめもあつた日記帳

愛は未だ言葉に成らぬ春霞
取り柄など何も無いけど傍に居る
知らなけりゃ知らんで済まぬ地震予知
ときどきは僕の前行く影法師

領空を侵犯されて「遺憾です」

自分史に自己陶醉の理想論

たとえ義理でも僕にとつては温いチョコ

丁寧な応待妥協せぬ職員
専門の用語並べて説明会
防犯の声掛けきつく睨まれて
窓越しの安否確認間違われ
腹いっぱい空気が吸えぬ五月鯉

生駒市 飛永ふりこ

奈良県 中原比呂志

初物のたけのこ噛みこなす至福
人格まで染まる気付かない汚れ

いいことがありそう海苔の歯応えに

春の海フアイトフアイトと父の声

運命のイントロ躍動の天地

君がいるだから少し生きてみる

橿原市 安土理恵

ペアグラス割って醒めたの迷いから

首輪とれた男ずらりと日向ぼこ
あれやこれ引き算続く冬の部屋
助手席の妻が生き方指南する
父よ母よ今は銀河のどの辺り
ハンサムウーマン喝采浴びて闊歩する

奈良県 渡辺富子

黄信号今走らねば消える虹

どないしよ姑が譲ってくれたもの

謎かけのように白紙で来たハガキ

着地して片翼もげた理想論

橿原市 居谷真理子

お前にはまだ要るのだよ雪囲い

あふれ出た才気が棘となつている

餅に負けた入れ歯に歯医者までおこる

海でしか生きられないという巨体

寒暖の差血圧までも乱高下

絶対という冷たさよ亡骸よ

小春日の歩行訓練デパートへ

絶対という冷たさよ亡骸よ

小春日の歩行訓練デパートへ

和歌山市 上田 紀子

人間を味わい尽くす囲炉裏の火

何ひとつ不満ないけど明日見えず

天の声地の声聞いた手術台

生き方を試されてる骨密度

奈落から見上げる空が美しい

和歌山市 喜田 准一

先に立つ理屈で前に進めない

イエスマンだけではきつい生き残り

気付くまでそつとして置くことも智慧

いいニュース聴けば嬉しい春になる

七十路過ぎ男の浪漫捨て切れず

和歌山市 木本 朱夏

元日のお地藏さまへポチ袋

地藏さまも赤いマフラーしてなさる

ひとりにも飽きてばちばち爪飛ばす

蘇鉄の実ほどの朱さと頑固さと

先生が聖職だった良き時代

和歌山市 坂部 紀久子

郵便局でさんま一箱買わされる

胃の中へストンと落ちた訃の電話

ほつぺたにチューしてくれる人もなく

編んで肩回わして編んで日が暮れる

十階でお見舞下げて迷子です

和歌山市 武本 碧

幸せは日出ずる国へ生まれしか

充電をしてはほつほつ生きている

ままならぬ世にも心の自由持つ

生き恥をさらし素直なかたつむり

煩惱がぎつしり詰まる玉手箱

和歌山市 田中 みね

ぼつかりと心に穴が友が去る

そこに何が有ったのだろう思う事

人一倍やさしい友が病み給う

あの方でもへまをするんだほつとした

すつぴんも悪くないなと自己暗示

和歌山市 玉置 当代

分相応の倅せでよい夫婦箸

豊かさに慣れてころろが痩せている

控えめに生きて損することばかり

私の口慎めばよいものを

クエ鍋を囲む紀南に雪が舞う

和歌山市 土屋 起世子

毎日が初心者老いの坂をゆく

温い炬燵愚痴を言うのはやめなはれ

難聴でよい事だけを聞いている

よい知らせ届き財布が軽くなる

予定通り一日終わりよい寝付き

和歌山市 福井菜摘

爪切つて平常心を取り戻す
飾らない言葉の裏の思いやり
仏神に言えないこともある祈り
しなやかな母の意見にある重み
褒められてぼろり本音がでてしまう

和歌山市 福本英子

雷鳴で起こされ救急車で起きる
干支一回り賀状ごっそり減っている
目力がついたら稽古始めます
引き算で後もう少し生きられる
嬉しさも以下同文という程度

和歌山市 古久保和子

キウンとすることが少なくなってきた
ハートにも異常乾燥注意報
足元から冷える真夜中のポスト
脈拍を数えて今日を確かめる
錠剤が手から零れるのもこの世

和歌山市 堀富美子

取り付いた風邪がカラオケ歌わせぬ
手作りの温さを提げて嫁が訪う
あなたの声聞きたいなんて言うお世辞
熱唱のひと日不思議にしゃんとする
五線譜をはみ出している幸せ度

和歌山市 松尾和香

汽車の旅思い出辿る流れ星
ぶつかつた思い出浮かぶご命日
人生の壁越えてゆく喜寿祝う
ランドセル色華やかに春を待つ
感謝する今の暮しに初写経

和歌山市 松原寿子

非情の掟突破しました若かつた
相続の維持両肩にのしかかる
ひと言がずしりと胸に落ちてくる
ふところの深さ溢れてくる温み
お酒好き真面目な顔で世相斬る

岩出市 藤原ほのか

雪しきりひたすら耐えて芽吹きたい
凍てついた心を溶かす詩にあう
お雛様明かりともして元の闇
雛形に自分の居場所見付け出す
大声をあげて今年もどっこいしょ

海南市 小谷小雪

森が小鳥を抱くような円い背
両の手に予定ない日を貯めている
仏壇の水少しずつ減っている
揺れる日も点し続けていく小舟
満ち足りた梓から出たくなくてくる

紀の川市 宇野幹子

京都府 高島啓子

きさらぎの曆めくつた春の風
子の帰省かじつた脛を撫でにくる

米を研ぐ明日も生きるといふ意欲

最悪の昨日を返すフライパン

ちぐはぐの靴でも越えた喜寿の坂

紀の川市 北山絹子

カラフルな故郷になつてゆく未来

真白な皿へ家族の夢を盛る

幽車が狂い出してゐる少子国

独身へ自由に飛べる羽がある

退院の知らせ心が蝶になる

紀の川市 辻内次根

宇宙から見ればなんだという悩み

清書する電子辞書からゴーサイン

窓からの陽射しが一人分の部屋

灯の消える前の煌きかも知れぬ

処方箋の力を借りる徳俵

田辺市 岡本昇

ざわめきも一緒に吸るわんこそば

観梅の宴盛り上る俄か雪

人形に命の演技させる腕

借りる時えびす顔するのも演技

一大事と製うなぎが育たない

拒絶するかたちで泳ぐ水すまし
買ったときから汚れていくのです

この辺で一遍風邪を引いておく

雑念を反芻して蕎麦まくら

円熟はしていないけどおばあさん

京都府 坪井孝一

数えたら八人になる敵が居た

カルチャーへ妻が派手着る何かある

失敗は役立つものと決めている

不況でも花は季節を忘れない

言い訳を二人から聞くレモンティー

京都市 西村益子

大笑い心にビタミン深呼吸

かじられた脛に老後の栄養を

火の用心拍子木の音外は雪

医療費が高くつきます冬二月

鬼と福仲良くどうぞ老い二人

京都市 藤井文代

降れば豪雨冬は極寒夏炎暑

老いの坂用心だけで歩めない

無口でも自分相手でよく喋る

急ぎ癖暇ができて直らない

お金より心と言つてもどこか嘘

京都市 榎本宏子

深い眼差し元気をもらう阿修羅像

育つほど親子の願い段差ある

祖母の切り札お天道さんが見たはるよ

今更罪と言われて困る杉花粉

真面目より愉快な人の大きな輪

亀岡市 井上森生

喜寿越えて生き長らえるオマケ編

蛇年は老いから脱皮するチャンス

屋久島も富士も登った喜寿祝う

アベノミクスときめく中身を待つことに

健康が運と命を味方する

長岡京市 山田葉子

旅に出るぜいたくだけは手放せぬ

養ってもらう生き方あったのに

あこがれは歌の調べにのせたまま

パソコン習い孫の呼び捨てやめました

ともに落ちた穴があるから肩を組む

大阪市 池上清治

命だと信じて作る朝ジュース

ラジオ体操寝床で聞いて背伸びする

梅園の見たい所にカメラ立ち

病み上り甘酒にする梅見酒

柳友が揃うランチは批評会

大阪市 井丸昌紀

欠点を書き出してみる除夜の鐘

二十四年過ぎて平成どこを向く

鈴付けに行き丸め込まれて帰らない

大鵬より僕は柏戸ファンだった

皿のない河童が威張る国に住み

大阪市 岩崎公誠

大気汚染肺もハートも激怒する

早咲きの梅を訪ねて酒を酌む

終章をアベノミクスに惑わされ

ピンコロを望む友などまだ元氣

検診にずしりと重い告知聞く

大阪市 江島谷勝弘

ぼつぼつとまあまあなれば良しとする

うれしいな今日もできそう乾杯が

鍵穴からのぞいてばかりいる私

理に叶うことばばかりを吐く男

パソコンとスマホがあればこと足りる

大阪市 榎本日の出

婆ちゃんほうふで今日も家を留守

梅田まで行けば私は田舎者

家計簿が睨んでいます慶弔費

自慢です年相応の顔の皺

歩きましょ安い健康続かない

大阪市 榎本舞夢

バイトしてお金シビアになる娘
老人会二人で行く日多くなり
物忘れ互いに注意為合つてる
約束があるから朝も起きられる
雑壇を背に頑張つてる受験生

大阪市 大川桃花

ご近所の梅に見頃を問いに行く
ひと手間を惜しんだ味がノーと言う
根ほり葉掘り聞かれて嘘も混ぜておく
パラパラの雨教えよか無視しよか
老化少子化町内会が崩れ出す

大阪市 奥村五月

失恋もふられた彼を娘はほめる
混浴も遠慮知らずのおばあちゃん
断捨離も無能の夫捨てきれず
還暦の母が鏡を磨く朝
ワンマンの社長なぜだか泣き上戸

大阪市 笠嶋惠美

挑戦へ動けとにらむ福だるま
誕生日生命いのちいとしい花届く
無事生きて七十七の有難う
娘がくれる愛と温もり部屋に満つ
上品にもなれず下品にもなれず

大阪市 川端一步

酒抜きの話わたしは聞けません
ピッチャーを妻と交代して生きる
王よりも歩が好き明日に夢がある
数だけでおらが憲法変えさせぬ
酒封じ神もいました一心寺

大阪市 熊代菜月

今朝のモカ何時もの味で元気です
気にせずに貫つて帰る試供品
補聴器に頼る八十路のお付合い
好きなこと半分にする老いの知恵
今夜また貴方の夢を見るかしら

大阪市 小谷集一

ほどほどという人生にある極意
生きて来た道たしかめる脳回路
昭和一桁エンジンかけたまま傘寿
大器晩成百歳までの根競べ
誤作動のときめき義理チョコの微罰

大阪市 近藤正

四月馬鹿嘘つく元気だけ残し
ハゲタカはアベノミクスが餌場です
全国にノー・オスプレイ響きあい
二年過ぎ原発事故は闇の中
ソロモンの津波赤道越えて来る

大阪市 坂 裕之

大阪市 谷口 義

そう言えばそうだったよねだけの友
ひと区切りつけられそうで言ってみる

PPPなしで世界とどう対峙

年金を足して小店で細々と

攻められてやつと守りの大事知る

大阪市 佐藤 忠 昭

ヤレ安心五臓六腑に異常なし

後遺症嗅覚全く働かず

後遺症バランス悪く二輪駄目

二輪駄目逆手にとつて歩行主義

廃車して今日もテクテク歩いてる

大阪市 澤田 定子

旅立った友も国の借金案じてた

相部屋にお見舞の花ことわられ

再診は不要に安堵でも不安

体罰も教えとされた過去もあり

キャンプでは優勝ですと各チーム

大阪市 田浦 實

大笑いした後体軽くなる

振袖が今日は主役と闊歩する

虹のたすき掛けた生駒の得意顔

嘘つかぬ鏡と喧嘩する時も

なるようになれの心境勇気生む

NHK今日は修行になりました

竜宮へ行くまでは真面目に暮らしてた

なるようになつて片割れお月様

うんともすんとも言えないことでした

責任者は誰だ半月板でした

大阪市 寺井 弘子

妻の一言水に流せぬことばかり

お早うとダツシユで抜ける通学路

陽の光はじく泥んこユニホーム

これからはカウントダウン老い進む

趣味の欄苦手な書道書いている

大阪市 津村 志華子

押し車精いっぱい生きています

自己嫌悪なだめてくれる花の風

スタイルはどうあれ春の試着室

私の来るところで無しジャズ喫茶

もう歳とそんな弱音は吐くものか

大阪市 津守 なぎさ

旧友が五人揃うた旅の夜

風雪に耐え山茶花が告げる春

亀蛙財布に入れたゲンかつぎ

路のとうスーパード見る春が来た

追加年金大喜びを税が追う

大阪市 長井善純

人間に今年も牙をむく自然
一年中こころを春にして弾む
春がきた我が子ようやく正社員
ご近所の前では夫婦演じてる
子から孫夢を見させてくれる幸

大阪市 原田すみ子

春を待つ長い首から風邪をひく
街に無い闇をこころに人は抱く
潤いの無い都市を見るドライアイ
待つことを覚え楽しみ幅がでる
細い月を見る丸いままのわたし

大阪市 板東倫子

招かざる艦来る北方領土の日
現代の子に好かれてるサザエさん
あり余る金を持つて何故不幸
平身低頭は理不尽通すまでの策
一步出れば想定外の事ばかり

大阪市 平嶋美智子

自国語を思い出せぬと笑む義弟(義弟逝く)
卒寿すぎ義弟異国の土となり
もう開かぬトビラの前でただ淋し
油断した訳ではないが術もなく
貧乏性これが私にぴったんこ

大阪市 伏見雅明

面打てば小手ですっぱり返す妻
大蔵省を握る妻には叶わない
父の日を含めすべてが妻の日だ
口達者な妻に電話を渡される
妻ひとりの拍手があれば頑張れる

大阪市 山崎君子

シクラメン美しく咲く日曜日
仏法寺今年も焼栗車椅子
宝塚ライندگانズを楽しみに
通天閣上は赤だよ明日も晴れ
四天王寺夕暮れの鐘おごそかに

大阪市 山本加お里

太陽のめぐみに感謝句のもの
欠点もプラス思考で生きている
陽のあたる道を選んでウオーキング
良いことが待っていそうな金婚日
母でなく父にかけたくなる電話

大阪市 吉内タカ子

投げられた石の刺激で出る勝ち気
寒くても歩ける足が有り難い
節分でスタートします年女
北の国世界平和をつぶすなよ
野党の目アベノミクスは思案時

堺市 大久保 のん子

海外の旅ほしいまま世界地図

秒針の速さ眺めてひとりぼち

ここかしこ生きた証の傷だらけ

道草の長さが語る人間味

その昔ずしりと重い辞書をひき

堺市 大隅 克 博

長いこと休むと仕事したくなる

あほやから賢いあほになりにくい

結局はいつものやつをいつもだけ

一つだけ取れと言われて落ち着かぬ

年千回僕の食事をしてくれる

堺市 奥 時 雄

雛飾り娘は男ばかり産み

嫁が来て息子の話はたと止み

ご自慢の息子の嫁に歯が立たず

カッパ村カッパの話大真面目

捨てられぬソロバン定規ハーモニカ

堺市 加島 由 一

二月もう日記はたまにしか書かず

いい調子株元の値に戻りそう

お天気がいいので猫と日向ぼこ

女子力をアップに妻はデイケアー

惚けぬよう四文字熟語丸暗記

堺市 柿 花 和 夫

ギヤマンと呼ばばお宝めくガラス

背筋に元気をくれたいい笑顔

いい店だ客が新入り仕込んでる

私などとてもとてもと言う自信

水割りに浮いては沈む空元氣

堺市 源 田 八 千 代

厄除けの饅頭店に列が出来

義姉妹で介護ノウハウ教え合い

ジオラマ展で昭和の風情蘇えり

家族葬最後の別れ儘ならず

スポーツ界の暴力沙汰に呆れます

堺市 齋 藤 さくら

そのうちに機嫌直ると読まれてる

核を持つ国がお隣恐くなる

迷うたら友が背中を押してくれ

言い訳に私も歳と逃げている

こんな時母の写真に問いかける

堺市 澤 井 敏 治

啓蟄に首だし風邪をひく野心

かすみ草立場悟った自然体

手のひらにのる幸せがちようどよい

若い日の思い出語る木の校舎

節電に耐える軸足ぶらすまい

堺市志田千代

巳年だった亡母の年を数えてる
還暦の甥っ子にみる先祖返り

抜歯してムニヤムニヤムニヤの早春賦

ミスしても咎められなくなつてきた

二人いて半人前の家事こなす

堺市遠山唯教

山茶花の蕊が未練を抱いて散る

身綺麗にしてねと妻がやかましい

帰省する子を待ちわびて眠れない

聞き慣れた微酔いの足音を待つ

完璧よりバランスをとり老いてゆく

堺市内藤憲彦

言い訳は止めるビールがぬるくなる

外人も演歌大好き花見宴

お互の過失認めて水微温む

殺される訳じああるまい先ず一步

いよいよの時にギャグ言う底力

堺市西村りつえ

弾みで出た言葉責める世間さま

言いすぎて背筋ぞくぞく花の下

白酒よりワイン取り合うひな祭り

何着ても勝つことのない通り抜け

少しでもヒト科にほしい冬眠期

堺市荻野像山

三か月経つたら出よと言う無慈悲
髪染めて明日の夢を描いてる

若作りしてると気まで若くなり

晩酌の調子上がる妻の留守

お開きの声でゆつくりおじやとす

堺市宮本かりん

目を閉じて見てるあの人あの時を

相槌で心ほのかにあたたかい

弾んでるハートハミング漏れてくる

万歩計に怠けた数字示される

お人柄惚ぶ毛筆美しい

堺市村上玄也

探し物しているだけで時が過ぎ

ものぐさを自ら許す喜寿の坂

銚子十本空けたと言えたのは昔

だんだんと減つて晩酌五勺だけ

五勺でも飲まぬと飯が美味くない

堺市矢倉五月

音痴など治らなくても生きてます

モナリザの笑み真似ている悪たくみ

ジャンボくじまたもヒラリと躲された

湯けむりに時効の話盛り上げる

乗り越えた苦労話も露天風呂

堺市 山本半錢

御苦労さん自分を誉める日もあつて

転た寝は充電なのか 放電か

歳相応の恵みと思う物忘れ

引き際を心得ている顔である

満開の誘い重なる嬉しい日

池田市 栗田久子

誕生日老いは他人に祝われる

老いても女形ばかりの雛飾る

幸せな老いで健やかな自立

ぜいたくに背を向け今日は燗焼く

老いゆえのぜいたくだろう日々ゆとり

和泉市 横山捷也

前置きの長い野菜を買つてくる

覚えある香水の女同期会

兄妹会語り尽せぬ亡母の事

挨拶は犬の名聞いてからにする

あの人がやるなら俺もやれそうだ

泉佐野市 山本蛙城

ベランダの菜園お先にと鳥め

体罰に土俵の竹刀思い出す

大寒や糞虫になる夜具の中

気象だけ書いた無為の日の日記

私淑する方の賀状は捧げ読む

茨木市 島田誠一

そのうちに愚痴も飛び交う通夜の酒

逆立てた鱗も時がふやけさせ

新葉に追われウイルスまた進化

人事異動悲喜こもごもの春風

告発へ左遷恐れぬ太い眉

茨木市 藤井正雄

キャリアには遠いが温い仲間達

マラソンの腰に祖国の守り札

感情の起伏抑えに独り旅

流水に朝日鉏路の光る海

予定表ぎつしり詰まつてる元氣

大阪狭山市 矢野 梓

春一番黄砂花粉はお断り

断りが長長つづく説明書

会話するよう方言で来る便り

耳を貸すだけの慰めしか出来ぬ

生命線比べ合つてるティータム

交野市 森本弘風

酔うた目に湯上りの妻赤い鬼

飲み会でやつと素顔を見せる奴

アベノミクス揺り動かしたカブト町

日の丸の一本もない紀元節

披露宴今日一番と咲き誇る

河内長野市 植村喜代

デパートを回る気力もなくして

何べんも逃げて戦争抜けて来た

何あろうともう逃げられぬ八十四

ゲームに叱らればあちゃんに教えただけるの

いつの間にかシヨピングカー便りにしていた

河内長野市 梶原弘光

絶好の買い場といつもあとで聞く

鍋奉行の菜箸避けて御着席

神様がつれない時は仏様

裏ぶたにサウルナとある貯金箱

刺激物止められてから覇気が失せ

河内長野市 木見谷孝代

ヒーローに成り切つて見た紙芝居

何度でも同じ場面で泣くドラマ

整理箱いくら買つても片付かぬ

デパ地下で試食三昧買うはめに

あれこれと悩みエンピツ湿りがち

河内長野市 黒岩靖博

今しばし充電中の縄のれん

我慢の子練習はげみ金メダル

縁側で爪を切りつつ日向ぼこ

眠り呼ぶ列車のゆれた母の胸

迷わずに帰れるほどのはしご酒

河内長野市 坂上淳司

爺ちゃんも三浪したと孫宥め

孫娘よ花咲爺が付いてるよ

花散つた後に美味しいサクランボ

下りの方が速い気がするケールブルーカー

降り際に切符を探す嫌な癖

河内長野市 谷久美子

一難が過ぎて一難後絶えず

悪役を引き受けてから人氣者

肩の荷が降りて足腰弱り出し

孫達に負けて嬉しい背くらべ

忌わしい無差別テロに憤る

河内長野市 松岡篤

髪の毛で年推しはかる癖がある

回り道したから友がたんと居る

太鼓判だれに押したか記憶なく

寝顔見てパパ似ママ似でもめている

定年が無いのが恋の難しさ

河内長野市 水谷正子

立春を過ぎて手強い寒さくる

お歳暮のシクラメンまだ花盛り

家族皆達者何より財産だ

神様を拝む心に嘘はない

神風が吹くと信じて花と散る

河内長野市 村上直樹

岸和田市 堤 榎代

こだまする猫の恋唄浅い春

無言劇三日超えたぞ妻不気味

頑張った遺影へそつと大拍手

役降りて胸いっぱい春の風

十年日記卒寿の山を越えるまで

河内長野市 山岡 富美子

五線譜がみんな目覚める春の森

即席のコントと遊ぶ四月馬鹿

年輪という宝石を持つている

まだ小骨ささつたまの次の章

はいとノーだけで仕分けはできません

河内長野市 山室 光 弘

期待したドラマ無いまま一人旅

来る度に引き算したい誕生日

障害児育てみんなに感謝状

物騒な隣国ばかり気が抜けぬ

がんばりを捨てれば肩の荷が降りる

岸和田市 岩 佐 ダン吉

器用だが何か欠けていませんか

例えば私はきつと再生紙

また駄洒落気弱な僕になつている

惨敗もごころうさまと汗が言う

腹を決め話す意外な人やつた

安売りのチラシで今は走らない

美容院頭も軽く心まで

ストレスを飛ばす大声カラオケで

好奇心老いる私を支えてる

手料理を喜んでくれる人が居る

岸和田市 森 元 ふみよ

動けない歩けないほど着ぶくれて

体罰は戦中戦後盛りだくさん

さようなら振りむいた目に母映る

あの時に断わつた事今悔む

眉引いて一息入れてスパーに

岸和田市 雪 本 珠子

幸せの女神呼び込む笑い声

ときめきを忘れず老いと向い合う

久し振り故郷の風に逢いにゆく

システム化されて昭和が遠くなる

川柳で人生の師に巡り合う

四條畷市 吉 岡 修

ライバルが傷が浅いと見て帰る

そのうちに再逆転で妻に勝つ

ロボットが唸つてるのは電池ぎれ

山かけて当つたこともある人生

スピーチは自信あるのに口説けない

吹田市 太田 昭

喧嘩相手逝つて孤独に迫られる
追伸になると言葉が迷る
夫唱婦随まだ先がある八十路坂
絵手紙にゲンキとだけを書いておく
解凍をした正論が背き出す

吹田市 大谷 篤子

一期一会ありがとうには心ちよい
習つてる心に笑顔湧いてくる
愛されて私ピエロになつている
我家にも希望にもえる星ひかる
身の内の荒れた部分に春近く

吹田市 木下 敏子

寒いけどいい日にしたい靴を履く
合格の知らせに梅の花ひらく
折り合いをつけて上手に椿咲き
優しさにふれてほっこり羽根伸ばす
選挙戦もう走れなくなつた馬

吹田市 須磨 活恵

人並の暮し生ゴミそこそこに
遅まきに覚えたお酒美味なこと
本心を告げずに畳む春の傘
断つた後の切なさ抱きしめる
無になれず煩惱の灯がゆれ続く

吹田市 瀬戸 まさよ

ゆずが好きゆず茶ゆずジャムゆずポン酢
手間かけた梅干し今は貴重品
寒風に風の子いない街に住む
槍穂高登りましたよ見るテレビ
高齢者雪降らぬ地に感謝する

吹田市 野下 之男

アラアの神止めてくれないアルジェリア
よくもまあ遺体で返すテロリスト
体罰で成績上がるほんとかな
まあ良いかテレビで見てもパリの街
マスクして妻の小言が減りました

吹田市 山本 希久子

さくらさくら食べ残しなどせぬ世代
年のせい言われて言葉返せない
一センチの段差を脳に憶えさす
春へ春へともう引き返せない風よ
仮の世を生き信念曲げぬ椿の朱

高石市 浅野 房子

自転車よ何で歩道を走るのか
雪がちらつく露天風呂おことわり
キリキリ舞いてんてこ舞いは毎度です
醒めた目で親を見るのはやめなさい
この薬みんな止めたらどうなるか

高槻市 井上 照子

高槻市 島田 千鶴子

愛読書幾度も手にし拾い読み
道問えば案外優し強面

大切な話廊下で念を押す

三本の矢重いつとめを担つてる

大笑いしたのは何時か忘れてる

高槻市 指宿 千枝子

メジロ来て梅の小枝でおらが春

お日さまを味方に恐いものは無し

朝風呂に始まる旅のスケジュール

考えるより動き出す朝日和

お早うの行き交うゴミの日が温い

高槻市 片山 かずお

思うことあつて正論言い淀む

方向音痴わたしに地図は役たたず

本心と違う言葉でお付き合ひ

人柄の良さが滲んでゐるオシャレ

どっこいしょ呪文唱えてから動く

高槻市 佐甲 昭二

一流校挑む過信を見抜かれる

傾いた机ねぎらい会社退く

結局は社長を守る楯にされ

初対面愉快な人に乗せられる

恩返し溜った駅を通過する

太鼓打つ女子高生の心意気

転んでも今は笑つて済まされる

顔上げて心に老いを持たせない

寝転んで春の序曲を聞いている

春風の後をつけてくる黄砂

高槻市 初代 正彦

暮らしぶり相変わらずの有難さ

寒くても背筋伸ばせと冬の虹

七草の粥にほんのり春を知る

堅物も背広脱いだら丸い背な

あどけない孫の笑顔が家宝です

高槻市 杉本 義昭

雪しきり遠く聞こえる春を待つ

ドア開くみんなの笑顔みたいから

改築は延期にしようツバメの巢

浪人の机に母のにぎりめし

被災地も花が咲いてるホツとする

高槻市 左右田 泰雄

缶ビールプシュッと開けておめでとう

おでん鍋ゆつくりする丸い背な

八十路坂スローライフの老い二人

お座りが上手な犬のすまし顔

飾り気の無い物腰のしとやかさ

苦節越え温い拍手が鳴りひびく
年金を頼りに今日も鶴と亀

高槻市 富田美義

昨夜には触れず味噌汁あたたかい
誰よりも厄介だったのが自分

悔しいがやがて落ち葉となりゆく身

高槻市 富田保子

三つ四つ歳捨てて出る美容院
セーターにラブを編み込む頭文字

同窓会残り少なし名簿かな
たび浴衣この健康に感謝する

宅急便嫁の心を伝えたい

高槻市 峯村勲弘

世渡りが下手で人生綱渡り
T P P 中味分からぬ福袋

免許証返し老い行く身を守る
パワハラにオリンピックは遠くなる

樟脳の香漂う披露宴

高槻市 安田忠子

待合室昔話に花が咲き
同じ事件次から次と出る不思議

門つけて立派になつた一軒家
遊ぶため体大事に使つて

一人減り二人減りして時流れ

おもしろい話忘れず持ち帰る
一点にこだわり耐えている男

豊中市 江見見清

冬木立来年もまた会いましょう
また死んだ友の話になつた酒

寒い朝電車へ走る人多く

豊中市 藤井則彦

定年後は使い勝手のいい夫
肩の荷は下ろしてならぬ正念場

常識に挑む勇気が世を変える
寝顔にも心の中が透けて見え

プラモデルづくりに孫の真似をする

豊中市 松尾美智代

朝歩きところが澄んでくる0度
足も手もまだ元気で春を待つ

五十年の隙間を埋めてくれる孫
賑やかな私ですが寂しがり

春に向き笑顔こぼれる福寿草

豊中市 松村里江

脇役に徹するつもりがシャシャリ出る
矢面に立たされ自信出来て来る

雑魚なりにタンカの一つ切つて見せ
きつぱりとけじめをつけて修羅場去る

こぼれてもいいいりハビリの箸使い

豊中市 水野黒兎

謹呈の栞そのまま古書売られ
籀少し緩めて妻とロゼワイン
それぞれの濃さで朝夕モカの味
筆箱のちびた鉛筆昭和の香
千ピースのジグソーパズル嵌めて春

富田林市 片岡智恵子

老いてまだ画布描き足りぬ事ばかり
痛みの分かる人となら手も腕も組む
浅智恵の甘さ火傷をする株儼
エンディングノート私の生きた証です
縁切り寺女の火消し壺がある

富田林市 中井アキ

冬も良し六花が舞って銀世界
如月の暦ようやく春の音
眩きのサイト仰天するばかり
愛嬌に強さ秘めてた老姉が逝く
あやとりの訃報運んで来た鴉

寝屋川市 籠島恵子

絵手紙が寒い寒いとやってくる
フランスはマイナス五度とくるメール
家族葬でしたと二十日ほどたつて
アドバイスのつもり波紋になつていた
生きてゆく少し屁理屈言いながら

寝屋川市 富山ルイ子

久し振り会うて話がころげ出る
仲良しで場所取りすぐに埋められる
一人で行って一人で帰る文化祭
三十年ボランティアした話聞く
頑張つてのメール送ることしか出来ぬ

寝屋川市 森茜

往時茫茫再会のひと目を閉じて
正義とは魂荒さぶ世界地図
円空仏の笑みにゆるんでいくところ
おき去りにした遠い日の純情記
消去法したららのつぺらぼうになり

寝屋川市 森田麗

梅一輪向う三軒春の声
鎮魂の桜も芽吹く空の青
幼なき日兄の口笛摩訶不思議
影を慕いて爪引く兄の年忌くる
五年日記買うのに迷い出す余命

寝屋川市 山本三郎

ノルマから逃げて今では青テント
早々とノルマを終えて縄のれん
震災を忘れないためノルマ課す
白紙には抗議の意味も込めて有る
節電の意識も揺らぐ氷点下

羽曳野市 安芸田 泰子

馬鹿になるためには知恵がまだ足りぬ

炬燵守り今日一日をもて余す

啓蟄や老いもそろそろ穴を出ろ

豆をまく身内の鬼を庇いつつ

同居してスープはいつも冷めている

羽曳野市 宇都宮 ちづる

寒空に水仙凜と香を放つ

十年前歌えた十八番下手になり

眠れぬ夜本が睡魔を連れて来る

何かしに上がった二階で記憶よぶ

ときめかないもつたいないが聞き合

羽曳野市 徳山 みつこ

再びの小笠原へとドラが鳴る

点滴サマがじたばたするな慌てるな

こらえてね痛み代つてあげられん

もう寝ろよと言われぬ自由ふと淋し

幸せなことに明日も用がある

羽曳野市 永田 章司

卒業式仰ぐ恩師は辞めて居ず

破格値で店も売つてる三代目

官のミス責任所在うやむやに

波の音聞こえる土地は手放した

三寒四温梅香も連れてきましたよ

羽曳野市 吉村 久仁雄

縁あつて人に生まれたナマケモノ

たましいの時間ため息ばかりつく

書き足らぬ手紙が友に丁度いい

生き方を隣に置いて日向ぼこ

昼の月生き方下手がなならない

東大阪市 笠井 欣子

父の日はもういらぬよ三回忌

朝のパン元気出せよと飛び上がる

引出しの奥から父の候文

孫曾孫集う吾が家は汗が出る

ヘルパーの来る日は忙し部屋の風

東大阪市 北村 賢子

待ちきれず花の蕾に来るメジロ

心だけ十歳若くなれるフラ

冷蔵庫で芽吹く野菜のど根性

親くれた顔だ笑顔が続けよう

気付いたらテレビに文句言うている

東大阪市 佐々木 満作

点滴のベッドの上の所在なき

蓋開けて見れば案ずることもなく

病棟の窓から見ゆる世の動き

一つでも叶った夢があつたらか

願いごと何でも叶う夢の中

東大阪市 米田水昇

十五階のぞむ公園小さくて
ビル並ぶ通天閣は低く見え
手をかして送つてくれた感謝する
先生のご指導もつと受けたくて
人もよい川柳も好きほんわかと

枚方市 安達忠央

愛しあう二人でいたい柩まで
あの人の声晴れやかで気持ちよい
キャリアつむ名人のいる町工場
梅干しが恋しくなつたパリ三日
一輪の花でぬくもる我が書齋

枚方市 海老池洋

落日への祈り忘れたビル谷間
存在感わたしの音を立ててみる
真つ直ぐを通して四面楚歌の道
程ほどに空気を抜いて長らえる
もう一番欲しい余生の数え歌

枚方市 小林わかこ

ぎりぎりになつて踏んばる土踏まず
赤絨毯踏んで天狗の鼻になりはつた
足踏みミシン母が匂うよ捨てられぬ
口笛の嬉しい合図窓あける
勝敗のカギは明日の天気です

枚方市 丹後屋肇

トンネルにアベノミクスの灯が点る
寂聴法話笑い転げて響くなり
あれよあれよ吹雪く爆弾低気圧
天神さんおおきに届きました 春
ビバークの目が冴える満点の星

枚方市 寺川弘一

持主の素顔知らないコンパクト
にらめっこしたのは化粧しない頃
恩返しお墓参りを欠かさない
乗降客が消えるところは無人駅
神さまは遊びに來ない宇宙基地

枚方市 二宮山久

コスモスが揺れる里山ウォーキング
夕焼に明日を信じる病窓
頂点をきわめる趣味の孤独感
露天風呂好きで出かける鞍馬旅
堂々といねむりできる妻の膝

枚方市 二宮紫鳳

新年会杯を重ねる声の艶
ほころびを愛で繕う老夫婦
一呼吸おいて笑顔の重さ知る
ストレスを趣味で流して老い楽し
愚痴一つ夫婦で分かつ長い夜

藤井寺市 伊 藤 アヤ子

御酒落して鏡をのぞき紅を引く

いつの間に放かされていた好きな物

三人の息子それぞれ親想い

寒の入雪もちらちら犬さわく

梅の香に誘われてゆく天満宮

藤井寺市 鴨 谷 瑠美子

春の来る話ばかりを聞きたくて

古い帽子もお似合いですね御堂筋

人肌のぬくみで春の風が吹く

原点に戻ると考えがかわる

ラストオーダーおそろく玉子かけご飯

藤井寺市 鈴 木 いさお

小言言いながらもりんご剥いてくれ

少しだけ栄光の日もあつたのだ

父親の役も熟した母だった

逃げ道を断たれ覚悟が出来ました

鼻の低さをずっと気にして生きてきた

藤井寺市 高 田 美代子

誤字脱字人生なんてそんなもの

好き嫌いあつて個性が貌を出す

女の子だからと躡られて今

中之島辺りわたしのテリトリ

唇の端に残った相聞歌

藤井寺市 津 田 シルク

黄泉の国へ喧嘩相手が旅に出る

人生に組み込まれてるこの別れ

めそめそとしない私は世帯主

地区の知らせ独居老人なんだつて

喪に服し春の陽射しを通過さす

藤井寺市 増 井 ヨシ枝

百一歳温い笑顔を残し逝く

いそいそとメジロのみかん買いに行く

日向ぼこメジロの所作をみる至福

車椅子膝はわたしの机です

小山明子やつれていても美しい

藤井寺市 俣 野 登志子

味加減妻の機嫌が左右する

友の長所貫う少しアレンジして

楽しみなテレビ見過す長電話

白黒を付けるほどでもない噂

釈明はしない悶悶と夜が更ける

藤井寺市 吉 田 喜代子

願いの絵馬読むのを神は忘れてる

広い土地持つているから欲しい鳥

通販に頼んだ毛布まだ着かぬ

七回忌やつと夫の靴も捨て

トヨさんの詩集を抱いて生きる糧

藤井寺市 若松雅枝

俎板が弾んで春を奏で出す
先駆けて咲く蠟梅の香気満つ
寒い日の幸せおでん煮えている
買い忘れ子にケイタイで頼んどく
待たすのが嫌で私が何時も待つ

松原市 森松まつお

初春や七福神に会う淡路
大鳴門渡り玉ネギ食べへに行く
渦の道私は高所恐怖症
定年後偶数月が好きになる
野菜高いたしかたなし肉にする

箕面市 出口セツ子

忙しく動いてるのが性にあう
幸福の証洗濯物踊る
人間の温みリタイヤ後に解る
結婚と孫を見るまで生きてたい
惚けぬよう仕事も趣味も続けよう

箕面市 広島巴子

めでたいな友と弥次喜多伊勢詣
神木に耳あて聞いた御託宣
粕汁の残り朝からほんわかと
転勤の子が少しだけ近くなる
柚茶から梅茶に替えて春を待つ

八尾市 高杉千歩

絵本から抜けてきたようケアハウス
図書館の本朱線が邪魔をする
チャレンジをせよともう一人の私
スパゲッティ箸を置かない店が増え
無洗米だったことをすぐ忘れ

八尾市 寺川はじむ

あいまいは美徳自信を持ってジャパン
激安ツアー別料金がへばりつく
うやむやにしようこれらも処世術
被災地に気遣いながら小雪舞う
仰ぐ師の気高い遺志を継ぐ歌舞伎

八尾市 宮崎シマ子

聞き惚れる美声もあらず新年会
猫座る場所の陽当り風当り
あの人この人不眠症の種だ
配食に老いの気楽な台所
幸せの返事くるまで戸を叩く

八尾市 村上ミツ子

リーダー照射ちよつといくさのにおいする
体罰へおしりぺんぺん憚られ
癒してくれる母の形見のすみれ
うまく食べられよろこんでいる魚
時間やりくり上手に遊ぶおひと

大阪府 桑田 ゆきの

掃き繋ぐ隣り同士で雪の道

おやおやとからくり箱の謎覗く

おみくじの大器晩成信じ切る

机上這うマウスが春を近うする

列島へ大気汚染で攻めて来る

大阪府 野田 栄呼

四股を踏む数であしたが見えて来る

受話器とる思わぬ朝の長電話

生きもののよりに感情出る怖さ

今を生き過ぎた時間は惜しまない

美しい日本語背筋びんと伸び

大阪府 初山 隆盛

二ん月は早い逃げ足老いの坂

日暮れてもしあわせごっこ終らない

大いなるクルーズプラン波高し

検討をしますといつも空手形

領海にパフォーマンスを見せる船

大阪府 米澤 淑子

飽食も飢餓も同じ二十四時

i P Sで再生したいとこだからけ

最前列で聞く成人病のはなし

立ったままズボンが穿けるありがたさ

大笑い脳蘇えるアルファード

美作市 福原 悦子

郷里の絶句は脳の中にあり

年老いて体力ためす遍路旅

窮地ほど母の切なさ底知れず

残り布寄せて活かす夢を持つ

思いつきの郷里にある素足

美作市 山本 玉恵

薄いえにしの恋に酔わせて風は春

泥舟に命あずけて今を出る

逢えるなら行きまます円周のかなたでも

遠き日の縁を恋うる風の音

もうあとは追うまいついては行けぬ道だもの

竹原市 石原 淑子

巨星墜つ宇宙歌舞伎の夢を観る

今日の倅卵とトーフ魚一尾

愛絆指輪が身元証明を

姉の遺影ピンクの薔薇がよく似合う

入学式に合わす桜の感の冴え

竹原市 岩本 笑子

サイコロを振って土筆を呼び寄せる

一万歩歩く美術館はしごして

茶柱を久しく見ないティーバッグ

芽を出せよ大根四粒ずつ植える

五年目のガンはゆつくり眠らせる

宇部市 平田実男

まだ傘寿九割五分が自分の歯
娘から電話嬉しいけど怖い

手土産を提げ宿題を貰うて来

見ない振りしてストレスを溜めている

ライバルを親友にする退社ベル

鳥取市 有沢せつ子

露のとう苦味に春へジャンプする

受験子へそれ風邪ひくな食べなさい

新聞の切抜き帖に問うレシビ

出不精になつて鈍さが足に出る

寒がりの人らし犬にコート着せ

鳥取市 池澤大鯨

妻が外出メモのひとつも残さない

言伝ては電話のそばに置いたまま

書き込みがある付箋がついたまま

過疎の村鳥はみんな出て行つた

鳥無き里鳥の真似するエイリアン

鳥取市 奥谷彩子

震度六にも父の柱は耐えそうだ

太陽と土大好き軍手干す

朝の茶柱期待のままに日が暮れる

辛口ジョーク後でゆつくり効いて来る

本音吐く穴をこつそり掘り直す

鳥取市 加藤茶人

アウトロー少しやつかみ抱いた愚痴
商魂は2円を負けて得を取る

気持ちでは負けぬ行動力で負け

ワンコイン亭主で妻が起きてこず

うなずきは興味半分かも知れぬ

鳥取市 岸本孝子

ありがたや雪の少ない冬を越し

出不精を春の陽差しに叱られる

わらべ歌唄うと亡母に逢えそうで

同居して三猿とおすむつかしき

幸せの尺度夫婦でも違い

鳥取市 倉益一瑤

ジェラシーが鏡の裏に住む寒さ

年賀状の隅に薬味をちよつと添え

膿出した途端しぼんだ力こぶ

初夢の弁財天はわたしです

余命表たつぷり遊び入れておく

鳥取市 鈴木一弘

信用がゼロになります卒寿坂

五七五痴呆予防の置きぐすり

絵ころががあれば美人になれるかも

自己流が消えてなくなる習いごと

引越して自分史めくる九十年

鳥取市 高 浜 勇

聞こえないふりする耳にささやかれ
玄関のカガミの顔に反省す

リタイアの何をせずとも陽が暮れる
脳ミソに点滅してる黄信号

ネットから今日も貰った生きる知恵

鳥取市 竹 口 清 信

もはや手も口も出すまい嫁にさす

またねとは言うが会えない人みたい

平凡に徹することも難しい

いつあるかわからぬことが気にかかる

あの人は俺の気になることばかり

鳥取市 土 橋 はるお

お隣の犬の礼儀を見習えよ

四股踏めばよたよたしなくなるんだよ

負けるから無闇に争わぬことだ

寄付帳の一番先はいやだけど

俺んちの山に瓦礫を捨てなはれ

鳥取市 永 原 昌 鼓

年金にボーナス欲しい医療づけ

新しい手帳今年の夢を盛る

この世から逃げたい時もあるヒト科

正月も盆も介護に手が抜けぬ

介護する胸に天使と魔女が棲む

鳥取市 中 村 金 祥

まぜくると平和の海が濁りだす
不意打ちを食らい情報かき乱れ

部活動本気でしても殴られる
苦労した夜学の道が懐かしい

手前味噌聞いているうちは大丈夫

鳥取市 夏 目 一 粹

湿ってるマッチは干してから使う

老けたなあ鏡見るたび歳だなあ

芋の子を洗うと少子化を思う

貧しさに勝つため学び来た昭和

そつとしておいてやるから舐められる

鳥取市 西 川 和 子

輝きも失せつつ喜寿を通り過ぎ

輝いた事も無かったなと思う

蛇の衣財布に取めくじを買う

何事にも激しい人とお友達

大雪警報外れ雨風強くなる

鳥取市 春 木 圭 一 郎

まず一步踏み出す勇氣何故持てぬ

やり直しいつになっても遅すぎぬ

挑戦の人生何も悔いはない

思い立つ時がいつでもスタートだ

命ある限りこの道続いている

鳥取市 平尾 菜美

よろしくと言い訳笑い流してる
モチベーション下げて世渡り模索する
緩みやすい紐も角ならよく縮まる
親よりも先に逝けないこの不況
すつきりの汗に虜の後始末

鳥取市 深澤 千恵子

あの頃は胸もわくわく帰り待つ
いつだつてもしものは親だのみ
すぐ折れる弱い心が老いを呼ぶ
学ぶ事まだまだあると背を伸ばす
二つ三つ年をさば読むアンケート

鳥取市 福永 ひかり

くち三つ瘡という字は恐ろしい
下手に口出して回ってきたお鉢
願わくはいつも口角上げた顔
お喋りにお茶にフル回転の口
滑らかな口に相槌入らない

鳥取市 福西 茶子

老眼鏡かけても知らぬ字は読めぬ
スケジュール無いので今日は和服着る
半径五キロ病院もコンビニも無い
グータラをします陸月予定なし
百メートル走る自信はある七十

鳥取市 細田 裕花

雪の日はわくわく本を借りてくる
想い出が乱反射する冬木立
冬の絵にボカボカ日差し株上がる
都会人に学ぶ田舎の活性化
見取図は花とやすらぎ老人ホーム

鳥取市 前田 楓花

赤ちゃんを抱いているかと思たら犬
萌木色私も萌える春が来た
腹割って話した友が今は敵
イビキかく犬の幸せそうなこと
慌てると次の一手が出てこない

鳥取市 宮脇 道子

曾孫の写真を囲み春を待つ
矢の様に過ぎて春八十三
綺麗でいたい八十過ぎて夢をもち
食べものを沢山買って戦中派
友人の書いた仏像穏やかだ

鳥取市 森山 盛桜

利口ではないが小利口だと思ふ
今咲いた花に二心は見えぬ
さんすうの頃は秀才だった僕
捕虫網で捕ろうかPM2.5
拳骨も神通力も変わらない

鳥取市 吉田 孔美子

春の鞍競馬のファンになれそうな
潰されているまぎれもない小蝮だ
地を這ったどんな運にもへこたれぬ
よたよたの同級生を凝視する
運決める肩に一手間かけて発つ

鳥取市 吉田 弘子

警報の雪へ野菜の備蓄など
陸月なのに別れの涙多過ぎる
認知予防回想法で試される
異常気象だったか雪が少な過ぎ
年の差婚有名人と限らない

鳥取市 横田 春名

愚痴煮込みおでんグツグツよく煮える
干支飾り十二年後には会えないね
針供養繕いだけの針となり
眉きりにこにこ自説曲げぬ人
さざ波のような諍い老い二人

倉吉市 猪川 由美子

戦々恐々アベノミクスで世が変わる
愛のムチいやパワハラの体罰だ
大震災苛酷だんだん忘れられ
実弾じゃなくブログの上で殺される
雪マークに一喜一憂老いの冬

倉吉市 牧野 芳光

ライバルの列に入ってから孤独
寒気団に重しをされて動けない
知っていることも目を見て聞いておく
春を待つカラスの羽根に艶がある
あしたする楽しみ仕事やり残す

倉吉市 山中 康子

待ち侘びた産声天をつらぬいた
ひい孫の写真眺めてえびす顔
早朝のくりや五分もくるえない
現役の気分が抜けず中ぶらりん
果てるまでお供をしたい川柳塔

倉吉市 山本 玲子

一泊が限度になった老いの旅
落ち葉踏む音のこだまか森の音
箱庭も芽吹きはじめた冬木立
春陽背に失敗談も尾鱗つき
春炬燵話上手に聞き上手

米子市 後藤 宏之

この舟でよかつたのかなこの旅路
腹の立つ時は鏡に高笑い
試しがいあると見込まれお付き合い
女子会もビールの後はコップ酒
都合よく雪になったらまた会える

米子市 後藤 美恵子

新成人慣れぬ草履で歩み出す
構想を庭師は棒で書いてみせ
寒中にこたつで見てる庭づくり
試飲試食デバ地下巡りやめられぬ
早いレジ選んで並ぶ主婦の勘

米子市 高田 振作

試着室鏡だけ知るポーズとる
試着室鏡が褒めて買わされた
どっこいしょ掛け声かけてふらついて
飲み放題時間制限あわてます
断捨離にされてたまるか一張羅

米子市 竹村 紀の治

バリアフリーに慣れると蹟く一センチ
相席がちよつと嬉しいひとりカフェ
塩辛に唆されて飲み過ぎる
日本海見えて車掌の国訛り
年寄りが元気で文句有りますか

米子市 中原 章子

明るい世暗い話が目立つだけ
安全と安心する気別物だ
たまたまに過ぎぬ遭遇せぬ地震
たまげたなインプラントを勧められ
どうなるか分からぬ未来楽しみだ

米子市 吉田 陽子

ノックする春を素足で出迎える
足のとこ無くし辛抱欠けてくる
やんわりと惚けて地域に溶けている
ツクシ発見前向きにギア切り替える
知りたがり出たがりアンチエイジング

米子市 成田 雨奇

正月も三日過ぎれば退屈だ
年賀状自分の位置を確かめる
今にしてわかる八等星だった
天狗には自己分析ができないな
読めないとわかる本から捨ててゆく

鳥取県 石谷 美恵子

お喋りの苦手な友は筆がたち
神さまの情で少しずつ惚ける
ありのままの私でいよう飾るまい
守つてたつもり守られていた私
正直な鏡へわたしムツとする

鳥取県 岩崎 和子

雪もなく小花たちさえ顔を出す
我が齢とつくに捨てて紅を差す
八十路など飛んで行け行け朝の紅
心なか愛のさざ波ときに揺れ
セーターも赤着て元氣ルンルン

哀しみはうすれ想い出になつてゆく
弱虫ととつても強い人が言う

鳥取県 斉尾 くにこ

理屈では勝つた私が鬼になる
化粧水たつぷり朝は蘇る
灯を消せばフラッシュバックする笑顔

鳥取県 竹信 照彦

節分の爺ちゃん鬼に福は内
右肩が上がる総理の外交度
今冬の雪は山陰避けて降る
年金は下がり消費税は上がる
アベノミクスただ今シャボン玉上がる

鳥取県 西谷 悦子

人生の見取図刻々と変わる
「気を付けて」の言葉かけると落ち着いて
五線譜が待ち望んでる休止符よ
落ちるまでのいのち二月のぼたん雪
髪染めてすこし若さを主張する

鳥取県 松川 行男

節分は柔かな親も鬼面つけ
節句雛飾る仕舞うも急かされて
窓口で当りますよう何度聞く
空模様窓を開けずにテレビ見る
平成になつて気づいた遠い島

経験の詰まつたばばの知恵袋

鳥取県 山下 節子

近いうちと言われ待ちどおしくなる
三面記事凍る心で読んでいる
復興の原点ヨイトマケからだ
その内に気が付くだろう親の苦勞

鳥取県 山本 正光

寶石は似合わぬ女で手が温かい
マイカーはボンコツだけよく馴染む
尖閣と竹島その後どうなった
核抜けばスッポンポンの困らしい
葬儀料安くなるまで生きてやる

松江市 石橋 芳山

繋がりのどこにも愛がないのです
スマホから零れる乾き切つた砂
企みが進んで艶のである尻尾
捏ねくつて元の話はなんだろう
パフォーマンス全て私の味である

松江市 小川 注湖

学ぶこと何んと多い今八十路
元気かと聞かれて見せる電子辞書
にほんうなぎごめんあんたを食べ過ぎた
少しづつ折れ合つていて家平和
ひとりっ子食卓おやつ帰り待つ

松江市 川 本 畔

軽いコート一枚探す雪の駅
西陽射す壁のあたりが温かい
こんなにも二月の夕日親切な
夕暮のほんの少しが躊躇して
思い切り笑えて泣けて元気なり

松江市 錦 織 禮 子

盲導犬乗客よりも賢い目
父逝つて箱入り娘奮起する
冬のマフラー満中陰の送りもの
怠慢を制しきれずにいる炬燵
吉報を両手に抱いて友が来る

松江市 松 本 知恵子

寒鯉が動かず春はまだ遠い
庭に来る目白と話す定年後
我微力一寸先の闇見えず
一線を引いた友チヨコブレゼント
運命で結ばれている線ひとつ

松江市 松 本文子

段々畑のタンポポまだか行つてみる
緊急入院 私も不死身ではなかった
大寒の水で薬を飲んでいる
花の芽を包んで春はまだ遠い
此処まで歩いたこれでいい ここがいい

松江市 三 島 凜 丘

常識の壁に思考を阻まれる
止まり木で寄り添う鳥はみな孤独
指を折る詩はこころの散歩道
そよ風の日々が続いている不安
綱引きの綱を放してから自由

出雲市 伊 藤 玲 子

絵を架けて青春の日を呼び戻す
港の絵二人を描けばいつの日か
肩に乗るやわらかい陽は春だろう
ホイッスル吹かれるまでは遊ぼうか
タクトなら嫁に譲つて医者通り

出雲市 岸 桂 子

円満な人のレールは軋まない
焦るまいもつれた糸は時が解く
嫌いな人にゆるいおじぎをしよう
子の描くレールは宇宙へと伸びる
壺に花満たし自分をなぐさめる

出雲市 小 白 金 房 子

とんど火へ集うお神酒を回し呑む
月参り氏神様へ灯を点す
久しぶり和服と出会う春の下駄
杵の餅心の不満丸くもむ
鬼払い雛様かざる春の部屋

出雲市 多久和 敬子

子の帰省箸も会話の仲間入り
懐メロで昭和の暮し呼び戻す
バリバリと働き終えた父の靴
一肌脱いだ息子の背中頼もしい
ぴちぴちの肌アルバムに眠ってる

出雲市 竹 治 ちかし

えこひいきしない神にはまだなれず
太つても痩せてもダメという暮らし
ライバルとスーパの冷める距離に居る
生かされたような顔して生きている
想像の世界に高く建つ社

島根県 伊 藤 寿 美

無くしたものの大きさ知った長い夜
築百年バリアフリーにして独り
飾り窓つい幸せな振りをする
母の巣にもう戻らない子の羽音
古書市で見つけた過ぎた日の欠片

高知県 小 澤 幸 泉

民族を二つに分けた丘に立つ
四十年お世話のみならず新興地
ふるさとをつくる手と手を握りあい
初春や重い聖書の一ページ
逃げることを止めようとても疲れます

東かがわ市 川 崎 ひかり

塩加減絶妙でした亡母のカユ
輪郭が玉虫色になる加齢
いつか来るパントマイムを覚悟する
輪廻転生やはりあなたの妻になる
知らぬ間に小さくなつた泣きボクロ

松山市 高 橋 宏 臣

春の詩せめてひとりの驕りとす
野の花に埋もれて息をひそめたり
ひとまわり違う男の爪を切る
薄紅色の楯形のままで落ち
夏館シリウス盗み易き天

松山市 古 手 川 光

核よりも今日食う米が欲しかろう
黄砂くるおまけPM2.5
空気清浄機メーカーうふふ うふふふ
唯我独尊周りがみんな車間距離
新市名昔々を語らない

松山市 宮 尾 みのり

世代交代老いた発言権が無い
押して退く人も宇宙も持つ輪廻
想定外になって花束宙に浮き
華やかなブーケに蘭は似合わない
やっかいと思う正義を押し通す

大洲市 中居善信

しがらみを逃れ釣り糸垂れて午後
出来の悪い息子と思ってはいいない
日めくりは潮の大ききだけ覗く
躊躇った杭がいまだに杭である
パソコンの前で一日が過ぎている

熊本県 岩切康子

旅思い出CDにしてくれました
見舞ったが分かるかどうか分らない
空腹へ美味しいものよ残り物
眼が弱り専ら紫に興味持つ
友が友誘ってくれる有難さ

唐津市 井上勝視

老農の働く棚田陽が匂う
米粒の一ツ一ツに陽を思う
太陽が何時沈むのか塾カバン
肥後守子供と話してくれる
寒の戻り見極め春が走りだす

唐津市 坂本蜂朗

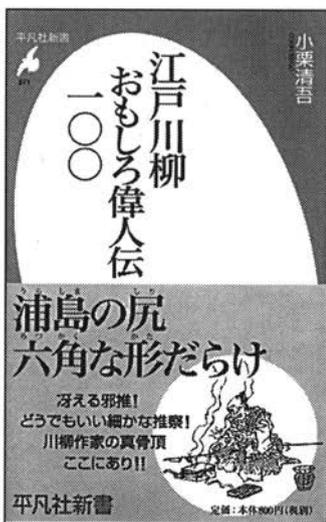
襟合わせ綻び出した春の顔
雪の朝カラスの何と多いこと
授乳する母が絵になる掘炬燵
神神が平和に同居する日本
楽しいよ雲の上から降りといで

(山口高明さんの作品は74頁にあります)

江戸のヒーロー、98人と1組と1匹を可笑しがる！

『江戸川柳 おもしろ偉人伝 一〇〇』

小栗清吾著



目次

- 第一章 女形のはじまりは日本武尊!?
- 第二章 江戸っ子は人真呂で目を覚ます!?
- 第三章 清少納言は煙った女だった!?
- 第四章 弁慶はお出かけ前に大忙し!
- 第五章 元旦に、とても迷惑な一休さん
- 第六章 生煮えの五右衛門、一首ひねる
- 第七章 家康はトラの化身だった...?!

平凡社新書 定価: 本体八〇〇円(税別)

川柳塔の

川柳讃歌

100

木津川 計

懐メロという故里でひと休み

牛尾 緑良

「かにかくに浜民村は恋しかり思ひ出の山
思ひ出の川」として啄木の故郷は生き続けた。
八木重吉のふるさととは「ふるさとの川よ／ふ
るさとの川よ／よいおとをたててながれてあ
るだろう／母上のしろい足をひたすこともあ
るだろう」と「母上のしろい足」と結びつい
ていたのである。

山や川や母だけではない。懐メロという故
郷があると緑良さんは詠む。この故郷のある
限り、われらの青春は永遠である。

お隣の葬儀も知らぬ家族葬

増井 ヨシ枝

葬儀を知らせる町内会の回覧板が事後通知
に変わっていったのは三、四年前からだった。
その通知もこのころなくなった。

僕も家族や「上方芸能」編集部に申し渡し
てある。僕の死、その一切の通知は家族葬終

了後三日を経ていたすべし、と。

今号、中原章子さんも「家族葬友の葬儀も
知らぬ間に」と。葬式の激変である。規模の
縮小でなく、お寺離れの深刻をこの国の仏教
界はまだとらえて得ていない。

古希過ぎて一步踏み出す心意気

初代 正彦

菊池寛の「藤十郎の恋」である。天下の
美男子が茶屋の女将お椀に偽りの恋を仕掛
ける。「われらも今年は四十五じゃ。人間の
定命はもう近い。……藤十郎の恋をあわれと
は思わぬか」。三百年も昔、男の定命（寿命）
は五十年ほどでしかなかったのである。

星移り、全国一長命の長野県人は男が79・
59、女は86・35歳に達した。だから正彦さん
は古稀過ぎて軒昂、その心意気を称える。

今年の夢スタダブルに似た恋を

川端 一歩

称えるべきは一歩さんの夢をもである。こ
の人格者にしてスタンダールの恋愛論を叶え
たいと言うから僕は嬉しくなって見做おうと
思ったのだが――。

しかし一歩さんにはジュリアン・ソレルで
あるよりは、「カサブランカ」のリックの恋
が似つかわしい。「君の瞳に乾杯」したかつ
ての恋人イルザの夫はレジスタンスだ。彼を

亡命させたラストの緊迫。リックを名演した
ハンフリー・ボガードが一歩さんに似る。

掛けまいまだ手付かずの明日がある

福井 菜摘

「灯を消して何はなくても明日があり」は
どなたの句だったか。明日に賭けたのも「明
るい日」と思えばこそ。それはまた「手付か
ずの明日」でもあったのだ。手垢にまみれた
昨日、今日と絶縁し新境地へ向かおう。

思えばわれらは「手付かず」の処女地を開
拓する欲持つ人である。初体験の老境をだっ
たらときめきながら迎えようではないか。菜
摘さんと往くピカピカの老春である。

開封したら灯りが点きました

木本 朱夏

「パツと目をひらくと好きなひとがいる」
そんな朝を、かつて番傘の名花（いまは至宝）
森中恵美子さんはうたつて幸せだった。

朱夏さんにも暗いところに閉ざされる日が
あろう。そんなときに点つた灯である。なに
もなにも不意のシーンは薔薇色でありたい。

この「讃歌」もついに区切りの一〇〇回。
朱夏編集長から封書が届いて開封したら、
パツと灯りのつもりが「継続せよ」と。致し
方なく、へこんな男でよかつたら命預けます。

（「上方芸能誌」発行人）

自選集

小島蘭幸

三宅保州

小遣いをくれるやさしい娘が嫁かぬ
腹筋の弱さがもろに出る噓
パレンティンチョコは飾っておく書齋
爺のかたちで玩具売場に立っていた
墓建てておく仏壇を買うておく

前 たもつ

宮西弥生

非難せず立場になつてする批判
今ごろに父母の大きな愛気づく
一步下がれば相手も半歩下がりに出す
人間を忘れぬように生きていく
銃よりも聖書はきつと重いはず

政岡未延子

八木千代

陽気な服で少し私を前に出す
川柳に誘うやましい仲でない
私の根っこ元々陽気です
女子会に出ると陽気な耳になる
耳も黄昏時々木偶の坊になる

咲き終えて木から離れただけのこと
しばらくは仰臥のまま眠らない
移りゆく空の色など愉しんで
紅梅の小袖にはしゃぐ傀儡たち
順送の春には春の花ごろも

花ごろも

八十田 洞庵

重宝な口から仏も鬼も出る

芸盗む意欲持つ弟子目が光る

役得が一番前の席に居る

ライバルへ妬心の虫が胸に棲む

刃こぼれを研いでも過去の傷癒えぬ

両川 洋々

飢餓の子よ今日は昼めし食えたかい

凍てついたハートを溶かすのは愛だ

愛犬が僕を主人と認めない

貧乏神は先代からのつき合いだ

板尾 岳人

さわやかに僕を騙してくれたひと

ふり向いてなむあみだぶつ母を恋う

五目めし懺悔の鐘が飢えている

あんぱんが好きで安らぐ病む乳房

ちぎり絵妻を裏切る紙風船

奥田 みつ子

きらきらといたずら探す子の瞳

悪女にはなれそうもない丸い顔

表向き悪女で通す賢夫人

時代とや女ごころも様変わり

記念イベントみな力の見せどころ

河井 庸佑

同じことまた喋り出す祖父の酒

行程と言う気遣いが有難い

連休明け待って出掛ける老いの旅

名刺の庭止め石に向きを変え

口滑り冗談ですと紛らわす

川上 大輪

掌に大仏様を乗せてみる

緞帳の向こうは砂漠かもしれない

カタカナも漢字も同じ薔薇ですよ

思ってるだけでやる気はないらしい

小西 雄々

被災地で頑張っている赤い糸

小鳥にも届けてみたい愛の歌

ダイヤ婚すぎても火の息で走る

積雪にじつと我慢の残り菊

曼珠沙華ともに泣きたい人を恋う

斉藤 荔

大山の雪の匂いの中で会う

優しさもそつと包もうオムライス

千羽目の鶴がひよつこり飛びそう

剪定はりんごの樹々と語りつつ

少年に貰うた種だいい芽立ち裏庭で春を奏でているスマイル

塩満敏

本年も百薬の長呑んできます
その内に新日本の春が来る
新米はやっぱりうまい香ばしい
長生きがしたくてデイクアに通ってる
早朝の散歩空気のうまいこと

新家完司

指先に靈氣二月の坐禅堂
底知れぬ闇に向かつて結跏趺坐
自転車は役に立たない上り坂
誤作動が増えた老朽脳回路
ウエルカムこころもバリアフリーです

恒松町紅

杖をつきまだベンを持つ欲がある
世代にはついて行けない老いの足
顔色がいいねと肩を叩かれる
伝統がこわれ冷たい風が吹く
湯気の中喉が唄ってみたくなる

津守柳伸

早春や針供養から雛送りに
超頑固予防注射はしない主義
好き嫌い言わない老母は戦中派
謎解きの興味しんしんサスペンス
去年はどうにか切れた鏡餅

遠山可住

年金へサプリメントの総決起
カタカナへわからぬままに拍手する
家計簿に乗らぬふる里が旨い
てっぺんの柿はカラスに置いておく
お互いに歳は聞かないことにする

都倉求芽

冬の陽へ動くものなし城下町
しがらみの重さか雪が降りつもる
勝敗の鍵は相手も握ってる
しりとり最後の後は夫婦のあみだくじ
生き下手でいいのだ世間はあたたかい

土橋螢

珈琲に砂糖がとける春隣
国債で埋める復興予算案
月光に照らされ罪が重くなり
三月の巳年生まれの運勢は
特選の句を短冊に書いておく

西出楓栞

笑わぬ日重ね着してもまだ寒い
関心ないふりをしておく下心
これも愛味噌汁に具を入れすぎる
代読で代理受取る授賞式
ぶつかって見れば意外に広い胸

温故知新

『清水白柳遺句集』より

旅のつれづれ

雪国へ来て一日で雪に飽き

暮やや傾きてありぬ涙流るる(展巻)

ひとり来て静かな桜の下を撰り

幻想の女性天主の前に佇つ

姫だるま道後のひとに似ておかし(今治にて)

夕陽燃えてなすこともなき独り旅

ひじかけへ空気枕の長い旅

サンマの詩紀州は南受けた国

似たような景色に飽いて家を恋う

故里はありけり切符買ひ急ぐ

春日遅々として仁王さんねむくなり

濡れた砂握り遠出を悔ゆる日よ

周遊券寿という字がまぶい

釣鐘の余韻と共に坂を降り

ひとり旅して真夜中のぬるい水

画心があつて連休旅にいる

仁王門柿売る店に人が居ず

猿に似た顔と出合うた滝の道(箕面吟行)

井笠川柳会 第14回 笠岡大会

とき 5月25日(土) 9時30分開場

ところ 笠岡市保健センター(ギャラクラシーホール)

岡山県笠岡市11番町1-3

TEL.0865-62-5701

事前投句 【 職 】(選者3人による共選)

久本にい地・恒弘 衛山・鴨田 昭紀

応募方法 2句並記 1000円と共に4月末必着

投句先 〒714-0081 笠岡市笠岡2289

井笠川柳会 戸田さだお

TEL.0865-62-6200

当日投句 各題2句

「忘」久保田 半藏門 選

「長」前川 千津子 選

「集」矢沢 和女 選

「踏」小島 蘭幸 選

高木 勇三 選

当日席題

参加費 2000円 (昼食・発表誌呈)

主催 井笠川柳会

林 瑞枝

苦笑い上手な平和主義者です
仰天の爆笑もある組閣劇
稽古した笑いで待った定年日
さあみんな笑えと女装ののど佛
赤ちゃんのニッコリ春の必需品
ロンドンには良かったと笑い良い土産
愛想良い赤いセーター名博士
競争中は修学旅行も米持参
美味しいと缶コーヒーで友と逢う
神様の靴音響く地底から



西出楓楽選

大阪市 栃尾奏子

大鍋で煮含めたるは冬の愚痴
赤い実のひとつは私の本音
失恋に効きますチョコと長電話

私はそれでも誰か愛したい
あのことを許されたくて来た花野
風ふわりどうぞと春の縄電車

富田林市 関 よしみ

車間距離その範疇に愛がある
言霊を一つ散らして温い風
流暢な嘘に檸檬絞り切る
ポケットのロマン時おり確かめる

五線譜で踊るわたしは四分音符
言葉などいらぬ背中をボンと押す

八尾市 山根 妙子

産声はみんな同じはずなのに
祖母母親産声を待つ六つの耳
辻風に舞いつつどこへレジ袋

元旦のしじまに老いの幕思う
足かせにならない一歩また一歩
竣工を待たず名優幕をひき

篠山市 北澤 稠民

今聞いた花の名前をもう忘れ
女房と話すことなどありません
この先も頼れる人は自分だけ
寒い朝挨拶忘れ通り過ぎ

冬ごもり隣の人と図書館で
大寒に昔懐かしあられ干し

堺市 大和 峯二

野球にもビデオ判定欲しいもの
政権が変わり変らぬわが暮らし
復興費お金儲けに化けている
辛酸を舐めて心が広くなり
隠しても好きな気持が目に出てる
被災地の若い力は希望の灯

倉吉市 岡崎 美知江

組み替えの大豆でないという豆腐

嬉しさも悲しさも知る涙壺

お静かに徳ある法話聞いてます

凧糸が切れてほんとの風を知る

笛吹けど踊らぬ人もある歴史

大丈夫まだ暗算が出来ている

神戸市 新保 登美子

分けあうと喜び倍になる不思議

喜びのメール絵文字が跳びはねる

肩の凝りだけを残して未完成

凝り性というが諦め悪いだけ

ちっぽけな悩みを笑う星の数

悩みなどないという子に悩む親

高槻市 三谷 白黒

寝ない児の睡眠菓子は無いものか

困るけど無いのも不安反抗期

何事も便利過ぎるとすぐ故障

同期会孫の多さを自慢して

雪の日は自然に負ける大都会

土建業この御時勢に目を覚まし

河内長野市 辻村 ヒロ

福耳に霜焼けドンと鎮座する

飛び乗って降りたい駅は止まらない

余生とは思わぬための恋心

老い忘れ心も踊る歌劇ファン

皺の奥夫婦の歴史折り畳む

あれこれと気のつく夫ねずみ年

放射能見えず匂わずサスペンス

頭からおげけが出そう髪を切る

湯呑みから茶摘みの人が笑顔みせ

雨の日は椅子が物干代りする

人科とは何と面倒タマは言う

孫帰るタマは安心よく甘え

貝の口少し開いて本音出す

ありがとうその一言に心詠む

一世紀喜怒哀楽を生きた母

お手本にしていたお人今は亡き

柳友は年齢なしのお付き合い

もう少し燃えていたいな七十路

もう少し生きてほしくて盛り減らす

杖と言えばストックと言ひ意地を見せ

悪いところ頭とクチに歯も入れる

非常食たぶん食べない値で選ぶ

末吉の神籤信じて紅をさす

皇后をまねて毛染めはせぬつもり

横浜市 長島 亜希子

篠山市 藤井 美智子

福岡県 本田 さくら

— 53 —

岡山市 工藤 千代子

宿題が解けず夕日と語り合う

タンポポの記憶チューリップの記憶

りんご剥く昭和を手繰り寄せながら

朱の鳥居くぐり落としてくる鱗

パスタくるくる常識という鎖

岡山市 前田 恵美子

北風もコタツがいいと戸を叩く

冬野菜寒さにもまれ甘くなり

コート脱ぎお久し振りね春の風

梅の花早く咲いてと目白二羽

ゆつくりと自分の歩幅通したい

瀬戸内市 東 楨 ますみ

断捨離を済ませ明日へとやる気だす

計画を読まれ梯子から落ちる

実直な人だ両手が温かい

煮えきらぬ男へ七味ふりかける

お若いね言われ自分の歳を知る

岡山市 田中 恵

だまされた振りして踊る影法師

オルゴール薄むらさきに夕暮れる

じつくりと構えて花の便り待つ

こんもりと森はやさしく受け入れる

足腰の痛さ忘れて餅拾う

広島市 岸本 清

お茶どうぞ愛想はいいが紙コップ

野良猫よ寝付けぬ夜になぜ唸る

古稀迎え刺激の色を足してみる

へボ将棋歯痒いけれど口出せず

間違った思想植え込む国もある

山口市 中前 幸子

ネイルアートセレブな風に煽られる

病んでいるところに重いぼたん雪

椿咲く岬の風と抱擁す

雪の夜ばなし戸を叩く雪おんな

雨が止んだら小指の疼き忘れよう

宇部市 高山 清子

言葉の棘にさされた傷がまだ疼く

野菜高値上りせずに量が減り

長生きを褒めたにしては棘が見え

一枚の紙が苦を呼び菜を呼び

修飾語取ると本音が透けて見え

松山市 神野 きつこ

菜の花のお浸し美味し福は内

水仙の甘い薫りが福を呼ぶ

本当は冒険したいぬれ落ち葉

ヨガをして今夜のメニュー考える

増税の春が花粉と共にくる

今治市 渡邊 伊津志

砂かぶりもの言い付けた目の確か

もつともな現実腹を立て損ね

忍従の微笑み見せる仲直り

筆圧に友の元氣を見る安堵

沸き上がる入道雲の力欲し

大洲市 花岡 順子

正直な顔が浮いてる洗面器

イエローカード早くけじめを付けなくちゃ

居心地の悪さを包むオブラート

妥協した分居心地が悪くなる

うわべだけのけじめトカゲの尻尾切る

香南市 桑名 孝雄

大酒を食らい大法螺吹く仲間

男女別学今でもギコチない仲間

昼の酒気炎上がらぬまま終る

一〇二歳の葬儀拍手で見送られ

骨拾う孫と人生語りつつ

宿毛市 増田 純子

かたまつて咲く水仙の淋しがり

感性は元氣らしいな胃の痛み

とても素直に泣きたい時は泣く鳥

転んだら起きる達磨もわたくしも

闇魔さま片目瞑つてくれますか

佐賀県 真島 久美子

プロポーズ助走の長い男だな

金持ちになれるお守り五つ買う

この辺で私の窓を開けてみる

手相には結婚線が二本ある

両の手は空いたままです風の音

唐津市 吉富 節子

足が向く喜怒哀楽に縄のれん

先のない老いが未来を案じてる

久し振りに着物を着れば慎ましく

昭和史も遠い昔になつてきた

ドッコイショが痛たたに変わる老いの道

シドニー 坂上 のり子

焼きたてのパンの香りを抱き帰る

財産は無いがこの手と言う匠

恵方寿司半分こして分ける幸

同居して分かる男の不甲斐なさ

もう自立する頃模索する新婦

青森市 菊池 京

ざらめ雪あなたも春の使者ですな

不器用な丸のまんまで子が巣立つ

エプロンの下に遠吠え隠してる

さしすせそぶつきらばうな合わせ味噌

紙一枚こんな重い春の午後

弘前市 高森 一 吞

寂しくはないか喪服の帯を解く
コンパスの真ん中にある冬の月
かごめかごめ私の秘密全て知る
自画像が突然本音喋り出す
遺言状走り書きして旅に出る

塩竈市 木田 比呂朗

菜の花や明日も晴れると言う予報
玄関の靴も出番の春モード
原因がうやむやなまま疑似平和
晩酌のグラスに浮かぶ消費税
年金が二パーセントに挑まれる

東京都 井上 つよし

年に一度筆を握って年賀状
あれもこれも気に障るけどまあいいか
双眼鏡で安全点検したポルト
祖母姑嫁と舌で受け継ぐ寿司の味
雨の音何時しか止んで雪になり

東京都 高岡 弥生

本当は争い事は苦手です
トンネルはスピードあげて通り抜け
子と二人シャンパンついで上機嫌
無理だけど食べたい母の太巻きを
父帰宅次の出張待ちわびる

岐阜市 平野 あずま

席譲る息子肩幅広くなり
ユニークと言われボツの句浮かばれる
散らかった机で無私の時過ごす
名力士逝つて昭和がまた霞む
積雪に小庭も粹な貌となる

静岡市 渡辺 芳子

ケータイを持つてマゴマゴオロオロし
つくろい物こんな言葉は老女だけ
温き床時計の針とニラメッコ
この虹にのりのぞいて見たい天国を
なりたいたいな笑顔可愛い百歳に

豊橋市 藤田 千休

焼芋と栗がバトルの秋の陣
これ以上肥れば鹹になるベルト
駅伝の襷に染みている絆
ライバルがかなり手練と知る句会
お荷物が出世頭のクラス会

八幡市 今井 万紗子

また明日静かに磨くちびた靴
内のひとに盗難防止鍵つける
意地つ張りこれも恐らく父譲り
洗うたびあなたの匂い消えていく
会釈してわたくし流にのぼる坂

京都市 清水英旺

横一列福良雀が震えてる

熱い風呂ざわめく心押さえ込む

今を怒る五臓六腑たぎつてる

日めくりをはぎとつていく老いの鬱

見るまでもなし二月の月の冷たさよ

大阪市 阿野 寿美子

梅林に一際映える天守閣

やさしさに引かれて決めたプロポーズ

御馳走に決心ゆらぎ食べすぎる

のぞき込む何かわからん長い列

失敗は口でごまかし切り抜ける

大阪市 岡田 元

妻逝きて独居七年やつと馴れ

淋しさと引きかえに出た太鼓腹

人生の春短くて老いせまる

洗濯機独り暮しの良き伴侶

少子化というに保育所なせ足らぬ

大阪市 柴本 ばつは

入学式小中高と揃い踏み

さあ四月蒨草がお安くて

新玉葱ささむ詩人になる涙

ああびつくり息子エプロン着けていた

男子厨房祖父が見たなら腰抜かす

大阪市 高杉 力

嫌がつっていた大阪が水に合い

晴れ晴れと単身赴任送り出し

遅れまいとベストセラーを読んでいる

大阪は犬も大きな声で鳴く

ミサイルと核で存在感示し

大阪市 寺本 実

星空はよく晴れた日の贈りもの

無理言つて落とし所を探つてる

チャレンジは梅では咲けず桜まで

鈍行のドアも開かぬ田舎駅

祝宴が無事に終つてああしんど

大阪市 藤田 武人

顔ぶれは今朝も同じの初電車

連発のくしやみ噂があちこちに

新聞のセンター試験パパ挑む

しつけ糸無しで育ててへそピアス

手習いが役に立つのは先のこと

大阪市 前川 善之

冬山を甘く見すぎる高齢者

八十四この世のクイズ解きながら

生きるため芝居しながら世を渡り

寒風に干せば魚も旨味増す

戎さん笹持つ手から福が来る

大阪市 松田 聰

河内長野市 穂口 正子

子のしぐさ親の背中を写してる
ほほえんで病室を出るオベの朝

(妻手術4句)

手術前マイナス思考ふりほどく

手術中空気淀んだ控え室

お見舞が度重なつて気がまぎれ

池田市 上山 堅坊

若い笑顔街に溢れている不況

青春の本に輝く赤い線

難題が解けてぶらつと散歩する

バイキング他人の皿が美味しそう

今日一日力一杯生きたかな

貝塚市 吉道 あかね

梅から桃へ春の音符が踊り出す

三寒四温蕾が動き出している

パステルカラー背景にする六十路から

まだまだと足してばかりの余命表

時々は会つてビタミンもらう人

河内長野市 大島 友子

特大の尾ひれが先に行くうわさ

抜け駆けの告白バラは間に合わず

聞き飽きた小言が今になつて効く

降り注ぐ星に抱かれた旅の宿

ラッシュアワー香水漬けて車酔い

まず湯治豪華客船縁あれば

突然のアピールだった子の家出

ややこしい分かりましたと笑つとく

降りそうな人を定めて前に立つ

誕生日祝つてくれる人と住む

岸和田市 中岡 香代

太陽の母さん探すランドセル

沖繩の移住を希望花粉症

踏まれても立つ雑草で生きていく

バーチャルの魔界に混じり生き伸びる

近代化第六感を鈍らせる

岸和田市 増田 隆昭

図書館へ金の要らない暇つぶし

初七日の仏事涙はもう見えぬ

いじめには限度を知つていた昭和

昭和史は戦争抜きに語れない

お花見の場所取り合つている平和

堺市 近藤 治子

伝え方を遣いすぎ伝わらず

神様と駆け引きをした願い事

伝えたい事あつたのに出てこない

まつさらな軍手でいどむ炬の火入れ

駆け引きも旅の楽しみ土産買う

堺市 羽田野 洋介

よしやるぞ初めて挑む八十路坂
後はもう眠るごとくと言われたい

脳トレへ難問奇問四苦八苦

気付かない振りで見守る親心

茶話会のはずがそのまま飲み会へ

傷口に触れず言い訳聞いてやり

つぶらな目我が家の未来任せたい

ふるりの野道に咲いている童話

内視鏡おとこの夢を打ちくたく

さよならの音符のような花吹雪

高槻市 田中 由美子
しよんぼりと手持ちぶさたな昼の月
高槻市 鳥居 宏

透明になれば見えだす己が腹

優勝に続く期待が重過ぎる

失敗を派手におどけてごまかす気

原発の行方今なお霧の中

豊中市 池田 純子

鬼だつて食べてみたかろ恵方巻き

福は内ウチウチウチと口に入れ

がたがたよ言いつつ元氣喜寿の友

同胞のロマンよ何処アルジェリア

新雪にごめんねキュッと足を入れ

豊中市 貝塚 正子

たのしみは夜中に一人見る通帳

ふつくらなほつぺに迫るパパのヒゲ

炊きたてのご飯ふつくら卵かけ

安心だ医者と僧侶の友が居る

歳ごとに頭のネジが甘くなる

富田林市 山野 寿之
義理ばかり本命チョコがやつて来ず

頑張った十五の春にサクラサク

爪に火を五人育てた母の唄

決断はまだかと迫る皿小鉢

私を明日へと連れて行く夕陽

寝屋川市 荒川 鈍甲
二月来て花香しき寒梅忌

枯れたのか見れば蕾を持つ牡丹

法然院の路に椿を置く風情

いつか来た道いま国政もマスコミも

時代おくれの親分子分核の傘

寝屋川市 岡本 勲

ノルマとの格闘あつて光つてた

定年後は妻のしもべで勤務中

相性はわるいが不思議と馬が合い

ダイエツト妻は奇蹟を待っている

開いたら違う顔する三面鏡

羽曳野市 藤原大子

ありがとう言いつ言われつほつこりす

車間距離おいて仲良し二人です

怒ったり笑ったりでき生きてる

二人暮らし風穴あけに孫がくる

そこそこでいいと平穩感謝する

東大阪市 西田 いくひろ

寒波到来続くと野菜高くなる

つまらない中身でテレビ離れする

寒いのでゆつくり風呂で身をほぐす

肥えすぎて着れない服が欠伸する

失敗は恥でないよと子に諭す

枚方市 河田 洋子

虹見れば今日一日の幸祈る

喜寿過ぎてまだまだ虹を追い駆ける

いつの間に跡も残さず消えた虹

好奇心手を出し部屋が片付かず

する事があつて惚けてる暇がない

枚方市 松原 保

各紙ともイジメ体罰競い合い

プライドを捨てて入閣元総理

このビル群下に有るかも活断層

立春と聞けば感じる日の強さ

想定が大きくなつて困ります

藤井寺市 田付絹枝

流水に乗つてみたいな夢で良い

北国で丹頂鶴のパワー受け

雪像も行き交う人もグロイバル

晴天で化粧直しの雪まつり

銀世界バスを見送るキタキツネ

八尾市 田邊 浩三

いろは坂初恋偲ぶバスの揺れ

腰痛の祈願に登る女坂

無念だが絆を断つた汚染処理

NHKドラマの前に立つトイレ

誕生日孫からのメール宝物

八尾市 西川 義明

二等分しても比べる食べ盛り

目鼻口魂込めて刻む石

いつまでも胸に生きてる柴田トヨ

うつ向いた返事が嘘とバレている

ありがたい命を洗う酒二合

八尾市 前田 紀雄

チヨコレートぐらいで本命にならぬ

日本の上空魔物飛んでいる

孫奮起希望大学突破する

年賀状三等当り福来る

教育も企業も成果主義煽る

大阪府 小栢 こずえ

地味な色着ても若さがひき立てる
澄む水のようにはいかぬ胸のうち
寒に耐え野菜も人も味が増し
四季転々自然に学ぶことばかり
その時の機嫌で耳も遠くなり

大阪府 神野 千恵子

DNAよりも愛という絆
忘れるという能力は数多もち
歳は経るもの古びるわけではない
書き足した一言あとに戻れない
筆順にある美しいリズム感

大阪府 西川 冷子

天気図は寒波寒波としま模様
味冴える秘密の肥料寒のうち
風花が舞うてわたしを閉じ込める
恋談議誰に聞かそう妻も逝き
大気汚染目だけ出してる人の波

神戸市 玄 番 美恵子

残雪に蓄しつかり春を待つ
靴紐をきりりと結び一万歩
走りくる涙の顔を抱きしめる
6Bにちよっぴり野心燃やしてる
勝ち負けの悔し涙にあるドラマ

神戸市 能勢 利子

白寿まで独り暮らしを目指す老母
若いネと言われ慌てて背を伸ばす
悩むたび娘は逞しい母となる
叱られぬ大人に早くなりたい子
長生きの母の家系はよく歩く

神戸市 山根 弘子

プライドを水に流した喜寿の坂
褒め上手作り笑顔が気にかかり
不器用で曲った道が歩けない
肩の凝りほぐしてくれた子の笑顔
口喧嘩別れた後の肩の凝り

川西市 大坪 一徳

生きて来た手抜きしないで俺なりに
滅私奉公したほどに酬われず
転勤で飲めない酒も強くなり
合併で俺の足跡無くなつた
人生を賭けた会社の名が消えた

川西市 山口 不動

夜が明ける普通の様で奇跡的
朝ドラをケチつけながらまだ見てる
一日の命いたたく良い目覚め
梅だより賀状番号調べる日
うな井の梅のうなぎは痩せている

篠山市 石田 久子

買い替えた固定電話に四苦八苦
息子からポーナス出たとのし袋
ポーナスのおためと食事予約する
新年は五十円のご挨拶
冬の空亡夫ここだと輝きて

篠山市 酒井 健二

一枚の枯れ葉を狭む自動ドア
ガードレールかんかん鳴らし子ら通う
ランダムな光に頬を撫でられる
八百円安い時給でこの笑顔
始末する習性死ぬまで直らない

篠山市 佐々木 勇

ビール掛け勿体ないは戦中派
また一つ歳を増やしておめでと
八十の明日を生きる予定表
年金のお得意さまは葉づけ
未知数の世界求めて五七五

三田市 辻 開子

介護する息ぬぎするから続けられ
雨あがり新緑はえて目も眩し
記憶力気持も脳も歳という
携帯をスマホにかえて若かえる
年一回頭の痛い申告期

宝塚市 丸山 孔一

心配性気にはしつづもすぐ忘れ
ほろ酔いにさせる葉を爛で飲む
うまいねと箸を唾えて死にたいね
お育ちを無視して鬩るハンバーガー
子に残す自慢の遺産無借金

奈良県 谷川 憲

満員車スマホを触る人ばかり
霜の朝お墓参りの杖の跡
募金にも詐欺を疑う哀しい世
町のマナー犬の散歩で知らされる
答え出ぬまま朝の光に背を押され

和歌山市 磯部 義雄

ターゲットにされる日本の無人島
年金を折半にした離婚劇
一見さんやがて常連ママの味
読み返し故人となつた句に浸る
ジャンケンで決める介護の不仕合せ

和歌山市 北原 昭枝

少し距離置いてスープを温める
ふたりいて無言のままにみるテレビ
疎まれてるかも知れぬ近すぎて
まだ幕がおりないうちに舞つておく
手のひらへそつとつつかんだいい予感

和歌山市 さかた きく

ドーナツの穴もうっかり食べました

ゲーム機を操る指にモンスター

コロツケが出しやばっている肉屋さん

ブーケにはなれないけれど赤く咲く

気が付けば同居していた花粉症

和歌山市 平田 元三

審判の権威に欲しい確かな目

新品を買えば出て来る探し物

馬でさえ叩くだけでは走らない

物でなく接客振りで買っている

公園の一草さえも命乞う

紀の川市 楠原 富子

八合目あたりで手抜きしてしまふ

日本列島嵐の中で耐えている

きびきびと動き通した土踏まず

夢ばかり追って自分を見失う

ポケットに詰めた後悔重くなる

田辺市 大峠 可動

一枚のはがきに春が満ちてくる

病名を貰ってタクシーで帰り

十指みなリユウマチという戦かな

一途一心凡人の道蟻の道

人間が躍る季節に雪解けだ

収穫祭笑顔持ち寄り芋を煮る

これからの歳入れて置く玉手箱

カスミ草にはなれぬ定めの赤いバラ

ふる里の風何時の日も暖かい

いい笑顔貰いお返しいい笑顔

鳥取市 坂本 とも湖

文句言う北がミサイルまた試す

本庁で冷やめし食べているキャリア

年金カット老いの身凍りつくようだ

凍結の滝はピカソも顔負けだ

その内に無口な雪が過疎を呑む

倉吉市 中村 毅

役所にも少しは欲しいおもてなし

中流と思ひ不満は口にせず

お見合いもいいものだよと若者へ

五センチで大雪なんて言うでない

七五三主役は子どもなのですよ

倉吉市 堀 かずこ

四季がある冬が終らぬはずがない

何気ない言葉の中に心見え

大雪で今日もこたつの守りをする

体罰を何かあつてじゃ遅すぎる

福寿草やつと芽が出たありがたう

米子市 生田寒之

鳥取県 吉野いさお

イジメする暇がなかつたヤンチャくそ
体罰は知らぬがしごき待っていた

リタイヤに婦唱夫隨が動き出す

血管は細る涙腺太くなる

病院で読書時間を創り出す

米子市 加藤正二

雪降ればこたつの守が忙しい

何ごとにも逆に思えば味が出る

断捨離を言つてせつせと買いだめる

長生きがよいか悪いか思案する

没句でも脳活のネタ有難い

鳥取県 飯野菖子

離せないめがね私のパートナー

鼻の上乗せてめがねをよく捜す

近い内春が来るよと雪が舞う

近い内それでも待てば長かった

経験は財産ですよ隠し味

鳥取県 橋谷静江

お天気に誘われ外出したくなる

愛犬にせかされ散歩時間決め

ラッシュ時を避けて愛犬散歩する

美容室帰りの道は遠回り

少しずつ手抜きをしている台所

咳いて体裁てらう胸のバラ

貰うほど傍には居ない妻の風邪

メモ書けばそのメモ探す日々となる

酒癖が息子にも似るDNA

ときめきは萎えた心のカンフル剤

松江市 武島ちよえ

平均寿命とつくに過ぎてまだ元気

たまにする正座に膝が駄駄をこね

百均の満足そうに並ぶ部屋

粒選りが正論吐くと限らない

火傷せぬうちに手を引く事にする

松江市 藤井寿代

へらへらを今日もカラスに笑われる

しばらくは黙つていよう大当り

ダイヤ婚いまだリズムはガギグゲゴ

早割で極楽駅を下見する

純愛の途中微熱が下がらない

松江市 山根邦代

二度寝してカラスが笑う雪の朝

ひとり鍋味気ないけど湯気の中

腹七分控えて見たが腹の虫

冬晴れにスキップしたい足のうら

優しさはもらい受けたの返すだけ

岡山市 永見 心 咲
リビングに動けなくなるソファ一置く

誕生日殊更ぶったグラス2個
如月に産まれ寒さが苦手です
筆順を正され文字を褒められる

岡山市 藤 成 操 江

飲み込んで胃で囓んでいる言葉尻
にぎやかな時も知ってる厨の灯
手も足もまだまだ達者小旅行
カタカナ語広辞苑では手に負えぬ

玉野市 片 岡 富 子

膨らむ芽しもやけ萎み春が来る
桜餅葉っぱ食べるか食べないか
乗り越して黒い風景待っている
瀬戸内に世界のアートはしゃぐ島

竹原市 土 井 輝 恵

倒れられ柱であると今解る
携帯のお陰で命とりとめた
腫がきれい介護を学ぶ孫宝
床の中臨終シーン画いてみる

竹原市 六 田 半 徳

鳶親子気流に乗ってビーヒョロロ
孫五人チューリップの色それぞれに
麦踏み教えて呉れた祖母恋し

核実験北朝鮮のわるだくみ

四国中央市 篠 原 久
麦飯食べた頃はなかつた糖尿尿
フライングよくした頃は若かつた
薪で炊くめしふる里にありました
一時間粘って喫茶で話つく

高知市 三 谷 待 太 郎

なかなか過去が消えない無理もない
あんなとの相性などと今更に
こじれたと判つて黙々鉄をうつ
祝長寿市長のタオル健在なり

北九州市 小 松 紀 子

お久し振りうーん誰だっけ誰だっけ
意気込んで三日坊主なんです私
リフレッシュ朝寝朝風呂朝のかゆ
活力は川柳塔誌からもらう

佐賀市 清 水 園 實

口出しはしてはならない他人事
起きて先ずエンジンかける水一杯
金よりも健康がいいめし半分
ホームラン勝つてうれしいテレビ前

唐津市 岩 崎 實

支え合いかばい合いつつ豆を撒き
ありのまま心と体ととのえる
されるよりしてやる方へとかじを向け
四六時中国道県道無休憩

唐津市 北村 松風

留守電に切替えました父昼寝
ゲレンデは悲鳴の度に穴があき
バツいちが戻り家族が倍に成り
孫曾孫おぼえきれない名前つく

熊本市 杉野 羅天

テレビ討論口より手振り気にかかり
煩惱が邪魔しなかなか年取れず
政治家に成つて友より早く果て
鳥獣被害農家にも付け回つて来

山鹿市 三谷 たん吉

見渡せど国旗の見えぬ建国日
会社とか家族などより国憂い
七十かまだ若僧と突き放す
福豆も八十食うとハラこわす

札幌市 佐藤 登美子

大寒波木立の幹が裂ける森
せり出した雪庇が凶器幹の下
豪雪に耐える夫婦の粘り腰
始動する日本一へ名護キャンプ

弘前市 肥後 和香子

そんなこんなでバレエシューズに夢を
散る美学極寒の薔薇気にもせず
熱く雪あなたはわたしの雪だるま
彩りにコーヒー豆を足す節分

つくば市 嶋本 喬

お歳暮のそばデビューする大晦日
歳なのか薫りの好み茶に向う
金曜日チラシに埋まる新聞が
i P S 間に合う時代みて見たい

日野市 大竹 一良

何かある今日の支払い彼が持ち
生きてきて刻苦精励幸を生み
半世紀すぎてもなびく星条旗
嫌なこと長ながと持つ悪い癖

横浜市 巖田 かず枝

失敗は思い出さないことにする
娘も孫も私も笑うトムジェリー
外は雪友とおしやべり温い午後
オレオレに遇わないように鍵を掛け

佐渡市 高野 不二

此の寺も稼いでいます駐車場
大根の味は入れ歯も変わらな
読まなんだ本を売ろうか思案する
金もないからだまされる事もない

富山市 有澤 嘉晃

命がけそれでも山にある魅力
播く人の本気が分かる野菜たち
干し方が男と分かる女の目
若きゆえあなた命と思ひ込む

熱海市 三谷圭角

梅まつり足湯に浸かり憂さ忘れ
嬉しな雀の群れが庭に來た
女性入り明るく弾むわが囀基部
勝手して始末は税で尻拭い

江南市 脇田雅美

突つ込みにとぼけも入る夫婦旅
足腰に誰でもできるストレッチ
イントロが流れるうちの照れくさざ
同じ年何でも話す笑い顔

愛知県 樺嶺志

ポール追い負けて悔しげ顔やよし
遊ぶ子に帰れの声か興さめる
夕暮に三々五々と散り行く子
ピンポン脱いだ途端に宅急便

大阪市 浅井公平

歩く数半分以上家の内
産声を聞いた息子が今おやじ
神仏のお恵みとして妻が居る
沢山のよい匂出來たがどれ出そう

大阪市 太田としお

早い話が言うてそれから長かつた
考えるもしも私が総理なら
責める前拜む心で聞いてやる
買いました閉店セールお仏壇

大阪市 梅里南天

閉め切つた部屋を飛んでる冬の蠅
日本語を静かに喋る宇宙人
柔道の技にあつたか平手打ち
しょつぴいた人が明日はしょつぴかれ

大阪市 平井露芳

四捨五入したら昭和も九十歳
骨粗鬆ボキボキ骨の独り言
胃袋がも一つ欲しいくすり用
ポイ捨てはマラソンだけに許される

大阪市 吉田知之

子犬でも吠えつかれるとおそろしい
電車内化粧直しは絵にならぬ
節分の神社参りも遠くなる
メモ忘れ買物に來て大あわて

泉大津市 助川和美

始発電車釣り人の顔輝けり
法事には母の形見を胸に下げ
お役人五時から男お接待
酒進む茄子の浅漬上機嫌

泉佐野市 稲葉洋

散り際を褒められたって何になる
なんのかの言つても四季があり嬉し
丁と半他には無いの選択肢
露命とや未来は不明過去は不帰

河内長野市 藤 塚 克 三

辞書あつたどこに置いたか虫眼鏡
オギヤーから目を瞑るまで神頼み

満開の桜羨む片想い

四月馬鹿日頃の仇妻嵌める

河内長野市 山 本 エ ミ

生かされて傘寿の坂へ靴を買い

半世紀支えた妻へ感謝状

お年玉福沢論吉とび去つた

劇場の招待券が高くつき

河内長野市 渡 邊 修

えべっさん賽銭眺めしふい顔

冬山で出会いで和む言葉掛け

緊迫のチャイナに見える覇権主義

我がドンの打つ手を憂う北の民

堺市 梅 木 澄 空

死ぬ振りへ頼る愛犬知らんぶり

義理堅い客に恵まれ小商い

故郷の恵みを鍋で舌鼓

両の手でバイバイ見せるもみじの手

堺市 増 田 和 幸

ドラフトで評価はできぬプロ選手

長生きに良く効く薬五七五

年金日老人クラブになるバンク

棄権罪あると政治は変るかも

高槻市 原 洋 志

不都合なメールとぼけている絵文字
太陽をまねてた彼が空気とは

変りばえせぬオレも匂も年あらた
落ちないという約束で飛んでいる

豊中市 荒 巻 夢

大寒の読書三味風邪心地

くつ下を繕いながら母を恋う

慎みも忘れて拾う節分会

若い娘の命溢れる髪匂う

豊中市 源 田 啓 生

近頃は下駄の重さも忘れてる

ゆつたりと紅殻格子の町を行く

チョコレート買って貰った顔ばかり

寒暖の差が身体打つ命打つ

富田林市 古 田 千 華

独り居の闇柔らかく花辛夷

蠟燭のかすかな灯り闇拓く

走る走る耳のピアスが千切れそう

走ること止めたたら私ただの人

寝屋川市 小 谷 滋 彦

歳の差を一個と呼んで現代っ子

五線譜を語感で唄うのど自慢

発表会馬の脚にも孫の春

ペナントに鯉の望みはビールかけ

羽曳野市 磯本洋一

里帰り脚立で父に孝行す
海峡を一色にして雪が舞う
北の空星屑集めきらめいて
海峡を渡る海猫着ぶくれて

羽曳野市 安本美喜

バージンロード涙爆發させまいと
よりに選り夫に貰った春の風邪
帰り来て身を舐めまわすうかれ猫
庭師来てすばつと苺られ新芽待つ

藤井寺市 肥山一文

秋の夜読書だけでは眠れない
カラオケのマイク持つ手はプロ並みだ
何年も景気回復待ちぼうけ
生きるとは友がどんどん増えること

松原市 市川雄太

天候が気分屋さんと化している
大物のルーキーの目が虎と化す
住宅街を電気工事がかけ巡る
祝日の民家日の丸揚げている

松原市 大嶋信次

降り積もる白さの下に過疎の村
廃校にジャングルジムと鉄棒と
魚好き骨格標本を作る
アマガエル君が絶滅危惧種とは

箕面市 酒井紀子

体調が花丸朝の茶が旨い
開花待つ硬い蕾の梅を愛で
琥珀色梅酒ねむらせ出番待つ
団十郎芸を極めてこの世去る

箕面市 寺井柳童

南南東向いて太巻き丸鬻り
キャプテンが負けがたがたと総崩れ
のんびりと落語三席初笑い
泥かぶり黙って耐えて生きた過去

箕面市 村田恵子

欲しい物ないと言う子がかわいそう
手紙未滿電話以上でメールグー
アラフォーの娘の部屋キティ楽しそう
ノーベル賞を過去に前進格好良い

八尾市 赤木妙子

五年日記を三年にした発病日
亡母と歌えば童歌しか出てこない
犬も私も生きもの同士と抱き寄せる
犬猫もみんな元氣と娘の賀状

大阪府 高木道子

大体は酒で煙巻く反省会
協調も迎合もした再生紙
古雛も老いには老いの心意氣
アンダンテ春のタクトは天の邪鬼

大阪府 畑 中 節 子

老いを捨て春だ春よと西東
気も晴れる老いの良葉無駄話
ひとときの賑わい嬉し小正月
新年会渾名呼びあう宴となり

神戸市 井 上 忠 貞

再婚の重い決断亡妻に問う
魔法ビン湯割りを入れていそいそと
笑う日を増やしていこう老いの坂
人当たり柔らかかけれど骨つばい

神戸市 木 村 忠 義

ひとの癖知っててぼくの癖知らん
ジョギングをしているような雲に会う
相づちにはまり余計なことも言い
話に夢中何を食べたか聞かれても

神戸市 興 水 弘

喜びの酒が度を越す二日酔
凝り性といわれぐい飲みまた作る
ジャンボくじたられば話もう飽きた
ポーナス日論吉に仮の宿を貸す

神戸市 松 井 文 香

御苦勞様その一言で凝りほぐれ
花婿の父母の涙もみのがさず
悩む事などなかつたは後で言え
一行詩辿りあなたを偲んでる

尼崎市 小 池 幸 子

風邪薬飲み忘れする快復時
黒豆の色艶味は自信作
厳冬に夏恋しいと勝手人
ゴミ出し日カラス知ってか騒がしい

加東市 岩 本 美 緒 子

寿命延び紙と筆との余生生む
気まぐれ者のほほん暮らし飲むカフェ
描きなはれ主治医に発破かけられた
ひと筆画筆の裁きでろくろ蛇

加東市 黒 崎 美 紗 子

おすそわけえひめのみかん嫁の里
行く先は神経内科また会った
背伸びしたつもりはないが足痛い
白菜にぬくもり求め虫ひとつ

川西市 日 野 岡 和 之

されるよりする喜びでポランティア
人生のピークを今日として生きる
振り返る人物流転泣き笑い
古希過ぎて未だ人間が面白い

篠山市 谷 田 多 美 子

国の財政やはり気になる老婆心
一人居に温もりもつて孫曾孫
親も子も巣立って行った無人駅
川の字の真ん中で猫躰かく

篠山市 永井 かほる

定年後元気で生きて丸儲け
よだれかけ替えて清らか野の仏
親の背を手本に今も生きている
川柳よみ今日も二回の辞書めくる

三田市 足立 つな子

孫受験にわか仕込みの神頼み
サクラサク昔の言葉懐かしい
よもぎ餅彼岸のおはぎ母の味
姉妹でカニカニコース笑いすぎ

三田市 上田 ひとみ

春だからうれしい事が増えてくる
居酒屋のこぼれ話に酔ってみる
あれからも探しています影法師
恋しくて眠れぬ夜は星の詩

三田市 雑賀 一泉

入口でなくてもどうぞ福の神
神仏もこれが限度と医者通い
反省を繰り返すうち八十路越え
松飾り終えた後でも生一本

三田市 多田 雅尚

若い芽を摘まず育てる指導力
信頼が体罰よりも効果あり
最初だけやる気はあるが直ぐにパテ
非常時に駆け込むトイレ神に見え

西宮市 株元 玲子

お礼にお礼いわれて言葉なく
熱い思いやさしい言葉掛けてみる
寝めことばの直球交わし心地よい
心機一転のチャンス狙っている

三木市 山口 久子

良い事は終始一貫実り得
愛されて何時もニコニコ老いて行く
年賀友米寿が多く頑張つて
感謝して不平不満をなくして

奈良市 尾畑 なを江

焼餅のふくれ具合でメニュー決め
客あると家の中から活気づく
とりあえず賛成側に回つとく
温度差でぬいだり着たり巻いたりし

奈良市 前田 弘恵

コマージュシャル買う気にさせる力もち
学ぶこと終りはないと励む日日
歳の数噛み応えあり腹膨れ
柳誌読み奥の深さに迷い道

和歌山市 福呂 秀子

欲だけは衰え見せず付いて来る
鳩の群れ胸ふくらませ日溜りに
ゴミ出しの時間にカラス仲間呼ぶ
葬儀では日頃御無沙汰顔揃い

岩出市 村中悦男

みつめ合う奥の心を読むために
副作用読めば良薬恐くなり
母の遺影冷え込む今朝も笑顔して
霜柱ふむ音遠い耳も聞く

和歌山県 森下よりこ

寒い日の仕事時間を縮めます
大関の相撲見ようと早じまい
頭痛耳鳴り知らずに有難い老後
友だちはあるとも思わないとも思う

鳥取市 大前安子

寝息聞く今日はゆつくり眠れそう
難題は明るい声でアイウエオ
ふたたびの二人ぐらして添い寝する
ゆるくなる表情筋をマッサージ

鳥取市 谷口回春子

曖昧な返事が誤解引き寄せた
素直さで頑固な棘を抜いて生き
嘘をつく舌の枚数手が足りぬ
裏方になって初めて凄さ知り

鳥取市 津村律子

爺と婆転ばぬように気をつける
命ある限り気迫を持ち歩く
赤ちゃんの笑顔に皆が吸い込まれ
夫より先のお風呂は落着かぬ

鳥取市 山下凱柳

その内を信じ煮え湯を飲まされた
濟んだ事今更言つてどうするの
老い二人意地ばかり張り埒あかず
結婚のビフォーアフター様変わり

倉吉市 田中紀美恵

追伸の二行ほのぼの彩が出る
喜寿を過ぎほのぼの夫婦赤い糸
ゆつたりとほのぼのとなる酒を飲む
助手席の妻が速くとサイン出す

境港市 中井虎尾

一人旅影がこっそりついてくる
女子ジャンプ競いあつてる沙羅とサラ
諭吉さん来てとさそえど俺を無視
うそつきと閻魔おこつてもどされる

米子市 池岡たけし

この国で歴史を誇る旨い米
忘れまいお米がなくて泣いた頃
見える百届く筈だと背伸びする
年重ねきれいに咲いた習い事

米子市 小野鶴子

円満に暮したつもり先祖様
逃げ足の早い財布と年を越す
耳寄りな話まとめて書き綴り
字を忘れ前頭葉も大慌て

歌を聞き昔のことが蘇る

米子市 田村 周子

親の思い浅いものではありません

とんどさん近所と人と祝い酒

春がくるいも虫みたい出ようかな

米子市 野川 宣子

米びつが騒ぎ出して食べる盛り

老いた背に孫が旗振る応援歌

お喋りの口が浅知恵試される

老いの影ソロリソロリと寄つて来る

米子市 見山 温子

どんと祭正月気分消していく

神棚の飾りをおろし寒に入る

まあまあと押し切られてる村の役

ローカルバス降りるも乗るも一人だけ

米子市 湯浅 俊久

お元気で祈るしかない遠隔地

飲み会へ傘と一緒に家を出る

お喋りをやめてください映画館

鳥取県 大塚 美代子

耳よりな話に乗って騙される

決まるまで黙って居ます志望校

故郷の駅を旅立つ娘と握手

皮肉だとあとで気が付く遅い耳

還暦すぎカラフル衣裳若返る

鳥取県 岡村 孝明

全国を転々勤務旅行する

火ダルマになつて相手につき進む

酸欠の金魚に酸素送り込む

鳥取県 下田 茂登子

朝刊は夕方届く過疎一人

万歩計つけて一日始めます

過ちのひとつふたつは持つて逝く

別れた孫の行方知りたいお月さま

鳥取県 田口 清帆

試験より戦争で知る世界地図

いのちある朝へ合掌して起きる

川柳で生きる力が湧きました

しあわせは合やす両手の中にある

松江市 相見 柳歩

恋ごころ厚いガードを突き破る

働こう輝く石を贈りたい

長所です二番手以下が似合う僕

松江市 河西 草庵

信仰の尊さ神は見えぬのに

春立つや鶉の声けたたまし

琴線に触れる噂に揺れている

跨線橋渡つた向う別世界

導火線うまい話を持つてくる

出雲市 黒目英男
自分さえ良ければいいと意地を張る
のんびりとラジオを聴いて昼日中

正論を吐いてみんなの背中押す
大鵬逝く昭和のスター星になる

雲南市 菅田 かつ子

いい事があつてるんるん青い空
片隅に役に立ってる古机
精いっぱい歩き疲れた靴の紐
柏手に神さまそつぽ向かないで

安来市 原 煩惱児

風を読む漁師の朝の船溜り
入院に馴れて甘えの出た老爺
もう一度社会復帰と闘病記
一年の計など出来ぬ余命表
.....



(つづき)

唐津市 山口高明

霊泉は法師保証の独鈷の湯
宗教の自由異国の神崇め
写経して癒える創などありはせぬ
野遊びの姑が土産と露の臺
嫌いともいわず好きとも言いはせぬ

薫風作品の推敲の仕方

栗原道夫

番号に悲喜ある日なり風の中

「川柳塔」昭和60年4月号、各地柳壇「川柳ねやがわ」自由吟の軸吟。「風は春」を「風の中」に変更して「愛染」「古稀薫風」「薫風句集」に収録された。

番号に悲喜ある日なり風は春

原句は、入試の合格発表風景を詠んだ句だろう。自分の受験番号を見つけて合格した喜びを全身で表している受験生と、不合格を確認して静かに立ち去る受験生の、悲喜交々の風景。もともと「悲喜」などがあるはずがない番号に、悲喜のある日を見つけた句。「風は春」には、風は春のあたたかさを含んでいるのに、という思いが込められていて、薫風は「悲」と「喜」の「悲」の方に、つまり、不合格だった受験生に、より眼差しをそそいでいるようだ。

番号に悲喜ある日なり風の中

「風の中」だと、季節は示されず、入試の合格風景に限定されなくなる。私などは、競馬や競輪のはずれ券が風に舞う情景が思い浮かぶ。薫風が「風は春」を「風の中」と推敲したのは、「風は春」の措辞の説明臭さを避けたからだろう。

「川柳塔わかやま」平成24年2月号より転載

中島生々庵句抄

(句集「生々楽天」から 昭和五十一年発刊)

昭和四十三年

良心のかけらがあつて伏し目がち

可愛らしい目になつて来た酔うている

柳並木不快指数にゆれて耐え

晩酌が祝杯となる電話ベル

訂正をして失言をダブらせる

絶句した電話にかえつてくる絶句

すぎる手にすがられる手がくずおれる

春の彩散る心など思うまじ

ネオン皆俺の味方の梯子酒

焼かれても焼かれても石焼き芋の石

竜飛岬に三太郎句碑を訪う
蒼々亭ここに極まる謎がとけ

紋太氏を悼む

人間を貫く八十年の娑婆

昭和四十七年・四十八年

武家屋敷に似た元日の昼の街

酔いつぶれたまま初夢を見失ひ

幸せが逃げそうだから猪口を伏せ

お国自慢そのふるさとを遠く居る

雛祭孫に似て来た雛の顔

胴体は冷たし燃ゆる蛇の舌

情報過多だんだん気乗りせぬ返事

起訴になるまではカメラにそりかえり

酔うほどに音痴ますます冴えてくる

新川柳鑑賞 (14)

麻生 路郎

役員会階下はねぎを洗つて居

(東岸子)

何んの役員会であるかはわからないが、「階下はねぎを洗つて居」で、階下の情景も想像に難くないし、やがて、すき焼きの匂いが漂うことは云うまでもあるまい。この句のネライがあくどくないのがこの句を成功させたのだと思う。

飲み足りぬ顔へさつさと飯をつき

(武)

「いかがです。もう少し過ぎさせては？」
「いや充分頂戴しました」
と、盃を伏せる。

「そうですか。では」

と察しの悪いことにはサツサと飯をついだのである。

飲み足りぬ顔の読めないうちにユーモアが溢れている。

バトロロンへ注ぎに隙見て来たマダム

(黙平)

知ってる人は知ってるので、マダムはバトロロンのそばへはあまり寄りつかない。バトロロンにしてもその点は百も承知だ。

しかし、バトロロンの機嫌を損じたが最後、経営に響く。

隙を見ては注ぎに来るのも、マダムのこまかい心づかいなのだ。

軽い穿ちの句である。

追つばるう気だな三つ指ついた酒

(文庫)

「いらつしやいませ。」と三つ指をついた
丁重さ。
「少しおすこしあそばせ」

と云われても、その丁重さが胸にグツと来て、飲めそうもない。さては追つばるう気

だなと、三つ指をされた時に、直感したのである。皮肉な観方に興味が深い。

酒器自慢ほどに飲めない老主人

(鈴馬)

蒐集マニアもいろいろあるが、酒好きの老人には盃や銚子を集めてよるこんでいるのがかなり居るものだ。この盃は何んとか亭で何んとかの祝をした時の記念だとか、それぞれに何かしらご自慢の解説がつくのである。斯う云った老人に限って、酒器自慢ほどには飲めないものだ。穿ちの句である。

尻に敷くニューズ仕入れる主婦の会

(水堂)

牛乳はもつと値下げの可能性があると、こんどの選挙には口約を無視した彼氏は落とすべきだとか、民主主義の立場から言っても婦権をもつと伸張させるべきだとか、主婦の会へ出かけるたびに、何んかかんの議論に花が咲く。そしてそれ等の意見の中から、亭主を尻に敷くことの出来るようなニューズを仕入れて来るのが近ごろの主婦だと言うのである。

多少の誇張はあるとしても面白い観方の句であると言えよう。

金の奴隷の奴隷となつて御寮人

(霞乃)

金さえあれば、何んでも出来る。別荘も建てられるし二号も置ける。そこへ到達するまでは喰べたいものも喰べずに、一にも金、二にも金、三にも金で、義理も人情もあつたものではないという生き方をする人間を彼奴は金の奴隷だと言う。ところが、そうした男の妻として生きるためには全く個性を没却してその男の奴隷の生活に甘んじるより仕方ないことを詠んだものである。作者は御寮人の人権への反省と、その主人へ金の奴隷のいかにみじめな人生であるかを訴えたのであろう。

英語 de Senryu ⑬

麻生路郎句集 『旅 人』

英 訳 吉村 侑久代 Kim HORNE
(岐阜保健短期大学)

春の艸代議士などに踏まれるな

*spring grass,
is not to be trod upon
by such legislators*

馘になった人の名刺がメモにされ

*a piece of memo paper
as his business card,
he was fired*

～リバーウィローのため息～ (阿部佐保蘭の交流：宮森英訳に関する麻生路郎の意見④)

宮森麻太郎が『英訳古今俳句選集』の中で *Haiku and Epigrams* として 19 句の英訳川柳を寄せましたが、その川柳英訳に対して研究者や柳人からさまざまな意見が出てきました。阿部佐保蘭の川柳翻訳研究会と其の機関紙『SHK』に大きな期待を寄せ支援した麻生路郎も宮森の英訳川柳に意見を述べた一人でした。麻生のクレームの主な点は、①宮森の川柳に対する認識不足と②英訳に関する認識の相違でした。麻生は①に関して、「西洋のエピグラムが諧謔、皮肉、諷刺を扱っている点で、川柳と類似するから川柳を（日本のエピグラム）という宮森説は速断も甚だしい。川柳は日本のエピグラムではなく、サタイヤでもなく、イタリアにおけるバックでもなく、川柳は川柳である」と反論しました。また②に関しては、「宮森は川柳を（17 シラブルの詩）とするが、日本の音字と英語のシラブルは同じでない」と論じました。麻生は、「私は川柳を 17 音字と云う。日本語のアルファベットの 1 字が 1 音をなし、英語のそれは母音の外 1 字が 1 音をなせず、1 語が 1 シラブルや、2 シラブル、3 シラブルと数多くのシラブルをなすので、川柳や俳句が 17 シラブルの詩であるとは云えない」と述べました。例えば日本の音字では蝶は 2 音ですが、英語では butterfly (but・ter・fly) と 3 シラブルとなります。日本語の 1 音字と英語の 1 音節は同じものではありません。麻生は『イソップ物語』『新譯ロビンソン漂流記』『新譯アラビヤナイト』（全て藤谷崇文館 1923）『英語獨習會話の近道』（大文館書店 1924）を出版したほどの英語力の持ち主でしたので、宮森の『英訳古今俳句選集』の傑出した翻訳に敬意を表しても、一言物申したのでした。

参考文献：阿部佐保蘭『川柳と翻訳』麻生路郎読本

誹風柳多留一一篇研究 92

小栗清吾・伊吹和男
山田昭夫・増田忠彦
山口由昭

清 博美

717 木にもちのなつたうそでハ最つくわす

小栗 木に餅なるは、話がうますぎること。むずかしいことをこともなげに言うことのとたとえ。(「ことわざ大辞典」)

ここで「木に餅のなる」は、目黒不動名物の餅花の暗示。亭主が目黒不動へお参りに行くとうまいことを言つて出かけ、餅花などで女房をだまして、実は品川遊廓で遊んでいたのだが、それを女房が感づいてもうそんな嘘は喰わぬということに。

清 賛 木に餅のなるほど目黒にてす、め 二四〇

718 しりかしらへへみがいてと村しうと

小栗 尻頭は、①はじめと終わり。頭尾。首尾。②尻のさき。(「日」)

句の大意は、「べえ言葉」の田舎の姑が、嫁のことを「化粧ばかりしてロクに働かない」と批判している様子だと思ふのだが、「尻頭」がはつきりしない。「日国」の語釈もびつたりしないし(②の語釈の後に主題句を引用しているが、「尻のさき」とは何のことかわからない)、柳雨「風俗志」には「顔と尻ばかり」と頭注があるが、顔はともかく尻を磨くとはどういうことかわからない。

仮に「頭から尻まで全身」とか、「朝から晩まで一日中」というような意味とすれば一応辻褄は合うが、それでは次の句の意味がわからない。

鬼も蛇も酒で取らる、尻かしら 三三二

鬼も蛇も酒で取らる、尻かしら 三三二

ご教授よろしくお願ひ致します。
伊吹 賛。尻頭は、その情況に応じて、全身一日中、尻と頭、いろいろ、使い分けているのだと思います。

山口 本当にみがくのは頭の方だが、語調を整えるのに終始という意味も含めて姑が強く言つたのでしよう。

清 尻頭の用例を集めたいですね。

719 一卜所八をしめのやうなふもんぼん

小栗 緒締めは、巾着・印籠・煙草入等の緒を束ね締めるため付ける玉石類。(「江」)

専門品は観音経のことで、その一カ所はまるで緒締めのようなこと。観音経の中で「若有百千万億眾生、為求金、銀、瑠璃、砵磲、瑪瑙、珊瑚、琥珀、真珠等宝」と、寶石名が羅列される箇所があり、これを緒締めのようなだと喩えた所が手柄というだけの句。

清 賛。

720 五百万石は白石めう手なり

小栗 伊達藩の重臣である白石城主片倉小十郎の挿話を詠んだ句。いわゆる伊達騒動ののち、江戸表へ緊急出張してきた小十郎

は、稲葉美濃守から仙台藩の石高を聞かれて、おおよそ五百万石と答えたという。実際は六二万石であるのを、このように大袈裟に答えたのは、国替えを防止するための小十郎の計略であつたと言われる。

主題句は、このことを「白石」の城主小十郎が「妙手」を打つたと表現したものであるが、「白石」と「妙手」という甚の縁語を並べたのが手柄というところ。例句も同じ。

白石は五百手程も先が見へ

一五二

白石はいふほどの事先手なり

三五五

(参考) 伊達顕秘録(騷動実記)

其後、松前鉄之助は小十郎に向かひ、今後御家の安危未だ定らずして諸士安き心はなかりし時、稲葉美濃守殿御出ありて知行高の事を尋ねられしに、其元白地に五百万石と答へしられし由、且御家に別条のなからん事を仙台迄も内意仰越されしは如何なる仔細に候と不振を打て問ければ、片倉聞て答へる様、然ばなり其節の御尋我等も大きに当惑せしが、是は今度の騷動を過意に国替を仰せ付られんが為の御聞合わせならんと心付し故、白地に知行高を多く申上れば御沙汰も相止御家安全ならん事と察しけるに、果して思ふ所と違

ざりしは我発明に非ず、幼君の御運の強き所なりと申されしかば、松前手を打て其頓智の程を感心せり。

清 賛。

721 しけ忠が無いとあざはね打つ所

小栗 「あざはね」はめくりカルタ用語。「あざ」はハウ(棍棒)の一の札のこと。また「はね」は、「雨中徒然草」に「同じゑ二まへツ、そろふをはねと云」とあるように、めくりカルタの役の名。従つて「あざはね」は「あざ」が二枚揃つた役のことをいうものと思われる。

主題句は、幸若舞「景清」を題材とした句で、「しけ忠」は畠山重忠のこと。

平家の残党景清は、東大寺大仏供養に出席した頼朝を狙うが、警護の先陣を勤める畠山重忠に悉く妨害される。最初は、転害門で長刀を持って襲うが重忠に見破られ、次に山伏の姿となつて般若寺で待つが、これも重忠に見破られる。最後に乞食姿になつて狙うが、これも重忠に「まさしく、御身は乞丐人ではなくして、平家の侍大将に悪七兵衛景清と見たは、秩父が僻事か」と、あつさり見破られてしまふ。

句意は、こういうストーリーを題材にし

て、景清は、もし重忠がいなければ、頼朝を討つという「あざはね」のような大成果を得ることができたのといふこと。わざわざ「あざはね」を持ち出したのは、景清所持の太刀「悲丸」の利かせのためと思われる。なお、「史伝」では、鶴越で馬を背負つたエピソードの句としておられるようであるが、誤りだろう。

重忠はあざむかれぬ男なり 二四二乙
清 賛。

722 いつにない御きげんと手をもぎはなし

小栗 そのままの句だが、状況がはつきりしない。考えられる一つの設定は、酒でいい機嫌の男が女の手を握つたような場面。女が「まあ、いつにないいい機嫌ですわね」などと言いながら、男の手をもぎはなすという次第。この言葉遣いは踊り子などプロの女性を連想するが、プロは手をもぎはなすような強い行動はとらないような気もする。日常よく見る光景を観察した句といふこと、強いて特定する必要もないか。

もぎ放しあれおかみさんだなさんが

清 賛。

末三三

愛染帖

新家 完司 選

東大阪市 北村 賢子

わたくしの素顔に耐えている夫

(評)耐えているのか諦めか…。この「素顔」はノーメイクの顔のみではなく、飾らない心も含めてだろう。こうなつて本当の夫婦。

小石蹴り少しよろめく春の道

西宮市 藤本 直

(評)春めいてきた陽気に少年のように弾んだのだろう。が、身体は少年のように動かない。歳を考えて行動しなければ…。

風邪ひいて三日寝たのに瘦せてない

鳥取市 前田 楓花

(評)寝込んだ代償として三キロぐらい瘦せていると期待したが…。根っから丈夫ということだろう。ふつくらの方が長生きできる。

水虫ですが足湯入つていいですが

三田市 堀 正和

(評)「ヤダー」「汚〜い」「ダメ〜」という声が開こえそう。確かに、水ぶくれや皮がめくれた足が見えたら気持が悪いだろう。

寝屋川市 森 茜

七日分話しせいせいして帰る

(評)話したいあれやこれやがいつぱい溜まっていたのだ。七日が限度ギリギリ。それ以上溜め込むとストレスで胃潰瘍になる。

しばらくは静かにしろと歯が疼く

岡山市 工藤千代子

(評)七日分話したり笑ったり、買物に走り回ったり句会に行ったり。久しぶりに歯が痛むのは神さまからの警告だろう。

混浴の隅に哲学者がひとり

堺市 澤井 敏治

(評)異性の裸体などまったく無関心、とでもいうように瞑想している御仁。案外ハートはドキドキしているのかも知れない。

お小言にあくびをひとつ産みおとす

大阪市 栃尾 奏子

(評)「暖簾に腕押し」「糠に釘」小言幸兵衛さんも張りのないことである。しかし、相手が亭主ならいいが上司ならまたお目玉だ。

不安になるなら予告欲しかった

姫路市 古川 奮水

(評)ここまで急激な不安は誰も予想していなかったのではないか。為替差益で儲けるのは、株と同じように簡単ではない。

もう一度二人暮らしがしてみたい

倉吉市 岡崎美知江

(評)二人で暮らしていたときは「有り難い」

とも何とも思わなかったが…。この句を見て天国のご主人も胸を打たれることだろう。

河内長野市 坂上 淳司
あほやなど言われほんまやなどと思う
分ける手間省いてやろう遺産ゼロ

大阪府 米澤 俣子
盗られたとばやけば呆けの始めなり
遺言の書き方習う敬老日

札幌市 三浦 強一
通帳の隅に隠れていた利息
アルバムの孫はいつでもVサイン

松山市 神野きつこ
平成の歴女が集う壬生屯所
年齢とパンツのサイズ比例する

西宮市 片山 忠
下手だけどとても呼吸にいい演歌
救急車僕は三回乗りました

大阪市 榎本日の出
私のスベアないから葉漬け
世話になる嫁には甘くなつてゆく

堺市 内藤 憲彦
通勤の後頭部にも春が来た
病人より立派なマスクして見舞う

西予市 黒田 茂代
エンジントラブル経験もした空の旅
死語だつて使つていれば魅る

京都市 都倉 求芽
ごつごつの字が絵手紙によく似合う

青森県 菊池 京
満月と立ち飲みをするワンコイン

松江市 川本 畔
叱られた言葉頭が消化せぬ

枚方市 伊達 郁夫
献血に腕をまくっている枯木

奈良市 大久保真澄
自慢話じつと聞くのも人助け

鳥取市 土橋 螢
どの顔も銭に追われた皺ができ

青森市 守田 啓子
母さん時々月が抱きに來る

大阪市 高杉 力
ぱみゅぱみゅと眠りが浅くなりました

大阪市 谷口 義
雨だから今日は映画にしておこう

大阪市 谷口 義
晩年はサララップで出来ている

三田市 福田 好文
ナマケモノとどの欄に書くのですか

三田市 福田 好文
人の目があれば張り切るボランティア

奈良市 尾畑なを江
OB会自慢話を聞きに行く

香南市 桑名 孝雄
夢の中会いたい人は現われず

香南市 桑名 孝雄
ほとほりがさめ やって来たのはカラス

徳儀に指ひっかけて耐えている

孫人試用心棒でお江戸まで

大阪市 古今堂蕉子
ヒレ酒に隠れています青い鳥

堺市 奥 時雄
心に太陽をポケットに詰め

堺市 奥 時雄
ほんやりと聞いているしかないお経

藤井寺市 俣野登志子
三角ベース置いたのはこの辺り

川西市 山口 不動
やさしくしてね打たれ強いは過去のこと

鳥取県 竹信 照彦
平凡な暮らしまだまだ飽きてない

鳥取県 竹信 照彦
出欠の葉書で届く訃報あり

鳥取県 竹信 照彦
握手してお辞儀もしてる日本人

唐津市 井上 勝祝
僕の名を戒名にした団十郎

唐津市 井上 勝祝
戒名に柳勝などと書いてみる

唐津市 井上 勝祝
沈みゆく心に檄の五七五

弘前市 福士 慕情
五七五 音字数える指がある

高槻市 富田 保子
老いふたり普段通りの日が暮れる

羽曳野市 宇都宮ちづる
鍋の日もやはり無口な老い二人

佐賀県 真島久美子
全部脱ぐもうワタクシになるだけだ

岡山市 永見 心咲
重すぎる記憶の貨車は切り離す

高槻市 原 洋志
故郷の少し酸っぱいさくらんぼ

和歌山市 武本 碧
作戦を練っている間に日が暮れる

弘前市 高瀬 霜石
よく迷いよく悩みよく酒を飲む

三田市 上田ひとみ
近頃は熱燗なども呑んでいる

大阪市 藤田 武人
思い出を肴に飲もう七回忌

鳥取県 山下 節子
ブランドに負けそうなので身につけぬ

堺市 村上 玄也
我が家には補正予算はありません

米子市 中原 章子
強力なプラセボ効果ある笑顔

神戸市 山口 光久
ホーホケキョ僕にもあった早春譜

藤井寺市 太田扶美代
やさしくなろうと思っではいるのだが

奈良市 岩本 浩二
福耳だけれども金は貯まらない

香芝市 大内 朝子
わたくしの海馬この頃むず痒い

大阪市 坂 裕之
五百円預金でいつか家建てる

岡山市 藤成 操江
ひと仕事済んだ気になる六千歩

大阪市 阿野寿美子

ビクニツク農家の梅が風情添え

浜松市 岡田 史郎

方々を切られた梅の花香る

目撃市

諦めがいいのは長所かも知れぬ

吉道あかね

河内長野市

大阪のヘソは此処だと戎橋

村上 直樹

シドニー

右往左往して情報をさぐる蟻

坂上のり子

米子市

年金が口座を経由して逃げる

生田 寒之

堺市

孫自慢のし袋提げ聞きに行く

矢倉 五月

河内長野市

図書館で2ページ読んですぐ昼寝

藤塚 克三

長岡京市

さあ行こう化粧も服もバッチリや

山下 凱柳

鳥取市

暇あれば無駄口ばかり叩く妻

山下 凱柳

若屋市

点滴五日望まないのにダイエツト

黒田 能子

豊中市

ゲルニカの悪夢の絶えぬテロの国

水野 黒兎

海南市

啄木の歌が身にしむ冬の底

小谷 小雪

弘前市

わたくしの頭はいつも雪模様

稲見 則彦

豊中市

甘過ぎるアペノミクスというジュース

藤井 則彦

大国のいちゃもん耐える水面下

津村 律子

株高にバブルの夢がまた疼く

木田比呂朗

苛めなどないと校長白を切り

太田 昭

いじめなどないと思うよ蟻の列

夏目 一粹

大阪で豹柄着ても目立たない

大川 桃花

何着ても温ければよし老いの服

遠山 可住

夫婦仲風邪移しあう距離にいる

巴子

大安が行事の日取り決めてる

多田 雅尚

聞こえ過ぎる耳が有るけど超近視

田中 みね

こんな時しか会えませぬと葬儀場

三島 崧丘

子の古里は大阪のニュータウン

志田 千代

頑固だけ残り意欲は消えました

奥村 五月

羞恥心まだ持っている紅を買う

大前 安子

堺市 大和 峯二

目もとから好きと気持がこぼれてる

岩崎 公誠

一病に甘え老化が止まらない

中井 アキ

懸命に目くばせ今日も無視される

加島 由一

腕力は落ちたが口はまだ達者

平木 公子

延命は要らぬと元氣だから言う

小澤 幸泉

あえぎつつただ登るだけ老いの坂

菜摘

ミシユランの星におとらぬ煮ころがし

坪井 孝一

おふくろに優しくおつか握られる

金川 宣子

ばあちゃんの匂いも運ぶ宅急便

平田 実男

ネズミ捕り知らず対向車のライト

後藤美恵子

新築に余命を指で折ってみる

中居 善信

うろろうろがやつと落ち着く酒二合

有沢せつ子

買物の三つ以上にメモが要り

土屋起世子

ほんとうの笑いが欲しい笑い皺

和歌山市

奈良県 渡辺 富子
今はまだ老人になる途中です

西宮市 牧瀬富喜子
マスクして毀れぬように生き延びる

明石市 梶谷 和郎
底冷えの鼻を解凍する湯舟

大阪市 榎本 舞夢
キッチンを任せた夫生き生きと

三田市 北野 哲男
勉強をさせてもらたとバナにする

大阪市 小栢こずえ
脳味噌のために羊羹食べている

鳥取県 細田 裕花
酸化した脳を新刊書で洗う

大阪市 太田としお
価値観の同じ男と飲み明かす

池田市 栗田 久子
菌車がずれても途切れない会話

堺市 近藤 治子
指折って数える夫の年回忌

三田市 上垣キヨミ
亡き夫の浮気の夢が目が覚める

鳥取市 岸本 宏章
黄砂出す国へあげたい畑の草

豊中市 荒巻 夢
どんど焼きおひねり渡す人もなく

篠山市 酒井 真由
ピース玉の指輪くるりと喜寿の春

藤井寺市 若松 雅枝
予防注射ちゃんとしたのに風邪を引く

豊橋市 藤田 千休
花金が通勤靴を弾ませる

弘前市 今 愁女
家族葬で済ませましたと隣組

三田市 雑賀 一泉
工場の野菜が季節狂わせる

大阪市 柴本はつは
落ち目とはいけずする気も失せてきた

米子市 成田 雨奇
障害者割引ないと言う酒屋

和歌山市 上田 紀子
せめて息掛かる辺りへ置く句集

広島市 岸本 清
自信あり免許更新次も金

鳥取県 西谷 悦子
町内くらい乗るゴルドの免許持ち

箕面市 酒井 紀子
この中に心入れます切手貼る

三田市 石原 歳子
封を切る前に切手の図柄みる

枚方市 二宮 山久
善人の仮面だんだんはげてくる

八尾市 高杉 千歩
どうなつてんのウメキタ巡り老いの杖

大阪府 初山 隆盛
鶴橋のホームに誘うあの匂い

倉吉市 山本 玲子
隣より回覧板と茹で卵

八尾市 吉村 一風
デバ地下の試食売り場で春もらう

紀の川市 楠原 富子
医者顔見ると元気になる私

泉佐野市 稲葉 洋
玉子焼き食べて大鵬さん送る

大阪府 畑中 節子
春愁や鬆の入りたる茶碗蒸し

鳥取市 永原 昌鼓
八十の峠目の前よつこらしよ

和歌山市 松尾 和香
熱い思い語つた君も流れ星

岸和田市 増田 隆昭
黒タイを少し緩める葬の帰途

倉吉市 山中 康子
年寄りを笑つたことを今思ふ

尼崎市 小池 幸子
鏡餅カビ寄せつけぬ程の寒

江南市 脇田 雅美
指紋薄れすべつて茶碗よく割れる

米子市 後藤 宏之
弟の墓の近所に友ねむり

西宮市 緒方美津子
梅干に恩義あります日本人

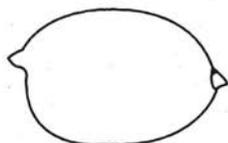
和歌山県 森下よりこ
散歩する人に見られる野菜畑

共選欄

檸檬抄

(薰風書、カットとも)

(投句 806句)



K. K

「習う」 奥田 みつ子 選

老いて繰るページが重い入門書
 原石がダイヤにもなる習い事
 お習字にミヨちゃんと行く恋初め
 晩学へ輝く星の柴田トヨ
 逆らわず前を見習う蟻の列
 毎日が勉強畑の土に問う
 親の振り習う小鴨に揺れる池
 真っ直ぐな竹に習った人の道
 習い事の梯子へママの運転手
 ママごとの中に見習う僕がいる
 冬に咲く花に見習い活入れる
 習う事まだまだあって呆けられぬ
 舞台袖師匠の所作をなぞつて
 井戸端でこっそり習う生きる知恵
 睦まじくひと日を集い習う幸

富田林市 片岡智恵子
 松江市 藤井 寿代
 横浜市 小野句多留
 鎌山市 円増 純子
 大阪府 米澤 俊子
 和歌山県 森下よりこ
 高槻市 福田 勝治
 大和高田市 鍛原 千里
 大阪市 大川 桃花
 八尾市 内海 幸生
 三田市 久保田千代
 大阪狭山市 矢野 梓
 神戸市 伊勢田 毅
 大洲市 花岡 順子
 大阪府 畑中 節子

「習う」 森山 盛桜 選

徒花となる数々の習いごと
 習うより慣れて手抜きがうまくなる
 青い目がレシビほしがる胡瓜もみ
 道楽でないと言い張る習い事
 シナリオになかった道を習ってる
 電線のカラスに習うこともある
 物言わぬ見本手本がある現場
 戦争で習った事はみな忘れ
 習うほど道の深さに立ちまよう
 役に立つとこだけ習いすぐ辞める
 道草で習う良いこと悪いこと
 中学の課外授業に祭り笛
 下積みが生活力を身に付ける
 月末に自習しました質屋行き
 新鮮な感動に会うから習う

西宮市 山本 義子
 羽曳野市 吉村久仁雄
 シドニー 坂上の子
 倉吉市 中村 毅
 吹田市 大谷 篤子
 松江市 藤井 寿代
 大阪市 藤田 武人
 鳥取市 土橋 螢
 岡山県 福原 悦子
 豊中市 江見 見清
 宇都部市 平田 実男
 日高市 根岸 方子
 今治市 渡邊伊津志
 大阪市 佐藤 忠昭
 鳥取県 斉尾くにこ

習い事果たせぬ夢を子に負わせ
 姿勢良く座って習う茶の心
 子に習う雑学の妙天を衝き
 八十の手習い焦ることもなく
 かあさんに習った欲のない暮らし
 まだ習うことがいっぱいありすぎる
 笑い方教えてくれる赤ん坊
 長いこと生きて覚えた人の道
 私に習ったらしい嫁の味
 先人に習い今あり明日がある
 手本から抜け出してから文字が生き
 無垢な眼にあやかりたくて子に習う
 八十の手習いにある虹の橋
 漢字教えてパソコン習う祖父と孫
 表情まで習うてしまう英会話
 姑の味そーっと盗む目分量
 八十の手習い亡夫が背を押す
 一行詩習うてにをは奥深い
 親方が黙って手元見せた恩
 師をまねてやがて身につく自分流
 雨は止むものと大空から習う
 良いも悪いも全部見習う親の背
 習うほど奥深くして山高し

川西市 大坪 一徳
 鳥取市 深澤千恵子
 寝屋川市 小谷 滋彦
 吹田市 木下 敏子
 和歌山市 福井 菜摘
 大阪市 山本加お里
 三田市 上田ひとみ
 出雲市 伊藤 玲子
 大阪市 神夏磯典子
 鳥取県 竹信 照彦
 犬山市 吉田 幸子
 倉吉市 山中 康子
 大阪府 桑田ゆきの
 東京都 井上つよし
 池田市 上山 堅坊
 神戸市 山口 美穂
 芦屋市 竹山千賀子
 和歌山市 北原 昭枝
 唐津市 坂本 蜂朗
 神戸市 井上 忠貞
 堺市 矢倉 五月
 紀の川市 楠原 富子
 枚方市 海老池 洋

あく抜きを習う隣の台所
 主治医だがもう何人目研修医
 かあさんに習った欲のない暮らし
 先人に習い今あり明日がある
 忘れてることは習ってないと言う
 見習って同じ間違える作法
 練習をしたメロデイが出てこない
 肉ジャガとカレーを習い赴任する
 カルチャーの梯子人生謳歌する
 黄泉へ行く土産山習い事
 人間の狭間を満たす習いごと
 外国で日本を習う空の旅
 習ってもどうにもならぬメカ音痴
 君が代を習って日本人になる
 電池切れするまで習う人の道
 習っても右へ左へ散るさくら
 息をする恋する誰に習ったか
 細胞が習得してるお家芸
 損得を実地で習ういいチャンス
 一から五習い次の日一から五
 道具みな揃えて教室を探す
 したたかな相手に習うフラフープ
 残り火を煽って習う好きな道

大洲市 花岡 順子
 三田市 北野 哲男
 和歌山市 福井 菜摘
 鳥取県 竹信 照彦
 堺市 澤井 敏治
 出雲市 竹治ちかし
 富田林市 中井 アキ
 唐津市 仁部 四郎
 弘前市 福士 慕情
 大阪府 桑田ゆきの
 篠山市 佐々木 勇
 高槻市 富田 保子
 川西市 西内 朋月
 松江市 石橋 芳山
 青森県 松山 芳生
 富田林市 山野 寿之
 橿原市 居谷真理子
 鳥取県 細田 裕花
 川崎市 成田 征二
 大阪市 古今堂蕉子
 富田林市 関 よしみ
 岡山県 田中 恵
 大阪市 吉村 一風

習うより慣れると孫が言うパソコン
外国で日本を習う空の旅

努力・怒力・怒力のおかげ力痛
気配りの大事を習い人となり

花いちもんめ父から習う老い
の道
習いごといくつか自分探しする

色即是空習いたくなる日暮れどき
母の所作私の芯に浸みている

指先から笑みがこぼれた母の辞書
習い事師のきびしさを思い出す

日本語を習ってほしい日本人
決断力あなたのそばで見習った

残り火を煽って習う好きな道
父の背に反面教師貼ってある

八歳も八十歳も夢習う
習いごとあるから今日も弾んでる

習練の極みへ赤い実がみゆる
継続が大事と知った習いごと

品格は習えないものしみ出る
秀句

オカリナを習って風と話す
習いつつ自分の姿に変えてゆく

目の前にいつも見習う父母がいる

和泉市 横山 捷也

高槻市 富田 保子

弘前市 高瀬 霜石

弘前市 岡本 花匠

貝塚市 吉道あかね

寝屋川市 森 茜

鳥取県 斉尾くにこ

和歌山市 堀 富美子

和歌山市 さかたきく

大阪市 山崎 君子

大阪市 大西 晴雄

長岡京市 山田 葉子

大阪市 吉村 一風

札幌市 小沢 淳

大阪市 初山 隆盛

東大阪市 北村 賢子

香芝市 大内 朝子

高槻市 片山かずお

生駒市 飛永ふりこ

秀句

西宮市 亀岡 哲子

岩出市 藤原ほのか

西宮市 牧渕富喜子

習うほど私の井戸を深くする

日本語を習ってほしい日本人

飲み込みの早いチンパンジーの脳

句集から習う言葉の回し方

母さんに習っておけば大丈夫

絵手紙を習いわたしの草枕

習っても書き順の癖直らない

丁寧に復習晩学のノート

神様の声に学習した天狗

人格の形に置いてある基石

折折に習おう世の中のいろは

習いごといくつか自分探しする

世の習い人の世にある返し縫い

先生の注文通り進めない

習練の極みへ赤い実がみゆる

丸い背に習うこの世の歩き方

挫折したあとのピアノは飾り台

予習など出来ぬ明日はケセラセラ

強いなあなんでもバネにしてしまふ

秀句

習うほど奥深くなる斬られ役

晩学の復習らしい鼻濁音

托卵を見習ったのかネグレクト

瀬戸内市 東横ますみ

大阪市 大西 晴雄

堺市 村上 玄也

鳥取市 西川 和子

三田市 田中 章子

松山市 高橋 宏臣

堺市 奥 時雄

西予市 黒田 茂代

和歌山市 武本 碧

紀の川市 辻内 次根

池田市 栗田 久子

寝屋川市 森 茜

大阪市 高木 道子

三田市 辻 開子

香芝市 大内 朝子

三田市 久保田千代

京都市 清水 英旺

尼崎市 藤井 宏造

弘前市 高瀬 霜石

神戸市 伊勢田 毅

塩竈市 木田比呂朗

八尾市 新海 信二

乳貰いはつらい

小栗清吾

前号では、子を授かった幸せな夫婦の句をご紹介しました。

子が出来て川の字形に寝る夫婦 初4

となるのは、至福の時でありましょう。

しかし、何かの事情で夫婦の一方が欠けると、事態は一変します。特に、乳飲み子を抱えた亭主の悲惨な生活は、川柳の格好の材料になっていきます。

女房がいなくなる理由は二つ。

南無女房乳を飲ませに化けて来い 捨三13

というのは、お産の時に女房が亡くなったのです。赤ん坊がお乳を欲しがるのに、女房はこの世にいない。「化けて来い」が、滑稽でもあり悲痛でもあります。

去った晩餅や砂糖で夜を明かし 一五24

こちらは、女房を離縁したのです。江戸語で「去る」は「離縁する」という意味で、「女房を去る」というように使います。

女房を去った晩、乳を欲しがって泣く子を抱えて、餅をドロドロに煮たり、砂糖を溶かしたりして、一晩中寝られなかったのです。そんな苦勞をしなくては、離縁などしなければいいのですが、「去った」というのは

見栄で、実際は逃げられたのかも知れません。現在のように人工乳の発達していない江戸時代では、こうした亭主は、母乳を分け与えてくれる人を頼っていくほかはありません。

これを「乳貰い」といいます。

乳貰いに大の男のむごいこと 九25

大の男が赤子を抱え、乳をわけてもらおうと懇願して歩くのは、みじめな姿です。

乳貰いの夜明けも近くだますなり 九37

夜明け近く、子供がお腹が空いて泣きだした。でも、どうしようもありません。何とかだまして、夜明けとともに乳貰い先へ駆けつけるのですが、先方はまだ寝ていたりします。

子を抱いて朝寝の門へむごいこと 安四礼2

朝寝していても、在宅ならばいいのですが、芝居見物に行ったり、花見に出かけたりして、留守のこともあります。

乳貰いへ気の毒そつに芝居なり 一一22

乳貰いがかっかりとして花見かえ 九8

在宅していても、忙しいときは断られます。

乳貰いの突き飛ばされる大三十日 安元義1
いずれにしても、乳をくれる人の好意にずがるわけですから、気遣いの連続です。

乳貰いは犬に愛想して入り 明元松1

おかしくもないに乳貰い笑つなり 三二33

もの言わぬ子に乳貰いは礼を言い 七七11

飼い犬にも愛想をしながら家に入った、おかしくもないのにお追従笑いをしたり、先方の赤ん坊にもお礼を言ったり…。

乳を分けてくれる人も、自分の子が優先です。乳貰いの子があまり飲むと、鼻をつまんでそれ以上飲ませないようにしたりするので、それを咎めたりはできません。

鼻をつまむのは乳貰い知らぬ振り 一五36

かくして、先方の子は丸々と太っているのに、乳貰いの子はやせ細っています。

乳貰いは代わりに重い子を抱かえ 明元叶2

やせた軽いわが子が乳を飲ませて貰っている間、先方の重い子供を抱きかかえていることになります。

でも、江戸に人は、みんな優しいのです。「い

ま手が空いているから、乳を飲ませに連れておいで」と、御用聞きを使って伝えてくれる人もいます。有難う！

乳貰いに今来なさいと御用言い 八8

「痒い」

米田恭昌選



初陣の蚊が味見した首根っ子
頼まれて背中掻く手が嬉しそう
ギブスした脛の痒みに泣かされる
怪しげな儲けばなしは耳痒い
行間に殺し文句のある痒さ
美人過ぎる自画像眉毛痒くなる
ひとしずくの愛が痒さへ手が届く
優しい手かゆいとこころを知っている
母という掌だけがとどく痒いとこ
温い手で背中を掻いてくれた母
本物の孫の手うれし痒い背な
痒いのはいつも背中のご真ん中
許したら胸の傷跡痒くなり
むず痒いお世辞聞いているイヤリング
瘡蓋を剥いてしまった夢の中
五十肩孫の手でさえ掻けぬ背
痒い所に届いた手から請求書
霜焼けが痒くて惚ぶ母のこと
山芋も小芋も痒くない育ち

三田市 上垣キヨミ
和歌山市 磯部 義雄
札幌市 三浦 強一
大阪市 岩崎 公誠
茨木市 藤井 正雄
堺市 荻野 象山
和歌山市 土屋起世子
八尾市 宮西 弥生
大阪市 榎本日の出
藤山市 遠山 可住
紀の川市 楠原 富子
堺市 矢倉 五月
豊中市 水野 黒兎
松江市 三島 淞丘
奈良県 渡辺 富子
黒石市 佐藤 古拙
鳥取市 福西 茶子
河内長野市 松岡 篤
香芝市 大内 朝子
大阪市 笠嶋 惠美

揉み手する笑顔に背筋痒くなる
痒痒い若気の傷が脛にある
言えませんが股間が痒いなんてこと
身に覚え背なの辺りがむず痒い
耳痒くなつて吉報迷いこむ
ボランティア他人の痒い背なをかく
喧騒の灯に馴染めずに目が痒い
合わせ鏡しても届かぬ背の痒さ
馬耳東風いたくも痒くもない話
母と妻痛し痒しの仲に居る
イエスマン痒いところに手が届く
痒いとこすぐに見つける嫁の手だ
佳

おべんちゃら歯も浮く耳も痒くなる
痒い背へ妻に孫の手渡される
一刺しで逃げた蚊のあと掻いている
婆ちゃんが背中掻いてた鯨尺
痒くとも転ぶしかないタルマさん
人
他人にはあなたの背中掻かせない
地
痒い背がタンスの角を丸くする
天
相植へ伸びる天狗の痒い鼻
軸
齒痒さはひと押し足らぬ好きな人

弘前市 富士 慕情
鳥取県 吉野いさお
岡山市 永見 心咲
河内長野市 山岡富美子
和歌山市 上田 紀子
藤井寺市 鴨谷瑠美子
大阪市 津村志華子
藤井寺市 高田美代子
堺市 遠山 唯教
八尾市 宮崎シマ子
弘前市 高瀬 霜石
大阪市 神夏磯典子
奈良市 大久保眞澄
東大阪市 北村 賢子
弘前市 今 愁女
三田市 北野 哲男
唐津市 北村 松風
米子市 中原 章子
和歌山市 平田 元三
海南市 堂上 泰女

「植える」

板山 まみ子 選



脳味噌に植えた新語がもう消えた
 優しさを植える心に陽が昇る
 植林の杉もあのころ期待され
 瞳植え乙女心に花咲かす
 球根を植えて一緒に春を待つ
 温暖化ストップさせる木を植える
 農家から見れば可笑しい鉢のナス
 手植えする父と母とで千枚田
 植毛を気にするような年になり
 自己暗示君はできると植えつける
 慣習が差別の心植え付ける
 臓器移植人の善意に生かされる
 父さんが植えた木がある胸の中
 小農を守り今年も田を植える
 子の庭へ親の思いを植えておく
 自家農園バリバリ食べる生野菜
 記念樹を植える場所だけ決めておく
 花よりも一石二鳥の夏野菜
 多忙でも植毛チラシ見逃さぬ
 苦のタネも植えて浮き世のあれやこれ

和歌山市 上田 紀子
 和歌山市 松尾 和香
 高槻市 富田 美義
 和歌山市 平田 元三
 大阪市 神夏磯典子
 鳥取市 永原 昌鼓
 米子市 吉田 陽子
 大阪市 柴本ばつは
 西脇市 七反田順子
 豊中市 水野 黒兎
 鳥取県 吉野いさお
 奈良市 米田 恭昌
 橿原市 居谷真理子
 鳥取市 土橋 螢
 四條畷市 吉岡 修
 堺市 増田 和幸
 竹原市 六田 半徳
 藤井寺市 田付 絹枝
 高槻市 初代 正彦
 藤井寺市 高田美代子

球根に声掛け植えるチューリップ
 挿し木した薔薇それぞれに思い出が
 血管を植えなおしても生きられる
 ひまわりに願いを託すシーベルト
 五年生学習として田植えする
 宮参り庭に記念の苗木挿す
 喜寿の春あしたに咲かす苗植える
 豆の木を植えて天国めざしたい
 百姓の意地で被災地米を植え
 土に生き土に感謝の苗植える
 休耕田せめて苗木を植えておく
 少年に第九条を植え付ける

佳

お隣も向かいもゴーヤ植えている
 お手植えの松にもひいきせぬ自然
 心臓に器機を植えて翔んでいる
 都合よく物忘れする茗荷植え
 種三つ一年生の植木鉢

人

植えとけば何とかなろう過疎に老い
 地

トンネルを出たら勇氣の芽を植える
 天

PPPどうあれ春は苗を植え
 軸

郷土愛子らに植え付け祭り笛

京都府 坪井 孝一
 八尾市 高杉 千歩
 熊本市 岩切 康子
 和歌山市 武本 碧
 鳥取市 有沢せつ子
 姫路市 古川 奮水
 松江市 三島 淞丘
 堺市 内藤 憲彦
 神戸市 伊勢田 毅
 大和郡山市 坊農 柳弘
 鳥取市 池澤 大鯨
 紀の川市 宇野 幹子
 弘前市 高瀬 霜石
 出雲市 竹治ちかし
 西宮市 緒方美津子
 河内長野市 藤塚 克三
 羽曳野市 徳山みつこ
 篠山市 遠山 可住
 鳥取県 斉尾くにこ
 札幌市 三浦 強一

「おやおや」

倉 益 一 瑠 選



ありやこれは砂糖と塩を間違えた
知恵袋おやおやカビが生えている
赤い糸おやおや切って娘が帰る
泣くなんておやおやあなた珍しい
追突をしたのに車逃げて行き
蓋開けてみればどنگり背くらべ
ペアルックおやおや今日は雨が降る
頭の上捜してまわっていたメガネ
失言におやおや仮面ずれている
おやおやと油断したのが運の尽き
強情で外れた道を戻らない
おやおやと銭を数える認知症
あの人もおやおや今は布袋腹
無理無体言うておとこは試される
おやおやと思う政治家の発言
君子にもおやおや尻尾出ています
枯れ草を除けばダンゴ虫の群
生き様を写し吐息をつく鏡
ローン完済おやおや雨が漏りだした
落し穴忘れて自分先に落ち

姫路市 古川 奮水
鳥取県 西川 和子
京都市 榎本 宏子
鳥取市 山下 凱柳
堺市 奥 時雄
堺市 矢倉 五月
鳥取市 深澤千恵子
東大阪市 北村 賢子
和歌山市 福井 菜摘
鳥取市 谷口回春子
弘前市 福士 慕情
鳥取市 土橋 螢
松江市 石橋 芳山
唐津市 山口 高明
高槻市 片山かずお
和歌山市 武本 碧
鳥取市 福西 茶子
箕面市 出口セツ子
堺市 澤井 敏治
大阪市 岩崎 公誠

コスモスがおやおや恋をして揺れる
狭い座席に熟女が上手く割り込んだ
ひと言が足りぬばかりに誤解され
高慢な鼻をへし折る向う脛
おやおやで済ませられないこともある
足し算がおや掛け算になっていた
花びらがおやおや美女の胸元に
親の夢大きくくれた子の進路
おやおやと優しく包む思いやり
おやおやの中で覚えた処世術
おやおやの連続飯の世で疲れ
また馬鹿をさらけ出して三代会
佳
おやおやが一杯わたし開けてみて
おやおやへ悲しい嘘も言うカルテ
おやおやと言う間に消えた火の噂
お話が脱線をして戻らない
二転三転私が転ぶ春の椅子
人
またひとつ飛んだ記憶を止める鉄
地
その鞆に戻って元の木阿弥に
天
青い鳥こんな近くに居たんだね
軸
わたしの絵おやおや髭が生えてきた

鳥取市 夏目 一粹
河内長野市 坂上 淳司
三田市 堀 正和
紀の川市 楠原 富子
鳥取市 竹口 清信
大阪市 柴本ばつは
河内長野市 山岡富美子
横浜市 菊地 政勝
鳥取市 春木圭一郎
出雲市 竹治ちかし
鳥取県 石谷美恵子
松江市 三島 淞丘
鳥取県 斉尾くにこ
高槻市 富田 保子
八尾市 宮西 弥生
堺市 村上 玄也
藤井寺市 高田美代子
弘前市 高瀬 霜石
橿原市 居谷真理子
香芝市 大内 朝子

民族の詩歌 (11)

―助数詞の発達

三好專平

英語では、複数を表すのには語尾にSをつければよい。というよりも、つけなければならぬ。が、日本語は複数をあらわすのに、そのまま使うか、その言葉を繰り返すか「ら」「たち」などをつけてあらわす。

- ・家が建っている・(単複自在)
- ・家々が美しい。
- ・人が行く。(単複自在)→人たちが行く。

日本語は、単複にこだわらない言葉であるといえる。世界には、単複にこだわらない言語とこだわらない言語がある。日本語はなぜこだわらないのか。「座」を大切

にするからである。座の一員として、行動し、発言する。必要な情報は「数(量)」ではなく、「内容(質)」である。「いくら」ではなく、「何が」である。単複にこだわらないかわりに「助数詞」の発達を促した。五百以上あるといわれる。日常的に使われている名詞は三千語ぐらいだから、いかに多いかがわかる。

助数詞とは、物を数えるための補助助詞と言ったらよいだろう。世界でこれほど発達した言語はほかにない。砂漠の騎馬民族に、羊やヤギや牛をあらわす語が多いのと同じ現象である。

この助数詞は、後にくる語と一体になって名詞を作る。たとえば、「三冊の本」「三行詩」などと。また、副詞にも用いられる。「丁頑張るか」。

よく知られている助数詞を上げれば、

本・張・頭・個・子・個・杯・枚・科・体・柱・局・具・花・羽・猷・匹・面・足・口・人・把・軒・棟・筋・番・棹・集・句・編・

片・札・部・巻・首・手・画・粒・丁・目・騎・貫

など枚挙にいとまがない、とため息をひとつ吐く。この「ひとつ」が、助数詞の原型である。ふたつ、みつ、よつ、いっつ、と続く。「つ」は、「天津乙女」の「つ」で、古くは「の」の意味の助詞であった。今でも、地名や人名にたくさん残っている。「秋津島」(枕詞)「天津川」「三屋」。勿論「つ」は名詞として「津波」のように使われ、「入り江」の意味であったが、「船舶の船着き場」や「人の大勢集まる場所」の意味としてもつかわれるようになった。「和泉大津」「唐津」「摂津」。

川柳でもしばしば使われるこの助数詞。路郎の句より

寝転べば畳一帖ふさぐのみ
そろばんの三桁四桁の人生か
凡聖一如のこころ知る
一ト握りああ人生は和に如かず

『麻生路郎読本』余滴 (14)

「再び半文銭君に與ふ」①

葉原道夫

路郎と三好革郎

「再び半文銭君に與ふ」は、「川柳雑誌」昭和3年9月号に掲載されたものである。

筆者は三好革郎。本名は正明。明治27年7月10日生まれ。路郎が明治21年7月10日生まれなので、満6歳下になる。路郎との出会いは、路郎が大正8年(当時31歳)「商業之大日本」主幹を務めていた時だと思っ

ていたが、「川柳雑誌」昭和2年1月号「川柳家の戸籍調べ」によると、三好が川柳を始めたのは、大正7年3月頃だと答えている。三好は路郎の影響で川柳を始めたと思っていたが、そうではなかったのだろうか。あるいは、路郎が「商業之大日本」に務める前からの知り合いだったとも考えられる。大正9年10月に、路郎最初の著作「川柳漫画懐手」(「番傘」「土團子」「商業之大

日本」などに発表した路郎の作品一一一旬に註解を加えて、柴谷柴舟の漫画を添えたもの)が出たが、その「凡例」に、「出版の動機を與へられた三好正明氏、渡邊遂破氏の好意を感謝する」とあり、三好が出版社にも顔が利いたことがわかる。「川柳雑誌」昭和2年1月号「懐手」時代で、三好は次のように述べている。

麻生先生

毎年正月になるとあの懐手時代を思ひ出して仕方がないのです。彼の時代のことを思ふと、先生も大分御年を召しましたね。私も當年の元氣は浮世の波で大分洗ひ流され、日本海に突出して居る岩のやうに年と共に摺り減らされて了ひました。「商業之大日本」こそ懐手の産婆だつたのです。柴谷柴舟君

(筆者註)画家)を先生に御紹介した時代の私は随分亂暴でしたな。

(中略)

麻生先生

「三越は稼いだ金で買へぬとこ」に共鳴し「果敢なさは車掌の戀の利那主義」に同感し「夜逃げ前楽隊までも雇つて見」(筆者註)「いずれも路郎作」)にあの頃の自分を見出したことでした。苦しみの中に「商業之大日本」は先生と私とが出た了ふと間もなく完全に没落しました。

路郎は、大正8年11月限りで「商業之大日本」社を退社。その後はパトロンから生活費をもらって外国為替の研究に没頭。パトロンが急逝した後、9年秋には大正日日新聞経済部主任。「番傘」11年2月号「道頓堀河畔より」に、「路郎君は原稿制作社を起し一般より原稿の制作取次の需めに應じてゐる」とあり、著述業に手を染める。その後大阪毎日新聞に勤務。12年3月に退社後は、桃谷順天館広告部に就職。

一方、三好の方はいつからかは分からないが、大阪毎日新聞の記者となり、大正

14年には雑誌「世間」(筆者未見)の記者、同年11月には雑誌「映畫と探偵」(筆者未見)を創刊。大正15年には雑誌「公憤」(筆者未見)の編集に携わる。「川柳雑誌」同年9月号「編輯後記」(路郎筆)に、(▼七月二十五日の夜は天満宮の名高い夏祭で、社報部の囀をうけて吉岡鳥平畫伯、立木公憤社長、藤本卯之助君、三好革郎君と僕が社報船に乗った。私は「川柳西瓜は赤し」といふ天神祭裏面觀に川柳を挿入した原稿を送った。既に讀まれた方もあらうと思ふ)とある。「麻生路郎読本」「麻生路郎年譜」479頁、昭和6年の項に、(上方)7月号(7号)に「川柳西瓜は赤し」天神祭裏面觀——執筆」と書いたが、「執筆」は誤りで、この時に書いたものの再録であると訂正しておく。

『麻生路郎読本』の4頁に、大正12年3月14日、兵庫県苦楽園六甲ホテルでの野口雨情を囲む写真を載せた。路郎はこの月に大阪毎日新聞社を退職したが、この時はまだ勤務していたかもしれない。この写真には、雨情・路郎以外に、三好正明夫婦、吉岡利康が写っている。「麻生路郎読本」の「麻生路郎氏の書翰」(大12・6「大正川柳」

に、(今月は野口雨情氏が來鳴(筆者註)——當時路郎宅は鳴尾にあった)されたので、童謡や川柳でうれしい日を過ごしました。苦楽園の六甲ホテルで夜の二時半頃まで川柳の話をしました。劍花坊さんの句も出ました。雨情さんは飯沼鬼一郎氏からすすめられて川柳を作つたと言つてみました。多くの川柳家の名が雨情さんの口から漏れました。私の名も七八年前に大正川柳で選をしてゐたので知つてゐるとか、「懐手」も雉子郎氏(筆者註)川柳家吉川雉子郎。後の吉川英治)か誰かに見せて貰つて讀んだといふ話も聞きました。野口雨情氏には昨年大阪の市民館で逢つたのですが、その時にはお互に川柳の話をしなかつたので知らずに済んでゐたのです。翌朝ホテルのバルコニーで記念の寫眞を撮りました)とある。

路郎は前年にも野口雨情と顔を合せていたが、ゆつくりと話をしたのはこの時が初めてだったような書きぶりである。野口雨情を六甲に招いたのも、三好が関わっていたのではないかと筆者は思っている。そうでなければ、自分の妻を同席させるはずがないと思うからである。この時期に、三

好も大阪毎日新聞に務めていたかどうかはわからないが、三好はこの年に大阪毎日新聞記者として特ダネをスクープする。

大正12年9月1日(土) 11時58分32秒、関東大震災が起きた。「大阪毎日新聞」大正12年9月3日に、「大阪各務ヶ原Ⅱ東京聯絡飛行開始さる各務ヶ原からは陸軍の二機/特に本社記者同乗して」の見出しで、(井上第三師團長は二日午前八時半各務ヶ原飛行隊に對し東京の窮状をはじめ各官公署の安否を確めるために通信機關としての任務につくべしとの命令を發したので(中略)第五二八號機(岡崎曹長操縦石田大尉同乗)第五三二號機(末綱曹長操縦廣中中尉同乗)の兩機には佐藤師團參謀及び三好本社記者を同乗せしめて正午過ぎ各務ヶ原出發一氣に東京に向つた、(中略)師團長は本社の號外を手にして全く驚くべき事だ早く知らせて貰つて有難い成程青山練兵場などは避難民で一杯だらうから所澤へ着陸すれば自動車其他で連絡が取れようと記者の説明に耳を傾けた斯くて逐次飛行を命じ參謀長も我社の着眼點と優先權(筆者註)筆者の同僚の社会科教諭に聞く、毎日陸軍と通じ、朝日は海軍と通じてい

たということだ)を重んじて同乗を許した次第である」とある。

そして、9月4日には、三好の書いた記事が号外として出され、夕刊の一面にも掲載された。夕刊の大見出しは、「本社特派員が飛行機上から見た災禍地／悲いかな！帝都は今や廃墟の如し／本社特派員(三好正明氏)の実見記」。小見出しは、「下界を見下ろせば／御殿場沼津駿河」「京濱間の嵐の跡／見つ、東京に入る」「軍用自動車にて／東京方面に向ふ」「陸軍省を指して／麹町区に入れば」「社内(筆者註)大阪毎日新聞東京支店)は眞黒闇で／何處に何が潜んで」「車の進行を止めた／累々たる路上の屍體」「無残な最期」。このとき、三好は29歳。行動力のある有能な記者であったことが知れる。

三好は、大正14年12月に川柳雑誌社同人として入社。昭和2年7月に、有力同人で編集にも関わっていた塚崎松郎・石賀馬行が退社後は編集局に入り、昭和3年1月号からは編集後記も書くようになった。

長々と三好のことを書いたのは、路郎との関係を明らかにしたかったからである。路郎は三好の記者としての才能を高く買っ

ており、また三好も路郎に惚れ込んでいた様子がうかがえる。三好にとって路郎は兄貴分と言ってもよい存在であったと思うのである。

路郎と木村半文銭

木村半文銭は、明治22年3月7日に大阪市に生まれ、昭和28年12月16日、満64歳で亡くなった。路郎より一歳下である。本名は三郎。路郎と知り合ったのは、小島六厘坊が「葉柳」を創刊した明治39年頃か。明治42年9月、関西川柳社の創立同人。路郎(当時・千松)は、43年10月の例会に初めて出席。44年、藤村青明が出した「轍」に二人とも参加。大正2年1月、関西川柳社が「番傘」を発刊。東京にいた路郎は、2号(5月刊)から参加。4年、路郎は川上日車と番傘同人を辞退し、8月「雪」を創刊。6年「雪」廃刊。8年「土團子」を創刊するも、4号で廃刊。「雪」「土團子」には半文銭は参加せず。路郎が誘わなかったのではない。8年6月、路郎は、日車・半文銭、路郎の作品を掲載した(「後の葉柳」を創刊するが、三号で廃刊。当時、路郎は、

大阪市西成区三日路町六六三番地に住んでおり、半文銭は六六五番地に住んでいた。この頃が最も親密に二人が交際していた時期だったようだ。6月に、小島紺之助が出した「楊柳」に、7月号から二人とも社友として参加。日車は、創刊号から同人として参加していた。12年2月に、日車・半文銭は、「小康」を発刊。路郎は日車から熱心に誘われたが参加せず、13年2月に「川柳雑誌」を創刊した。

「再び半文銭君に與ふ」

「再び半文銭君に與ふ」は、「影像」に木村半文銭が発表した路郎に関する文章を批判したものである。昭和3年と言えば路郎が神経衰弱に悩まされた年である。三好自身も、昭和2年に神経衰弱になっていた。「川柳雑誌」昭和2年12月号「編輯室から」(路郎筆)に、(▼)三好草郎君が近來強度の神經衰弱に罹つて、八尾の両親のもとで静養を續けてゐる。九日に池田を訪ねて不在だったので、翌十日霞乃と共に八尾へ見舞に出かけた。「われ太陽を蹴飛ばさん」の元氣さを早く見せて欲しいと祈つてゐる

とある。兄貴分で、川柳の師である路郎が自分も悩まされた神経衰弱で弱っているところへ、木村半文銭の路郎に対する批判の文章が発表されたのを見て、三好は義憤に駆られたに違いない。その文章は、路郎を庇うあまりに蟲貞の引き倒しのような所もないではないが、考えさせられる所もあり、貴重な証言もあるので、紹介することにした。長文なので何度かに分けて掲載する。

「影像」は、広島古屋夢村が大正14年1月に創刊した川柳雑誌である。田中五呂八の「水原」、井上剣花坊の「川柳人」とともに新興川柳運動の中心誌であった。「影像」は、調べてみたところ、公共の図書館には所蔵されていない。本来なら「影像」に掲載された木村半文銭の文章と三好の文章を比較するべきだが、それがなかなか残念である。昭和3年5・6・8月号の「影像」をお持ちの方、あるいは所蔵場所を御存知の方は、ぜひ御教示願いたい。(筆者の携帯電話番号は、090・6903・1699です)。それでは、「再び半文銭君に與ふ」を、私見を交えながら読み始めることにする。

□*(1)本誌七月號で私が君に與へた一文に對する御答へが影像八月號であつたから、茲に再び君の反省を促し之を以て最後とする。君は路郎君が*(2)二足の草鞋である所謂灰色作家に算へらるゝことの無念さに義憤を感じた結果の一文であり「友人なればこそその苦言」であると書かれてゐるが、君のこの「友情」に就いて、僕は君の人格を疑つてゐるのである。*(3)「水原漫語」の中の二足の草鞋に義憤を感じられたのであれば、何故*(4)近所の路郎君の宅を訪ねて、直接會つて忠告をしないのか、君はかつて*(5)月評會の傍聽に路郎君の家へ來たことがあるではないか、月評會の傍聽はするが路郎君の爲めに苦言を呈する爲めには、わざ／＼広島くんだりまで原稿を送らねばならぬといふことはあるまい。君の友情は直接會つて話せば済むことを、わざ／＼原稿に書いて雑誌に掲載しなれば徹底しないやうな友情なのか、友人に缺點があれば成るべくそれを隠して蔭でこつそり忠告するのが僕は眞の友情だと思つてゐる。君の友情はそれを世間に發表する必要があると言はれるらしい。僕はそんな友情といふものがあると云ふことを今始

めて君によつて教へられた。これ第一に君の人格を疑はざるを得ない點なのである。

*(1)「川柳雜誌」7月号「半文銭君に與ふ」のこと。半文銭が「影像」の5・6月号に書いた「感想三題」「柳檀縦横」中の路郎に関する記述を批判したものを。

*(2)、(3)「水原漫語」は筆者未見。路郎が「二足の草鞋」を履く作家であると批判した文章なのだろう。「二足の草鞋」を履くとは、文学としての川柳と大衆におもねる川柳と、両方の句を作るといふ意味だと思われる。

*(4)当時の路郎は、大阪市西成区千本通五丁目七番地、半文銭は、大阪市西成区粉浜西之町三丁目三一に住んでいた。現在の南海本線の駅で言うとう、路郎の家は、天下茶屋と岸里玉出の間の西方。半文銭の家は、岸里玉出の一つ南の粉浜の西方。

*(5)「月評」は、同人雑誌の「川柳塔」欄や誌友雑誌の「近作柳檀」欄に掲載された句を数人で合評したもの。「川柳雜誌」昭和3年2月号から始まった。

(次回に続く)

初歩教室

題一 ボール

太田 昭

【重たい荷物は網棚へ】

中七や下五で字余りになった場合、その言葉や、網棚、つまり上の句へ持つてくる工夫をして見て下さい。

上の句は、六音から七音までは容認されませんが、中の句の七音と下の句の五音だけは守るように心がけていただきたいのです。一旦でき上がった下の句が字余りの句を、再度見直し、下の句と上の句を入れ替えることで、案外整った作品になることがありますので、挑戦して見て下さい。

【少しの修正で良くなる句】

原 無器用で直球ボール投げれない 美知江
直球だけで、ボールと言うことは解りますので、敢えて「直球ボール」と表現しなくても良いと思います。

添 無器用で直球さえも投げられず
原 ボールペン替えて気分も替えているこずえ

添 ボールペン替えて気分を変えてみる

原 投げたボール世代がって受け損ねる (株)玲子

添 投げたボール違う世代が受け損ね

原 投げ合つて心通じる妻の愛 滋彦

添 投げ合つて心通じる夫婦愛

原 カーブ球妻との会話噛み合わぬ 紀美恵

添 変化球妻との会話噛み合わず

原 行き先はボールに聞けと振りまわす一泉

添 行き先はボールに聞けとバット振り

原 見た目よりするが楽しいボール投げ 久子

添 見てるよりやって楽しいボール投げ

原 ひねくれを表で隠す段ボール 孔一

添 ひねくれた顔を隠した段ボール

原 顔面にパシッと当り球きらい (村)恵子

添 顔面を受けた直球嫌になり

原 キャッチボール親子の会話弾んでる 英男

添 キャッチボールで親子の会話よく弾み

原 直球で通す人生花が咲く 凱柳

添 直球で通す人生悔いはなし

原 心情をキャッチボールで受けとめる 洋子

添 友情をキャッチボールでつなぎ止め

原 人間の原点みんな丸だつて (高)弥生

添 大リーグの原点はみな草野球

原 植木鉢こわしたボール主がない 温子

添 植木鉢を壊したボール名乗らない

原 初体面興味向う変化球 絹枝

添 初体面で機嫌向う変化球

原 ボール一つ世界の絆をつくり出す 正二

いい句ですが、中の句に不要な「を」を入れたことで、中8になりました。

添 ボール一つ世界の絆つくり出す

原 古希が来てボールの様にまたなれぬ 定廣

添 古希が来てボールのように丸くなり

原 孫とするキャッチボールに四苦八苦 開子

添 キャッチボール孫を相手に四苦八苦

原 段ボール弁当広げ春至福 (畑)節子

添 段ボールに弁当広げ至福どき

原 遊び玉投げて老後の日々しのご 寒之

添 遊び玉投げて老後の善なし

原 打った球追いかける汗も出る 美紗子

添 打つ走る球児の顔にひかる汗

原 直球のうれしい返事たじたと つな子

添 直球の返事に心ういてくる

原 日が暮れて砂場のボールひとりぼち (山)妙子

添 ボール一つ忘れ砂場の日も暮れる

原 鳥来てナイスショットを銜え去る 元三

添 ナイスショットも憎いカラスに奪われる

原 画面クギ付けボール追う家族の和安子

添 テレビ画面にクギ付けになり球を追う

原妻からはけん制球を投げられる 一文
 添牽制球を投げて女房はしたり顔 憲
 原勝負球有無を言わせずと真ん中 添ど真ん中有無を言わせぬ勝負球
 原ボール投げ孫が助手の古希の今 洋一
 添古希の春孫を相手にボール投げ
 原外交は上手に投げて臭い球 和幸
 添外交はキヤッチボールの得手不得手
 原ボールなのかボールなのか聞く視力 心咲
 添ホームランか否かボールに聞いてみる
 原公園にひっそりボール子等を待ち 徳正子
 添公園で子供待つてる球一つ
 原ボール蹴る犬と学生傭居て 冷子
 添ボール遊び犬も子供も老人も
 原投げ返すボールは孫へ期待込め 喬
 添期待込めボールを孫に投げ返す
 原大打者も球拾いから始めます 忠貞
 添球拾いから始めて打者もでかくなり
 原凡夫婦キヤッチボールは苦手です 紀雄
 添キヤッチボール大の苦手の凡夫婦
 原野球部でぶつ叩くのはボールだけ 信二
 添叩かれるボールを拭いて可愛がる
 原この一球天国地獄別れ道 滋修
 添一球で天国地獄聞き合う
 原孫が投げ遠慮するなど意地をはり 中修

添遠慮するなど孫に投げさす強い球
 原村雀ボールの様に弾む口 道子
 添ボールの様によく弾んでる村すずめ
 原段ボール張って仮設は寒さ耐え 克三
 添仮設住宅寒さに耐える段ボール
 原ドッジボールわざとぶつける好きな子に 友子
 添好きな娘をドッジボールが追いかける
 【入選句】
 節分にボールのように豆をなげ 山久子
 一球が少年達を熱くする 治子
 父と子のキヤッチボールにある絆 義雄
 通い合う心に乗せたボール投げ 回春子
 愛犬が褒められたくてボール追う きっこ
 ナデシコが復興支援のボール蹴る 志津子
 甲子園青春の夢繋ぐ球 律子
 求愛のボールは宙に浮いたまま 史郎
 沖繩にボール飛び交うキャンブイン 勝治
 集まってボール一つで輪が出来る 眞砂子
 流れ着いたボールが過去を語りだす 亜希子
 奥の手を隠すボールにある秘策 昭枝
 天辺を目指し無心に蹴るボール 明美
 ボール拾いくさらずつげ夢掴む 宏造
 父と子の絆強めるボール投げ 孝明
 イチローのサインボールが宝物 晴雄
 野つ原でボール蹴る子の無垢の夢 のり子

【佳句】
 キヤッチボールで親子の絆たしかめる 楠富子
 まぶしすぎて投げ返せずにいるボール 武人
 期待かけ投げたボールがそれていく 大子
 【今月の推せん句】
 日暮までボールを追った少年期 佐藤登美子
 虫を追いかけ、球を追いかけ母に呼ばれ
 る日暮まで遊んだ淡い少年時代の思い出。
 男性は、老いてもこの思い出を忘れるこ
 とはない。
 変化球投げ返す子の反抗期 大本和子
 反抗期は、誰しもが迎えた思春期と言う
 人生の節目である。白と言えば黒、黒と言
 えば白と言いたくなる反抗期は、少年期に
 おける成長の現れなのかも知れない。
 子の投げるどんなボールも受け止める 能勢利子
 敢えて難しい文字や表現を用いず、リズ
 ムの整った素晴らしい作品。
 子供に対する親の懐の深さが滲み出てお
 り、親子の絆と温かみを感じる。
 【選を終えて】
 推敲不足から、五七五の流れの乱れが見受
 けられました。特に、座五の乱れが気になり
 ましたが、座五は、とくに重要なポイントで
 すから十分に推敲を重ねて頂きたい。

川柳塔鑑賞

同人吟 中原 比呂志

— 3月号から

新しい年を迎えて作句された同人、

235人、1772句の中から鑑賞させていただきます。

私はいつも先輩から、「一句を残せ」「いのちある句をつくれ」と教えられました。その内容については二年前に発刊された『麻生路郎読本』95・107頁をお読みいただき、作句の基本・心得としていただきたいと思います。

また「句の一人歩き」ということもいわれました。発表された句は、作者の手をはなれ、どこで誰が見ているかもしれない、引用されるかもしれない、だから恥ずかしくない句をつくれという戒めがあります。私も一度、経験したことです。川柳塔誌に掲載されたのを、思いもよらぬ新聞社から使用させてほしいと電話があり、掲載されたことがあります。ともあれ今年も皆さん、「いのちある句」をつくるために頑張りましょう。

四コマ目だけど結論まだ出ない

牛尾 緑 良

起承転結、マンガの一駒一駒には重要な意味があります。川柳の下五と同様に最後をしつかりと抑えることで全体が生きます。パンチの効いた作品として仕上がります。小説家は書き出し最初の一文に全神経を集中するそうですが、川柳のペテランは四駒目の推敲に神経をつかいます。

厄除けの札を貼りたい活断層

竹村 紀の治

法隆寺周辺の西里地区では正月に京都愛宕山神社に代表が参拝し、そのお札を各家に配る行事が今も続いています。一つには防火の祈りと、もう一つは西里村が家康に焼き討ちされた歴史があるのを抗議の意味も含まれているそうです。活断層が動いてプロメテウスの火が暴れないよう、レジスタンスのお札を貼るのもグッドアイデアでしょうね。

謹賀新年ニユーヨークから写メールで

長浜 美 籠

風揚げ、羽子板が消えたお正月に写メールが着信。おしゃれでユニークな現代社会を的確に表現された句として拝見しました。ところで日本の元旦はニユーヨークでは大晦日ですよ。このあたりの対比がとても面白いと感心しました。

きつちりと効き目があつた副作用

奥村 五月

「良薬口に苦し」で済んだのは昔のこと。抗がん剤の副作用の苦しみは皆さんよくご存知のことです。「きつちり」で強調された「副作用」は穿ちの川柳として効き目満点と鑑賞させていただきました。

黒白をつけた白が汚される

高橋 宏 臣

清廉潔白な作者に対して相手もなかなかのつわものです。あれこれの理屈は第三者にしてみれば判断がつきにくいときがあります。言い負けると灰色にされてしまいます。「汚される」は「汚されてしまった」と過去形に読むのではなく、「汚されないぞ」と進行中の積極的な句として戴きました。

水が澄むまで知らないを押し通す

高 島 啓 子

前句と比較して、静かに見守っておれば異物は浮くか沈むか、水と分離していくでしょう。そのときに真相を語れば良いと時間をかせぐのも一つの方法かも知れませんが、揉め事を解決するタイムリグはきわめて難しいものです。纏れないように戦略の見極めが大事でしょう。

投げ出した右手を左手が叱る

川 端 一 歩

右手の傷は左手でカバーする

宮 崎 シマ子

偶然同じ見付けの句を戴きました。右左を夫婦の関係とみればどうでしょう。異心同体、左右で一对、どちらもアクシデントをカバーしあう愛情が必要ですね。ならぬことはならぬことだと教え込む

福 永 ひかり

NHK大河ドラマ「八重の桜」が人気をよんでいます。會津地方では学校で「ならぬことはならぬ」と教えていて、子ども達の間でも合い言葉のように浸透しているそうです。グローバル時代に、イエス、ノーに曖昧な日本人から、はっきり

と自己主張ができる民族へと脱皮が進んでいます。

死票になった考えぬいた末

金 子 美千代

誰が当選しても一緒、投票した人が当選しないと張り合いがない、と安易な考えの人がまだまだ多いのでないでしょうか。前句の教えを自分なりに考え、検討された結果の投票はご立派です。今回選挙は制度上にも問題があつて国民の意思が必ずしも反映された結果ではありませんでした。そのあたりを食ったあなたに責任はありません。

兆から京と思いがけない世に生きる

春 城 年 代

かなり以前に川柳塔同人句に「どんどんと進むどんどんと遅れる」(作者失念)がありました。

遅れるどころか、ご高齢の年代さんがコンピュータの世界を詠まれた若々しさに敬服いたしました。

ネジ一本緩んだままで走つてる

小 沢 淳

パーフェクトな人間は面白くありません。人は少々の緩みや遊びがあつてこそ

愛嬌があり、仕事もうまくいくものです。緩みすぎると妻のスパナで締められますから、スピード違反にならない程度で安全運転を心掛けてください。

謎々が解けて漸く春の風

高 田 美代子

診察券束ねて春へ脱皮する

高 杉 千歩

「謎々」は色々な悩みごと、雪に覆われた畑なども推察しました。「診察券」は冬特有の病状でしょうか。温かくなれば疾病も改善に向かうことを願ひ、春待つ期待感を詠まれたと解釈いたしました。

軽味の句

オレオレを笑い飛ばした河内弁

伏 見 雅 明

あほんだらー馬鹿たれーの一喝で詐欺師のほうが参つたそうです。

犬猫も駅長をする日本国

相 馬 一 花

平和で安全・安心な国に乾杯。

秒読みが始まるネズミみな逃げた

居 谷 真理子

巳年へカウントダウン。こんなユニークな正月を描けるのが川柳の醍醐味です。

水煙抄鑑賞

—3月号から

堀 正和

人並みに夢を買い宝くじ

堀 かずこ

ジャンボくじを買います。一枚でもいいのです。四億円の使い道を考えていると、だんだん夢がふくらんで来ます。年数回楽しい夢を見ましょう。

年賀状ゆつくり書こう正月に

近藤 秋星

そうですね。元旦に届くようにと郵便局の都合に合せて、バタバタと書くことはありません。貰った賀状を見ながら、ほろ酔い気分で書くことにしましょう。

胸を張り祝祭日に日章旗

六田 半徳

我家もいつからか玄関に旗を出さなくなりしました。国民の皆さん、自宅は勿論のこと、北方領土、竹島、尖閣にも、美しい日の丸を揚げましょう。

どのコース投げて妻はキャッチする

助川 和美

直球のスピードが落ち、カーブの曲がりも甘くなりました。さらに妻のミットまでが大きくなっていったのです。

ベースメーカーも付いて得た命

土井 輝恵

私も後期高齢者入りを記念して、晩秋ベースメーカーを入れました。欲張って寿命十年の電池にして頂きました。

新調のクラブで打てど百十二

高杉 力

国産から輸入物まで、私も何度もクラブを変えました。定年後、旅先で借りた女性用クラブでベストスコアが出ました。

心技体湯治の宿で整える

吉道 あかね

ここ数年大寒の頃に指宿へ湯治に行き、砂風呂で中国語や韓国語も聞き乍ら、リフレッシュしています。お互い様ですね。

後期高齢まだまだ恋もするつもり

増田 隆昭

異性もさる事乍ら、自然や旅を愛し、旨いものと酒を好む気持を持ち続けることが、長生きの秘訣なのですよね。

夫婦とは見てはもらえぬ仲の良さ

田中 由美子

腕を組む、よく喋る、ミカンを半分こする、そんな中年はきつと怪しい仲なのです。

総理の席かわっただけで景気づく

西川 冷子

円安、株高、バラマキ予算ありがたいことです。選挙の後でそのツケが来ないように祈りましょう。

バイキングお酒だったらもと取れる

多田 雅尚

シニア割引のバイキングでも、飲み放題に挑戦しても、もう元はとれません。年相応に量より質で勝負しましょう。

年ごとに物干し台が高くなる

小川 イセ

なぜでしょうね。私のスボンも年ごとに長くなり、胴回りがきつくなるのです。これなんぼ値札見ながら聞いてみる

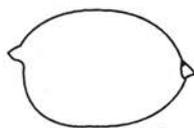
寺本 実

気の良さそうな定員をつかまえて商談開始です。半値八掛け二割引きにしてくれるまで粘りましょう。

寂しいレモン

(最晩年の薫風先生)

木本 朱夏



るだけで食欲は満たされたのでしよう。

あの世からこの世は見えてさし向かい
この世からあの世は見えずさし向かい

薫風先生が人生最後の入院をされたのは
平成十七年二月二十日。前日に私は出来上
がったばかりの句集「転生」を豊中の先生
宅へ届けに行きました。先生はベッドでテ
レビをご覧になっていましたが、傍目にも
お疲れのようでした。

ベッド脇に陶器の猫の置物があり、猫に
は目のない私が生にとると「持ってお帰り、
その猫はなあ……」と細いお声でその置物
の由緒を話されましたが、とてもお辛そう
でした。振り返りざまにギロリと眼を見開
き、天を見上げている白・茶・黒の斑の猫
の置物はずつしりと重く（これは形見にな
るかも……）予感のようなものに咬されて
私はその置物を頂いて帰りました。

その翌日、先生はおひとりで入院された
のでした。「妻ははや虚空を行けり魔界な
り」という句を作られていますように、奥
様は脑梗塞で何年も入院中で、先生はお一
人で暮らされていたのでした。

元來が少食の先生は、入院中もほとんど
召し上がることもありませんでしたが、私
たち川柳塔の者がお見舞いに伺うと、アイ
スキャンデーやおせんざいをねだられま

夏目漱石は死期が迫っていたころ「カン
フル注射をうってどうにか一命をとりとめ、
絶食の翌日は葛湯を飲み、アイスクリーム
二匙。鏡子夫人に「アイスクリームをもう
一匙よこせ」とせがむ。「なにしろお腹がす
いてしかたがないと見えて、むやみと食べ
たい様子で、いつもお医者さんと喧嘩です。
自分では寝ながらいろいろ献立を頭の中
でこさえて、やれ西洋料理だ、今度は鱈だ
というふう想像の中で御馳走をならべてみ
るのだと申しておりました」と夫人の夏目
鏡子は「漱石の思出」に書いています。

空腹も贅の一つよ名月よ

思ひ出をついでうましどぜう鍋

ここに一枚の小さな紙切れがあります。
平成十七年三月二十一日（夕）橋高薫様と記
された病院の入院患者あて献立メモです。

「全粥400g・豆乳」。薫風先生の亡く

なられるひと月前の夕食のメニューです。
いわば人生最期の晩餐のメニューでした。
その紙切れを裏返しますと、鉛筆書きの凡
帳面な先生の字で「阪急百貨店・各地名産
売場（地下）①住吉味噌（大阪）ゴマ入り
の味噌②ぶどう豆・ふっくらした黒豆・壺
詰③高砂屋・焼きあなご一串」と記され
ています。（このメモは長浜美籠さんに託さ
れたものでした）

味気ない夕食後、病床で独り（すし萬の
雀寿司もよろしなあ、水了軒の八角弁当も
長いこと食べてませんで……いやいや、やっ
ぱり住吉味噌やなあ……）などと、川柳を推
敲するようにあれこれとメモされたので
しょう。

薫風先生の食欲はたいそう細い。たとい
好物がお膳にのつたとしても、せいぜい一
箸、二匙しか召し上がれませんでした。香
ばしい住吉味噌や、焼きあなごを想像され

した。治療に差し障るということで、医師からたびたび注意をされましたが、隠れておぜんざいを薄くしたものを少し召し上がられた時は、子供のように嬉しそうな満ち足りたお顔をされたのでした。

われに過ぎたり 絢爛と死ねる歳

この頃の尿の細さよ 落ちぶれぬ

元立命館大学教授、「上方芸能」発行人の木津川計氏は「趣味人」を次のように定義されています。

- ①風雅を愛する人
 - ②清貧を好む人
 - ③悠揚迫らざる人
 - ④人生を楽しむながら生きていく人
- そして趣味人は飲んででも乱れることがなく、痩せている……云々。趣味人とはまるで薫風先生を挿しているようにみえます。

朝顔のファンファーレの中僕は生れた

橘高薫風先生は大正十五年七月十一日、兵庫県尼崎市に生をうけました。若い頃の肺疾患により常に死と隣り合わせではありましたが、暮らしのために汗して働くこともなく、経済的にも文芸の才能にも恵まれた、川柳一筋の実り多い豊かな人生だったように思います。

平成十五年に出された句集『喜寿薫風』のあとがきには、次のように感謝の言葉が記されています。

四恩の恵みを受け 存分に川柳をたのしみ 蒲柳の私が喜寿を迎える ありがたいことです

病院の丑満刻を尿捨てに

胃半分肺半分の湯呑みかな

生涯に先生は何度、入院を繰り返されたことでしょうか。常に酸素ボンベを道連れに日本全国を川柳行脚されたのです。決して健康を言訳にはしませんでした。決して逃げ込むこともありませんでした。病気に逃げ込むこともありませんでした。死を獅子身中の虫として上手に折り合いをつけておられたようで、さほど死を意識されているようには見えませんでした。

病室で旅行の案内書などをご覧になり「クルージングがよろしいなあ……。あんさん、皆と考えておくんなはれ」と退院後の計画などを楽しくそうにたてられていました。死は常に隣にありながら、先生は淡々と運命を受け入れ、悠揚迫らざる趣味人の生きざまを私たちに示されました。

檻の鶴 又 眼を閉するほかはなし

身長一七五センチの先生が三十六キロにまで体重が落ちたのです。背中では薄いベニヤ板のようであり、脚の骨は物差しのようにお瘦せになっていました。眠っていらっしやる時、思わず呼吸を確かめたこともありました。

りました。

朝日新聞、山陽新聞の柳壇の選も、NHK、朝日、毎日、サンケイ、よみうり、りんくう、六か所受け持つておられたカルチャー講座も河内天笑、奥田みつ子、西出諷楽、前たもつ、そして私に譲られ、積年の重荷を下ろされた先生は村松友視の「アブサン」や北杜夫の「木霊」、辞書や俳句の書物などをたくさん持ち込まれ、病室は書齋のようでした。

先生は新聞のチラシを三折にして、ベッドに仰臥したまま物を書かれていました。

「元旦や男も籠も玉を抱く」 薫風

昭和63年の年賀状に書いた句である。勿論のこと龍年であったから玉が抱かれている。戎さんは鯛を抱き、大國主命は兎の苦難を救い介抱して元の白兎に戻された。この世の命は短いようで長く、長いようで短い。苦しいようで楽しく楽しいようで苦ししい。川柳の道も同じである」

これは亡くなる三か月ほど前に書かれた文章です。判読不能のメモなどいくつか残されましたが、最後まで川柳を作られ川柳作家としての矜持を示されました。

（五月待つ花橋の香をかげば）と前書きを添えた平成十七年「川柳塔」五月号に発

表された作品が遺作となりました。

雪月花ただよいながら生かされて

掌のわが魂の色かたち

白鳥のごとくに孫に春がきた

古里はアノネの姉が餅を焼く

流連に雪見の酒は迎え酒

四月十日にご家族そろって病院の庭でお花見をされ、大層喜ばれたそうです。それが人生最後のお花見となりました。

桜がてすかつと散ったわけなし

先生の書き遺された文章の中の「この世の命は短いようで長く、長いようで短い。苦しいようで楽しく楽しいようで苦しい」に片肺飛行を余儀なくされながらも、決して弱さを見せず、楽しそうに振る舞っていらした先生の人生観、本音を伺ったように思います。

朝日新聞では「なにわ柳壇」選者を四半世紀にわたって務めた先生を悼んで特集が組まれました。

「師の麻生路郎ゆずりの格調高い句風後進を育成」朝日新聞に大きく見出しが躍りました。

昼寝覚めボトリと極楽へ墜ちる

この作品は平成十六年暮れ、朝日新聞社への原稿の余白に書かれていたものです。

彼岸此岸を行き来しておられた病床での実感・感慨でしょうか。

また山陽新聞では時実新子さんが「悼

橋高薫風兄おもいで」と題して、次のようにせつせつと胸迫る追悼文を寄せています。

「橋高薫風と寺尾俊平と時実新子は、三羽鳥といおうか仲良しトリオといおうか、とにかく同期の桜である。岡山の俊平さんが逝った日、薫風さんは梅の花の絵に添えて「とうとう二輪になってしまった。新子は死んだらあかんよ」と言った。(中略)：昨年はおそろいやで」と、モンブランの万年筆をプレゼントしてくれた。電話の声が弱っていて、ふとわるい予感がした。

(中略)：麻生路郎を師と定めてひとすじ。母を敬し妻子を愛し、友に誠意を尽くす人であった。その一方で、磨と渾名をつけられる優雅な色気もちあわせた人でもあった。(中略)：二人の兄と私は共に約五十年を川柳に明け暮れた。どこか野人の趣のあった俊平兄に比べれば薫風兄は律義で、

日本川柳協会の常任理事を務め、山陽新聞の川柳選者の二十三年間を全うし、師系を継ぐ「川柳塔」の主幹役もみごとに果たしたのであった。「だった」「あった」と過去形で書かねばならぬつらさ。平成十七年四月二十五日早朝に訃を聞いた私は、その日一日中泣いた。妹が残る順縁を兄たちはよ

ろこんでくれるかもしれないが、ひとりの寒さが身にしみる」。

八十になったら恋をしてみよう

僕の富レモン一個を棺に入れよ

昭和六十一年に出された句集「愛染」に収められている作品ですが、先生の遺言と思われ私はレモンを一個、棺に納めました。平成十三年、春の叙勲で木杯一組を賜与されるという、川柳人として最高の榮譽をうけながらも、棺に眠る先生を飾るレモンの黄色は寂しくうなだれ、香りを失っていました。

あらゆる悲苦から解放された先生のデスマスクは完全に燃え尽き、インドの聖者のようにも、また、よるべない一枚の病葉のようにも見えました。

魂魄を天地に分ちグツドバイ
春眠のそのまま覚めぬ死もあらん

橋高薫風

本名 橋高 薫

大正十五年七月十一日生れ

平成十七年四月二十四日逝去

戒名 愛染院文誉薫風居士

※文中の川柳はすべて薫風作

(川柳オホーツク平成十七年十二月号より転載)

冠句を樂しむ

山崎 武彦

一、はじめに

五・七・五、の短詩文芸と言えば、何を思い浮かべますか。そうです、俳句と川柳ですね。その中に冠句も入ることを是非識ってほしいのです。昔から冠付け、笠付け、烏帽子付、五文字付、などと呼ばれてきた。現在ではいずれも冠句です。これら短詩文芸の起源を辿れば、いずれも俳諧の連歌（連句）に行き着く。その連句が独立して俳句に、そして冠句は連句の句立の道として興され、川柳は前句付から生まれた。冠句が俳句、川柳と異なるところは、冠句（上五文字）が始めから決められていて、作者が付句十二文字を創る文芸で、重要なポイントは、冠句と付句が独立（一つの物語として）している

が微妙に響き合っている、二句一章を基本形としているところにある。要約すると、冠句は象徴詩で、つまり俳諧の圧縮型（エッセンシャル）として詠む文芸と言える。それでは具体的に例句に学びながら冠句の歴史や楽しみ方、作句のポイントなど冠句の扉を開けてみよう。

二、冠句の起源

日のめぐみ

堀内 雲鼓

冠句の始まりは、江戸時代の誹諧師堀内雲鼓で、この句が「冠句独立宣言」の句として広く知られている。俳句のように季語や切れ字（冠句で必ず切れているため）が不要で上句と下句の関

係は前句付と同様に取り合わせの妙を競う文芸として発展した。

元禄時代は、世の中が泰平になり、町人文化が花開いた時代でもあった。当時の俳諧は武士や町の有力者に限られていたためか、人々はあらかじめ決められた、上五文字に十二文字の付句をつける新形式の冠句に飛びつき、非常に隆盛をみたのも理解できる。しかし雲鼓以後、しかるべき指導者に恵まれず、冠句が懸賞稼ぎや、賭け事の対象となり、その文芸性が荒廃した。

三、正風冠句の提唱

冠句は江戸時代に始まりながら、俳句や川柳のように広く世に知られなかった。それは前述した指導者と共に手頃な手引書、つまり入門書が少ないことも一因かと考えられる。昭和に入り冠句の文芸性に注目した久佐太郎（冠句中興の師）は「冠句研究文芸塔社」を設立、句誌「文芸塔」を発刊し、冠句の革新運動を始め今日まで継承されている。

いよいよ冠句について、例句を示し

ながら具体的に述べたいと思う。以後の文章は松尾明美著「現代冠句入門」から引用している。

走馬灯 五十すぎでの早いこと

久佐太郎

この作品の姿(句型)に注目してほしい。走馬灯と五十すぎとの間に一つの空間を持っている。この間が冠句の本質と特徴をあらわしている。間こそが冠句の生命線で、この作品はその代表作である。走馬灯の映像と、そこに作者の歳を加えた心境を結びつけ、自分の人生感に照らし冠題を引き立てている。

冠翁忌 わがあしあとに耳澄ます

久佐太郎

現代冠句の先師久佐太郎は、自ら究めた冠句の足跡に耳を澄ませ、冠翁忌に感懐を新たにした作品である。冠翁忌とは久佐太郎自ら定めた冠句の始祖(堀内雲鼓)の祥忌五月二日を言う。

冠翁忌 瘦身鳴らし起たんとす

久佐太郎

瘦身鳴らしと述べたところに、作者の酷烈な心境が見られる。冠翁堀内雲

鼓の祥忌に病軀をおしてもとの思いが人の心に響く。

四、冠句の句風分類と詠法

(一)抒情冠句(情感、生活心情の訴求)

齡ふと いつまで保つ冬の菊

高月

道新た まばゆく四十男の辞

外郎

手法としては、連句の「句い」を受けた作品で、冠題から生活心情に結びつくものを感じとって、句境にまとめるオーソドックスな句法である。

(二)叙景冠句(景觀、景物の審美眼)

みなと春 みな旗たてて斜丘の街

久佐太郎

熱帯魚 夏となる灯の華やぎぬ

桜月

風景、景物を描き出す句で、写生から出発して、目にとまった処を切り取り、その印象や陰翳をつけるための描写と表現の美しさが要点となる。

(三)心境冠句(生活の哀歎に共鳴)

灯の渦に 愚かな自己を置いて見る

久佐太郎

お茶の味 淡て自分の墓のこと

千代子

冠題に触発されながら、自分の心境、境遇に反映させて詠むので、人生実感を語った感動に強さがある。句法としては「映り」の手法で、自然な詠みぶりに深い味わいがある。

(四)感覚冠句(言語感覚の発揚)

白と黒 虹消えて海すでに秋

久佐太郎

白い皿 逃亡の眸で今日終る

明美

冠句の特質をよく發揮する手法で、鋭い言語感覚と語彙の展開と句材の見つけ方で鮮明な印象を書く「衝撃」手法の一つである。感覚の働きで自在な句となる強みがある。

(五)心象冠句(モンタージュと暗喩性)

冬木立 父が歩いて来そうなり

天牛

鏡牙ゆ 身じろげば割れそな冬

矩美子

老いし鹿 隙間だらけの冬落日

明美

冠句のほとんどは、この句法に集約

される。心象風景、心象感覚、心象情趣と多分に抒情を含んだ句は、言葉の持つ不思議な取り合わせによって句境が厚みと深さを持つ。「暗喩」性を強めることが秘訣である。

(六)物語冠句(小説的、叙述の語り口)

雨の街 アドレス書いて呉れた女

流峰

声ひびく 胎児の月日さわやかに

津根夫

この句風も冠句ならではないもので、イメージ作りのなかで、社会性やドラマ性を加味しながら作者の想像力のまま書くところに面白さがある。句法は「俳」をとる。

(七)告白冠句(感情や愛情の吐露)

朱唇燃ゆ 月に願えば逢えようか

流峰

朝かがみ 幾度かありし決意の日

妙子

生活心情の奥底に目を止めたとき、そこに句にすべきものが必ず見えてくる。人間性の心の揺れを書くことで句が出色する句境である。

(八)創作冠句(自由吟と言葉の働き)

冠題を作者自身が決めて書く自由吟では、作者の本領と創作力が決め手。その発想、感覚、思考、見聞表現等、まことに魅力と刺激性をもって人心を捉える。

風いびつ 視界は凶器ばかりの冬

空歩

芹食めば おのれむかしは蒼き馬

辰一

晩夏の街 ひとり逝かしめ雲北へ

外郎

どの作品も作者の心のあり処が見える。自己の生活や人生、季節の流れや景観に目を向け、そこに自分の姿や人情を見出す感激、それは言葉を深く掘って味わるものである。

五、おわりに

私が所属している六甲川柳会(通称メダカの学校)は神戸の六甲道勤労市民センターで勉強会を開催している。

誠に不思議な縁であるが、その同じ場所、冠句「神戸港」の月例会を以前から行っていた。冠句と川柳はその起源からみても、義兄弟のようなも

のです。この機会に興味のある方は、冠句の扉を開いて見ては如何でしょうか、ご一報頂ければ月間誌冠句「神戸港」をお届けする。

参考文献

現代冠句入門

冠句の扉

楽しい冠句

神戸港 No.247~250

冠句考(冠句読本)

松尾 明美著

高岡ひろみ著

高岡ひろみ著

三村昌也連載

大槻 空歩著

銀の笛創立20周年記念誌上大会

課題 「美人」(2句詠まで未発表作に限る)

選者 雫石 隆子・赤井 花城

真島久美子 他

参加費 一〇〇〇円(切手不可) 発表誌呈賞

桶並びに秋田県名産品

締切 四月一〇日(火)(消印有効)

投句先 〒〇一〇一〇九七三

秋田市八橋本町四一三二一八

長谷川酔月方 銀の笛川柳大会係

問合せ 電話・FAX

〇一八一八六四一三七八二



追悼

会いたい秀四さん

日置和紙の里川柳会会長 前田 楓花

日置和紙の里川柳会は、昨年十一月の池原天馬さんに続き、中宇地秀四さん（享年八十五）までも失うなんて…。

秀四さんとは十月二十三日の句会が最後でした。「来月五日、心臓の手術をするから、来月は休むわ。しないと心臓の弁が機能しなくなつて、一、二年しか生きられない。苦しみながら死にたくないから、手術して治して、また句会に出るから」。私はひとごとながら簡単に「まあ、秀四さんなら大丈夫でしょう。退院して良くなつたら、十二月の没句の大会には一緒に出ましょう」。こんな軽い会話が最後になつてしまいました。

十一月五日、胸の切開手術を受け、手術自体は成功したのですが、集中での治療中、胸が苦しく苦痛に耐えかねて動いてしまい、胸骨が開いてしまいました。

そして、その治療中肺炎になり、容態が急変し、一月三十日帰らぬ人となつてしまいました。

川柳の大会があると二人で出掛けていたのに、言いようのない寂しさが湧いてきます。

実は、秀四さんは左足の付け根から足がありません。ある時、どうしてか知りたくて車の中で尋ねた事があります。昭和四十九年、神戸でトンネルを掘る工事中、自分の不注意から事故が起き、切断せざるを得なかつたそうです。

その後、鳥取に帰り、片足の不自由さをりハビリで乗り越え、手話、パソコン、車の運転、習字、川柳、老人クラブの会長と、ためらう事なく松葉杖で積極的に外に出る事を選択されました。

世話好きで多趣味。大の酒好きで、飲んだら豪快。若い頃は一晚で一升。最近

はドクターストップもかかり、三合が一合に減つてしまい、ちよつぱり気の毒だったと、奥さんが話されました。

川柳会には、平成十三年に会が発足して、二、三回遅れてからの入会でしたが、キレのいい、大胆さとユーモアのある句が多かつたように思います。悲しみのどん底から這い上がり、根っからの強さと明るさが句に出ています。

そんな秀四さんにもう一度会いたい。

合掌

秀四さんへの一句

軸足に賭けた男の卜根性

遺句抄

助け合い何処吹く風の政治劇
三度目の嘘と言つてるそれが嘘
人の目にふれぬ土台の底力
真つ白い紙に遺言書き残す
背を向けた息子に送る吊し柿
ボスの為身代わり逮捕される秘書
奥の間で俺をもてなす未亡人
アーンして人目が無いとすぐこれだ
冗談を笑つてくれる人が好き
試着室俺は荷物の見張り番
今日切れた賞味期限に悩んでる



表記を考える (1)

句箋に書く文字は「楷書で読みやすく」というのが基本です。達筆でも崩した文字で読みにくいのはいけません。下手であっても楷書で丁寧に書けばいいのです。もちろん、これは句箋に限らず投句用の応募用紙でも同じです。

また、文字を間違わないようにしてください。「内容が良くても字が間違っているのは没にする」という選者がいます。文芸は言葉と文字がイノチですから、そのような姿勢で向かうのも当然。決して「厳し過ぎる」と非難できません。

私自身は、内容が良くて「没にするのは惜しい」と思った句は、誤りを訂正して入選にすることがあります。これは、厳しい姿勢を貫く人から見れば「ルール違反」かもしれませんが、前号の本欄でも書きましたように、文芸は他者と競争するものではありません。スポーツのような競技ではありませんので、厳格なルールはそぐわないと思っています。

ただ、甲乙つけがたく「どちらを落とすか？」と迷った場合は、字の間違っているほうの分が悪いのは当然です。

前置きが長くなりましたが、最近目にした「ちよと変だな」という例を挙げますので、参考にしてください。

そこから当たりえ置いて ↓ そこら辺りへ置いて

「辺り」を「当たり」としたのはうっかりミスかもしれません。が、「どこそこ」とか「誰それ」という方向を示す場合は「え」ではなく「へ」を使用します(発音は「え」です)。これはときどき目にしますので要注意です。

百才という年令 ↓ 百歳という年令

右のように年令を示す場合に「才」を使用している例はしばしば目にします。しかし、この「才」という文字は、能力を示す文字で年齢を表す文字ではありません。「歳」が面倒なので、同じ音の「才」を当てているだけのことです。

同じように、「令」も歳を表す文字ではなく、命じることや掟を意味する文字です。これも「齡」と書くのが面倒なので、同じ音の文字として代用しているだけのことです。

右の例は、「許容範囲」として認められているので、川柳の表記に使用しても構わない」と主張する人もいます。しかし、先ほど述べたように、文芸は言葉と文字がイノチですから、略字や代用文字は避けるべきです。「一般的に許容されていても私は使用しない」という矜持を持つべきでしょう。

また、気になる表記に「当て字」があります。左は、拙著「川柳の理論と実践」で取り上げている例です。

- ① ぐつすり眠って見たい
- ② 大声で叫んで見よう
- ③ 同じ失敗をやって居る
- ④ 眠たくなって来る

①②の「見」は、「見ること」を示す文字です。ところが、「眠ってみたい」は願望であり、「叫んでみよう」は呼びかけです。見ることはありませんから「見たい」とか「見よう」は適切ではありません。③の「居」は「すわること」や「いる」ことを表す文字ですから「やって居る」は不自然。④の「来」は「くること」を示す文字ですから「なって来る」も不自然。それぞれ平仮名表記にするべきでしょう。

本社三月句会

三月七日(木) 午後一時
アウイーナ大阪

春らしい陽気にめぐまれた三月句会は
一、二八名(投句八名)の参加で開催。初参
加は藤塚克三氏(河内長野市)肥山一文氏(藤
井寺市)のお二人。

今月のお話は、伊達郁夫さんの「地球脱
出計画スタート」空想でなく、現実に進ん
でいる計画と断られた上で、五十億年後に
は太陽が膨張し地球は爆発する、と恐ろし
い話から始まった。地球脱出はどこか?
住めそうな星を二、三見つけているらしい
が、遠すぎて行けそうにもない。脱出先は
火星が最有力であり、本格的に世界各国が
居住にむけて計画をスタートしている。

川柳もまじえ「宇宙は地球の庭」と話を
締めくくられた。(まつお)

月間賞は、工藤千代子さん(岡山市)
(司会)蕉子・善純(脇取)賢子・まつお
(受付)かずお・舞夢(清記)勝弘

席題「風」 江島谷勝弘選

一 荒れが来そう沈黙する妻
アペノミクスTPPの大風
雪風父が娘を守り切る
くちびるに触れて風のと真ん中
紛争の嵐外地に散った夢
書に心燃やす青春の嵐
嵐でも来れば欠席できるのに
子育ての頃の嵐がなつかしい
質問の嵐に手立て考える
嵐呼ぶ男が希望だったけど
三月の家計へのし袋の嵐
喝采の嵐へ船出するふたり
入浴中にメール見られてから嵐
スカートに悪さしかける春風
嵐の中ウイソンの傘が捨ててある
娘が戻る家の中にも春風
逢えませんでしたけれどからだ春風
角が取れ風もないが元氣消え
嵐呼んだおとも今は発泡酒
海岸の嵐に耐える松が好き
学校を抜け嵐寛のシネマ観る
とりあえず春一番という拳固
嵐かと思えば限石が落ちた
風のせいと大きな顔で朝帰り
凍てつく日春の嵐をまぢかねる

克己 淳司 昭 完次 隆彦 弥生 保州 萌子 唯教 かずお 富美子 富子 楓 朱夏 千代 宣子 日の出 宏子 堅坊 公誠 千恵子 章子 (失名) 実

嵐呼び昭和を駆けた裕次郎
S M A Pをやっと覚えたのに嵐
山茶花のもろいくずれを知る嵐
嵐でも会いに行きたい人が居る
お笑いの嵐うんざりするテレビ
嵐去り気まずさだけがふわふわと
嵐となつて梅も桜も菜の花も
思い出の帽子さらつた春風
孫が来る嵐の前の静けさや
むしろくしゃも嵐の唄に癒される
吹きすさぶ野分がくれたカタルシス
反対の嵐無視してオスブレイ

克三 黒兔 千里 善純 靖鬼 良子 ますみ 俣子 武臣 則彦 富子 光久 たもつ (失名) 一步 朝子 完司 真理子 宏造

兼題「嘔む」 矢倉 五月選

飲み込めぬ固い理屈を嘔み砕く
 フクシマはまだ忍耐を嘔んでいる
 ガムを嘔む進駐軍は怖かった
 嘔みしめてころがしているほめ言葉
 爪を嘔む子の胸底に深い闇
 いざとなれば嘔みつく義歯を研いでいる
 嘔み砕いて言うて下さいカタカナ語
 入れ歯でも嘔みつく癖はそのまんま
 ガム嘔んで息子ちつとも聞いてない
 信頼をしてた子飼いに嘔みつかれ
 嘔まなくていいから酒に手を伸ばす
 きやうばみゆばみゆ舌を嘔まずに言えますか
 一線を守り通して爪を嘔む
 嘔み合わせまんま飛んでるオスブレイ
 念入りに嘔む喪め過ぎ喪め言葉
 二十回嘔んだら遅刻してしまふ
 嘔みしめた奥歯の話聞いている
 今日という日をしていねいに咀嚼する
 人間は嘔まぬと犬は思っている
 背を向けて爪を嘔む子を叱れない
 唇を嘔んだ結果がこれですか
 嘔み合せ悪くて顎へさす油
 ご先祖の歯形が付いている遺産
 嘔むほどに味わいのある路郎の匂
 りんご嘔む入れ歯の値段高かった

准一 遠野 好文 葉子 楓楽 たもつ 哲子 和夫 月子 玄也 まつお いさお 郁夫 一風 完司 蕉子 千代 保州 耕治 理恵 信子 靖鬼 富美子 満作 千枝子

奥歯嘔む音が聞こえる喪め言葉
 たこ焼きを食べる歯せて残さねば
 嘔みついてやろうか愛想悪い犬
 生真面目で牛乳嘔んで飲む男
 沢庵も肉もおいしい自前の歯
 嘔まないできやうばみゆばみゆ言えて古希
 淋しさを嘔みしめ夜を手なずける
 嘔みそうな名前がずらり一年生
 歯に似せた器具で三食嘔んでいる
 舐には歯軋り嘔んで立ち向かう
 新香が嘔めず茶漬げが味気ない
 人生の苦楽を嘔んだ総入れ歯

義理子 六点 弘一 無限 由一 富子 章子 時雄 敏治 克己 千代 すみ子 富子 ますみ 黒兎 直樹 無限 無一 一步 見清

兼題「頓知」 西内 明月選

気の利いた頓知で椅子を守り抜く
 自販機に人の頓知が詰めてある
 正直な男の頓知よく弾む
 切つ先を躲した上出来のトンチ
 頓知好き過ぎて話がもつれだす
 充電をすれば頓知が冴えてくる
 腕組みの中にひそんでいる頓知
 素面では僕の頓知は動かぬ
 頓知よく下戸が仕切つて盛り上げる
 色気ある頓知が詰まるコンパクト
 弔辞にも頓知を入れて式和む
 酒呑めぬ日には頓知も浮かばない
 無表情の変換キーにある頓知
 頓知いっぱい吐きだすカバの大欠伸
 生活の知恵から湧いて出る頓知
 おみくじに神のとんちが入れている
 引き出しをたくさん持っている頓知
 さり気ない頓知満座を丸くする
 ポケットで出番待っている頓知
 瀬戸際で頓知閃き切り抜ける
 頓知一発通夜の空気を入れ替える
 つつこみとほけで頓知の光る芸
 一言の頓知で衝突をさける
 究極の頓知でオヤジ唸らせる
 カリスマのレシビの中にある頓知

准一 雅明 蓄水 扶美代 見清 寿子 希久子 正和 哲男 万紗子 紀雄 いさお 宏子 朱夏 かずお 無限 六点 和夫 千代子 舞夢 敏治 集一 ふりこ 万紗子 美智代

アドリアにしては見事な頓知だ
一言の頓知効かせて座が和む

饒舌の隙間の頓知探してる
とんちまで並べて恋はいま微妙

饒舌が過ぎると頓知風化する
無口から出た頓知には味がある

閃いた頓知が打算打ち砕く
雪おんな退治の知恵を練っている

尾を振って生きて頓知をまだ磨く
冷飯を食へ過ぎ頓知湧いて来ず

笑わせて後で泣かせている頓知
柔軟な脳から頓知湧いて出る

佳

ひと言で輪をぬくくする苦勞人
仲裁は頓知しこりは残さない

殴る手を握手にかえて切り抜ける
霧閉気をがらりと変えたのは頓知

雲行が怪しい時に効く頓知

人

しょうもない頓知でしらせ出す空気

頓知から飛び出したのは春だった

地

飯の世のとんちが終の日に解ける

天

迷惑を掛けない嘘を付く頓知

扶美代

宣子

よしみ

菜々子

柳弘

章子

求芽

ますみ

公誠

紀雄

一步

寿之

ヨシエ

六点

昭

光久

紀子

茂

信子

無限

兼題 「ベルト」

宮西 弥生選

WBC吃水線のベルト位置

縮めるほどやる気を強くするベルト

ベルトに乗ってトロが来ましたイカも来た

妻というシートベルトに身を任す

地球にも赤道と言うベルトあり

体重計より正確な皮ベルト

ベルトでキュッヘッパーンを真似た頃

ベルト穴試行錯誤のあとがある

美しく歳を取りたいベルト穴

良い夢を見ていた頃のベルトです

いざの時ベルトは武器になるのです

ベルト穴たつぶり緩め待つ余生

苦しいとベルトの穴が言い出した

ベルト穴ゆるめて春を謳歌する

エレベーターのベルト信じて乗るタワー

どこ締めるくびれ搜しているベルト

ベルト穴少しびびつていじじです

地震国ベルト地帯に住む怖さ

菌車とベルト仲良ぐ水車小屋

地平線ばかり見ている金ベルト

生きたくて虚飾のベルト切り離す

ベルト穴ふえる速さと減る遅さ

キヨミ

森生

いさお

集一

惠美

千代

朝子

希久子

武彦

信子

蘭幸

万紗子

宏子

扶美代

哲子

賢子

瑠美子

敏治

見清

ますみ

柳弘

好

日本列島まるで原発ベルトなり
終着駅へひたすらベルトコンベヤー
シートベルト二人に邪魔な時もある
怠け癖ついてベルトが縮まらない
あるがまま回るベルトもわたくしも
ベルト穴ふたつ縮めて春を着る
ジキルかなハイドかベルト穴次第
ベルトの穴はくの人生支配する
もう二度ベルトに乗れぬ自由人
ベルト穴一つゆるめた定年後
ベルトと締め直して答さきに行く
ベルトコンベアに乗せられ後期高齢者
征服のキモチか鰐と蛇の皮

千恵子

理恵

修

美智代

ヨシエ

葉子

蕉子

たもつ

見清

千代

舞夢

淳司

萌子

無限

信子

朱夏

無限

隆彦

理恵

哲男

富子

兼題「泥」 村上 玄也選

ゲームする子供泥んこにはならぬ 房子
 泥沼に入り結論先延ばし 准一
 玄関に泥靴孫の声替わり キヨミ
 泥沼で詩人が咲かす蓮の花 六点
 救世主になれ海底のレアアース (志) 千代
 何回も泥吐いたけど未だ夫婦 善純
 春泥のごとき汚染が攻めてくる 敏治
 指切りの小指に泥がついたまま 完次
 ふる里の泥濘の道なつかしむ 賢子
 泥かぶり左遷のまんま忘れられ 時雄
 ちよつとした泥も気になり拭く新車 五月
 自分史に泥を落とした跡がある 誠一
 泥絵の具まぜてどっこい生きてます 義子
 泥捏ねて私の顔をこしらえる 完司
 美容のためと女は泥に包まれる かずお
 下下はアベノミクスで泥浴びる 勝弘
 軟弱なお方だ泥がついてない 真理子
 自叙伝に泥も遣した人情家 和夫
 古伊万里にたどりつく気の泥遊び 六点
 泥知らぬ野菜を今日も買ってくる 耕治
 レンコンの白さ欲しくて泥エステ 宣子
 千枚田泥に先祖の汗の跡 和夫
 泥酔が本心全部さらけ出す 弘風
 泥よけてよけて小さく生きている 楓楽

泥水を呑んでから出る人間味 俣子
 泥かぶる位置で男になつて 完次
 泥舟か宝船かは金次第 いさお
 泥パックいつか女神になれるまで ますみ
 先頭で泥を覚悟の旗を振る 誠一
 なでしこを指すちいちゃな靴の泥 由一
 泥少し残して人気地場野菜 哲男
 春泥の中で温めている言葉 ますみ
 泥靴は知らぬいい子の不発弾 宏子
 ふる里の土を忘れぬ泥遊び 好
 泥の中蓮は只今充電中 萌子
 泥舟を漕いだ日もある青い天 ヨシエ
 佳
 もう化膿してるぞ泥を吐きたまえ ばっは
 泥臭さ取れて魅力も消えている すみ子
 燕の糞泥できれいに化粧する 公誠
 暮れ泥む空にひと日の悔い溶かす 武彦
 言訳をしながら泥も吐いている 隆彦
 人
 春泥に急かされ冬を脱いでいる 千代子
 地
 土下座した泥の匂いを忘れない 好
 天
 心の泥洗う写経の墨を摺る 楓楽
 軸
 泥かぶる勇気がなくて見ない振り

兼題「ほんのり」 小島 蘭幸選

ほんのりとして いる方が男です 淑子
 ほんのりと恋に目覚める十五歳 玄也
 赤い灯青い灯僕はほんのりしています 蕉子
 ほんのりのニュースもきつとあるはずだ 章子
 ほんのりとさせて下さる臘月 ばっは
 ほんのり酔うてたまには夫に甘えたい 一風
 ほんのりとあなたの色にされて春 郁夫
 洞の奥ほんのり浮かぶ菩薩様 紀子
 ほんのりと梅の香のする句碑の道 黒兎
 ほんわかとした顔でした母でした 岳人
 思い出の詩から青春のほのか 完次
 春なのねほんのり匂うあなたの背 理恵
 雪洞をほんのり点しひな祭り 弘風
 ほんのりと梅一輪のたたずまい 完次
 合格通知ほんのり花の香りする 扶美代
 貴方の側でいつもほんのり生きてます 美智代
 薄明かり妻がすらりと見えました 月子
 ほんのり梅の香天神さまの裏の道 みつ子
 居間の灯にほんのり歯車が二つ 求芽
 二階部屋まだほんのりと子の匂 耕治
 蠟梅が香るホワイトチョコレート ますみ
 ほんのりと戒名などを考える 義
 ほんのりと咲いては散つてゆく輪廻 無限
 夕焼にほんのり染まる君がいた 葉子

名を聞いたただけでほんのりするお人

三月の女ほんのりウソ上手

あま酒でほんのり父の古い愛し

今は昔妻は見合いで染まつてた

お友達との境目ですと頼そめる

ほんのりピンクこいで盃伏せるべし

ワイシャツの移り香に妻の嗅覚

酔ったふりさせて下さい花の下

手を握る少うし通うものがある

ほんのりと私の種が芽を出した

ほんのりがよいと解つてきたお酒

やがて明ける空を信じている拳

神さまがほんのり描いた虹が出る

佳

アスリート表彰台の桜色

初恋もほんのりとしてきた齢

かあさんの記憶を辿るバステル画

ほんのりと老いて幸せひなまつり

さくらは自在に隙間に見せているあの世

人

ほんのりが好きだとツレが申します

雪融けの匂いになつてきた手紙

地

梅香の遺影の母と立ち話

天

軸

酌の中の酌をほんのりいただいた

瑠美子

弥生

朱夏

淳司

靖鬼

希久子

和夫

ひとみ

ダン吉

美花

耕治

ダン吉

弘一

哲男

恵子

富美子

恵美

あきこ

(志) 千代

ますみ

工藤千代子

燦 燦 会 句

2月句会を読む

ひろ博子
が賀博子
は芳博子

早春の水で洗っている野菜

月子

蛇口の水も早春とあらば、その冷たささえ清々しい。春キャベツに菜の花、アスパラ。あれこれ思い浮かべながら色とりどりの春野菜はサラダによし、お浸しによし、それから、と大いに食欲そそられつつ、窓の日差しはすつかり春。

その辺でやめておこうと父が蓋

一步

兼題の「蓋」が生きている。みなの言い分も出尽くし、話がちよつとややこしい方へエスカレートしかけるや、おもむろに出される蓋の重み。

カップ麺僕は四分待つて食べ

勝弘

カップ麺もさまざまに進化し、今は一分でできる超即席タイプやじっくり五分を要する本格派もある。掲句のはたぶん従来型の三分型。でも作者はもう一分待つとおっしゃる。やわらかめがお好み？ たかがカップ麺、されど万事慌ただしい昨今、のほほんとのびた麺になんだかほつとさせてもらった。

死神に会うてようやく真人間

奏子

本来笑いごとじゃないことを笑いのめすのも川柳の魅力。こんな一句に詠まれたら、死神ももう気安くは近寄れないだろう。でこぼこの愛を紡いで梅匂う

ふりこ

でこぼこの手ざわりがあったかい。梅の香りにふんわり包まれて、いっそういい感じ。

母親がやはり回転させている

信子

やはり、に笑った。一日一日がなんとなくかつがなくて回っているのも母さんのおかげ。ときにとんでもない回し方で家族を絶句させるのも可愛嬌なのだ。

ふたせめ

毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります。
楷書で誤字のないようお願いします。
編集部

川柳ねがわ(大阪)(前月分)籓島 恵子報

一応は白紙に戻り元の鞘
犬と猿意地張り続ける尻尾
武士の情見事白紙の勧進帳
私の人生あなたへ白紙委任状
満百歳神へ白紙の委任状
相性がよくても嫌なもののは嫌
ノルマから逃げて今では青テント
愛されて愛した人は人の妻
わたしは白紙あなたの絵筆待つて居る
埋めるのに毎日苦勞する日記
何もかも忘れ一から出直そう
夢無限抱く少年の白い画紙
好かん奴向く心も思つてる相性
ファシズムが無垢な心染める来る
相性が良いのか母と同じ道
前世から続く相性だと思ふ
相性がいいのか夫婦五十年
種になり花咲くノルマ秘めている

あさ子 恵子報
寿子 修
仁 祥
三郎 秀雄
仁清 弘一
弘一 弘風
重成 亜成
洋 銀杏
麗 鈍甲
ルイ子 麗
さち子 麗
かすみ 麗

和歌山三幸川柳会 武本

MOTAINAI地球を救う呪文です
百均がもつたいないの梔子の役
フクシマの瑞穂に座るシーベルト
僕が死ねば捨てられそうな宝物
とっておきの蟹缶もはや期限切れ
もつたいないどうして残すパンの耳
どうしても使い捨てには馴染めない
もつたいない花も実もある命逝く
名人の箸や煙管になる扇子
一村を泣かす演技の旅回り
八方美人を演じこの世を渡り切る
木の演技いつも泣いたり笑ったり
妻枯らしの笛に合わせて舞う銀杏
選挙戦舌の演技を競い合う
若き故カマトトだった時もある
大袈裟に演技をしてる目も口も
念佛のリズムで弥陀の煤払い
丹念に母の手帳の塩加減
念願を抱いて巡る百度石
念願が叶って外す鬼の面

みつ江 碧報
起世子 智三
智三 智三
寂子 寂子
元三 元三
みね 元三
ひろ子 元三
次根 元三
当代 元三
絹子 元三
町子 元三
義泰 元三
典子 元三
昭枝 元三
昇 元三
和子 元三
高夫 元三
菜摘 元三

碧報

念入りに描いた眉毛が揃わない
作業日記丹念に書き日が終る
育て上げた人柄孝かぶ菊花展
鼻高々育てた弟子に敗けた時
逆上がり出来る細胞育てねば
涙腺のもろさ育てる年の数
いじめつ子にもやさしい声をかけてやる
私に似なくてほっとする育ち
子育ての完熟までの愛と憎
ぬくぬくと育てて核の無い果実
日本を育てて人を見る眼鏡
箸使いひとつに育ち覗かせる
子が育つまでは忘れていたお洒落
煽てたり叱つたりしてくれました
何人も育てた頃の布おむつ

川柳ささやま(兵庫) 北澤 稠民報

昭和史の生きた証しを語り合い
新年の祝詞に寂しい老いの背が
生かされて自分史続く曲がりなり
相性は言うまいすでに五十年
まごころを包む田舎の土産もの
よるこびに包まれ生まれてくる命
産地から汗の賜物ミカンくる
ひと滴みかんを老母にふくませる
初夢は炎に包まれ目がさめた
お遍路の旅極楽へ続く道
出たつらさ母の文にて頑張れた
無理せずにつけて八十路へ虹の橋
今年こそ良い年にして仏様

富子 伊子 孝子 侃子 章子 純子 八重子 義雄 幹子 美子 准一 美枝子 美羽 保州 久子 美緒子 純子 哲男 稠民 真由 多美子 開子 可住 かほる 幸子 ちかゑ

お祝いに包む金額思案中
数々のつらさをバネに今生きる

川柳塔打吹(鳥取)

野口 節子報

照代 美智子
 公 惠
 陽之助
 善 江
 玲 坊
 道 子
 紀の治
 紀美恵
 美ツ千
 美知江
 清
 和 子
 美代子
 美美人
 義 人
 重 忠
 岳 人
 石花菜
 照 彦
 節 子
 龍 枝
 く に こ
 富 恵
 久 芽 代
 野 蒜
 滋
 悦 子

年取れば時の経つのが超速い
 逃げ足の速い靴一足を貰う
 点滴の速度早めて遅らされた
 春よ来いスピード違反させて来い
 ゴキブリの動きに付いていかれない
 兄弟の速い鈍いもわたしの子
 和解してみればどっちもはやとちり
 ジェット機の音がジェット機追いかける
 七十五日あたりまで速かった

竹原川柳会(広島)

古田 太虚報

五人の子育てた家に一人住む
 家風とは言えないけれど温い風
 この家に何故落着かぬ論吉どの
 震災の仮設で暮らす春はまだ
 新しい朝へ感謝の香を焚く
 新米だ早く食べようにぎり飯
 スーツ新調今年に賭けているのです
 新たなる心に誓う力こぶ
 胎動よ新し命脈脈と
 新種発見地球の神秘無限大
 祖母が言う仏壇の中白蛇居る
 妥協せぬ私の胸に白い蛇
 地を這ってつらぬく蛇の拌む天
 どう生きて来たのか床下の蛇よ
 石垣に蛇の抜け殻みつけた日
 十字架を背負った蛇も昇天す
 世界一の母は巳の年生れです
 一日の長さ変わらじ二十四時
 風に立ち天に微笑む花になる

たけ代 美智子 泰山 完司 三津子 勝憲 玲子 芳光 盛桜
 房美 汎美 千代美 慶代 規幸 蘭舟 幸恵 輝子 幸子 半德 敬子 笑子 泰子 比呂子 静風 一路 あゆみ

高島啓子選

引き返すことは出来ない霊柩車
 秘め事は閉ざされてこそ蜜の味
 水漏れがしているような物忘れ
 正月があるからリセットもできる
 桃太郎の桃は臨月であった
 天と地を二気に回す逆上り
 ふきのとう何が言いたいことがある
 悪いのは私以外の人である
 シンメトリー遊び心が見当たらぬ
 美しく話して鈴のような語尾

佳句地十選 (3月号から)

柿花和夫選

花野への途中ふたりの日向ぼこ
 空白の日記が続くその理由
 一つずつ片付けてゆくひとつずつ
 木の上にあります僕の現住所
 嫁いでも恋愛運が気にかかる
 平凡と白紙に戻す削除キー
 江戸カルタ天知る地知る育児法
 連想が負の方へ向く去年今年
 シンメトリー遊び心が見当たらぬ
 まだ返事書けずに伸びる無精髭

昭枝 汎美 ゆき 龍馬 すすず 葉子 祐子 鬼一 夢 洋志

ほこほこと七草粥の優しさよ
グーチヨキバ！うまいとナースほめてくれ
継続は力とゆつくり墨をする
全員集合食べて笑つてお正月
豆まきで私のなかの鬼を出す
見えますかあなたと私をつなぐモノ

川柳塔おっぱい吟社(香川)川崎ひかり報

何事もなかった様に陽が沈む
孫の世は空中散歩夢じゃない
大空へ夢のせははたく孫の風
松かざり空路で帰郷孫曾孫
澄んだ空誘い出されて野良仕事
空腹で何を喰うてもああ旨い

松露川柳会(鳥取) 山本 正光報

門松立てて若水酌んで年男
忘れまい平和の楯の人柱
住みにくい世になり蛇もなげいてる
柏手に平和を折り初詣
減農で蛇もゆつたり生きている
歳男十二年目に花が咲く
冬眠の蛇は静かに春を待つ
山の幸蛇が睨んで探らせない
脳味噌が湯気をふきだす蝮酒
薄味が良いと老いたる蛇がいう

富柳 会(大阪) 古田 千華報

愛憎をたたみ無欲になつて行く
燃える恋冷凍保存して眠る

厚子 栄恵 栄香 歩美 史子 千枝
好きと言う踊り文句に畳まれる
たたんでは開いてみせる一張羅
あの時のあの一言はたたみ置く
あの事は胸にたたんで持っていく
女傘ひそひそ話折りたたむ
身勝手とわかつていても許す愛
恋愛の式と答えは無限大
元氣などやがては風も無に還る
平凡を愛そう米が炊きあがる
モノクロの女の意地が実を結ぶ
結び目が時どきゆるむ内助の灯
たたむ時はかにかに匂う跡
母の風集めて冬の彩を浴く
深い秋憧れ人の計報聞く
純白に生きる半濁の口答え
奔放に生きてボクリと逝く勝手
さよならに明日の風を読んでる
振り向けば褪せないまま枯れている
勝手口あけて人情きた昭和
劣化した五尺のからだ干す天日
冬雲の切れ目切れ目に母の笑み
冬温し愛の深さを知ってから

ひかり はつ恵 よしみ 弘 いさむ 放任
晴美 七朗 千恵 彦次 清之 武人 惠 奏子 慶子 信子 高鷺 鬼焼 千華 欣之 壽峰 伸雄 アキ 華 紅紫朗 佳子 森子

川柳らくだの会(鳥取)岸本 宏章報

好奇心すこし残して古稀となり
最高の笑顔土産に曾孫来る
万両を植えているけど金成らぬ
好きだから楽に続いた習い事
記憶にない場所に芽を出すチュリーツップ
マイベツトおやおやけものなまけもの

清之 寿人 惠 奏子 慶子 信子 高鷺 鬼焼 千華 欣之 壽峰 伸雄 アキ 華 紅紫朗 佳子 森子
柚子植えた実がつくまで待てるかな
のみこんだ言い訳のどがむず痒い
お茶どうぞ愛想はいいが紙コップ
休耕田せめて苗木を植えておく
土の香を知らぬ野菜が増えてくる

高知川柳社 小川てるみ報

ふる里の花にハートを試される
アンパンマンのハートを感じとる幼児
弁当にハートマークが今日もある
時効たといえどハートが許さない
冬の雨耳から寒くなつてくる
耳ヘタコ出来ても癖はなおらない

川柳ぶつもん吟社(鳥取)夏目 一粹報

凍てついたハートを溶かすのは愛だ
カルテから命の時間告げられる
握り拳開くと海が風いっていた
別姓の夫婦キヤリアを活かし合い
その内になんかかなるさ放っておけ
介護する胸に天使と魔女が棲む
その内と言つてもうちに期限切れ
冷凍保存わたしも若いまま居たい
いに加減な事はキヤリアが許さない
ご都合がよい時だけの菩薩顔
その内と聞いた毎日待ってます
裏道をうっかり知つてから迷う
貴重品置き場忘れて凍りつき
その内を突然明かし総理退く
職人にキヤリアは要らぬ腕自慢

洋々 一瑠 無限 美恵子 清信 昌鼓 みゆき 房江 秋名 善夫 地佳平 回春子 はつ江 振作

凍結の滝はピカソも顔負けだ
復興の原点ヨイトマケからだ
キヤリアある医者を信じる予約の日
凍りつく心を溶かすのは愛だ
執刀医のキヤリア信じて手術台
その内の言葉の裏の謎を読む
増税はその内などと言つとれぬ
その内は逃げ口上に丁度よい
ノンキヤリア縁の下から食いしばり
これでいい私生涯ノンキヤリア
親ごろし子ごろし記事に血も凍る
凍りつく胸に独りの箸をもつ
婿にややらん何だかんだとくじをくり
なるほどとくじくり聞いて票動く
キヤリアにはどうあがいても勝てないよ
雪像の鼻の穴から凍りつく
その内に油断するから手遅れだ
その内の手紙の中に福がある
その内は近い内より長くなる

一人者今日も寄り道春の風
衝動買い出来るお金が二十億
四月馬鹿いつもアハハで済ましてる
さらさらの流れが淀む寒の朝
庭の苗隣の猫が掘り返す
傘寿まだ祝賀は白寿で盛大に
成人の宴女舞舞降りる
日本はどうなる民は蚊帳の外

とも湖 節子 千代 克也 重忠 凱一郎 圭一郎 あしび 金祥 美佐枝 穀 茂登子 蟹郎 行男 弘康 清帆 隆浩 悦子 一粹

川柳塔みちのく(青森)小寺 花峯報

津軽三味いよいよリズム乗ってくる
出産の一報を待つ電話口
好いたひとの肩にもたれて雪見酒
折づるを飾り今年の幸ねがう
甘えなく私淋しく生きてます
介護する俺もいよいよよされる番
妻が逝き甘える人がいなくなり
いよいよとなれば尻尾を切るトカゲ
トントントン妻が奏でる朝の組板
縦笛を上手に吹いた子らの笑み
結んで開いてこころの置きどころ
大丈夫頑張る君へ虹昇る
鍵つ子が母を放さぬ甘えん坊
初孫の甘えに弱いお年玉
千の風聴き墓地いらぬ人が増え
なにもかも忘れた老母の手鞠唄
雪捨てて川に向こうに虹見える
夕暮れのソナタは今日を持ち帰る
その時は甘えて弥陀の掌に縋る
風の子の甘えにそつと冬苺
汽笛鳴りいよいよ旅が始まりぬ

呑舟 つとむ 小とみ 信子 一湖 きよし 隼人 ひとし 美鈴 則彦 芳生 一吞 井蛙 雅城 花匠 黙人 隆樹 花峯 慕情 五楽庵 弘昭 祥風 集一 恭昌 典子

南大阪川柳会

津守

柳伸報

合格へ誤字と脱字の神頼み
救急車はこぼれながら神頼み
別れてと貧乏神様に手を合わせる
不肖の子生き神様に無心する
天神さんどう叶えます絵馬の山
鈴付けに行く相談が纏まらぬ
巫女の鈴邪心を払うように鳴る
登山者のリュック鈴鳴る軽い足
春浅き野辺に遍路の鈴が鳴る
喜怒哀楽のたびに聞こえる母の鈴
空つばの家は格別冷えている
寒おまんあ後の言葉が続かない
寒いけど春が息づく土の中
凜凜と春を待つてる冬木立
寒の月怯む心に突き刺さる
眠ったら凍死と友の頬叩く
背筋からぞくぞく風邪を貰ったか
帰りたい帰りたいくない外は雪
鬼平は着流しで汲む雪見酒
懐が寒いとすぐに風邪をひく
年女咲かせてみたい好奇心
先生は生徒を捨てて退職金
円空の仏はみんな笑つてる
明日のことわからないから生きられる
あと何回言えは済むのか今年こそ
認知症いやまだまだ物忘れ
講釈も値段に込める骨董屋

百合子 なぎさ 清 更紗 直子 庸佑 修 柳右子 正春 楓楽 シマ子 昌紀 あや子 弘子 志華子 克己 紀乃 柳弘 柳伸 栄子 タカ子 忠昭 勝弘 たもつ 一歩 ルイ子 和雄

川柳茶はしら(愛知)

関本かつ子報

ポンポンと女同士につきぬネタ
美千代

悪友に学ぶ女の口説き方

いつの間に盗まれていた隠し味
霜柱踏んでビクリと土踏まず
イメージを植え付けられて抜け出せず
パラダイスまだ探して居る喜寿の人
パソコンを習うメガネを買ひ替える

幸行
雅美
百合
まみ子
かつ子

川柳塔鹿野みか月(鳥取) 福西 茶子報

汁椀の蟹がブツブツ腹を見せ
日本酒とひとりの闇を流し込む
夫婦茶碗無事に並んで居る朝餉
湿布薬貼り合うふたり老いの景
豆腐好き手抜き料理と感じない
激震もあつてふたりの縄電車
天下取る話豆腐で盛り上がる
激しさを小カブセルで押さえ込む
ライバルにまむしを飲んで立向う
上底の薄い蕪蓄傾ける
激流も息つきをして海へ出る
やかましい豆腐が先に掬われる
日本酒の水割り好む友だつた
運勢が吉とでたので嫁もらう
空白の白が目立っている句集
酒好きな家には日本酒さげて行く
豆腐から初めて食べる離乳食
細胞がよろこびそうな日本酒だ
激しい程意見交えた若い頃
句集から個性が光る句の深さ
日本酒と豆と私と空のピン
陣痛の激しさ母は忘れない

幸代
和子
弘子
すず
茶子
美ツ千
孔美子
実満
いさお
照彦
盛桜
八重
蟹郎
小鹿
房子
咲和
はるお
和美子
富久江
京

廻り
幸行
雅美
百合
まみ子
かつ子

美代子
富久江
京

甦る句集の中の冬花火
雪が降る炬燵で句集編んでいる
生きる道弥陀に問うてるずだ袋
句にのこる生きた証の自選集
日本酒も日本料理もグローバル
世界一目指し激しい稽古積む
郷愁の胸にしみいるひとり酒

川柳之ヲわたの花(大阪)西川 義明報

寒くても歩く自分がいる不思議
微温湯に凍った心つけておく
丸裸になって明日を抱き寄せる
人生も登り下りの坂があり
不揃いの千六本は母から娘
お互いに年とつたねと初笑い
思い出を語る親子の涙坂
猪口の数増えて本音喋り出す
命名の筆が跳ねてる男の子
娘が嫁ぎその穴埋めるベツト飼う
亡き夫が蒔いた大根孫と掘る
強がついても時には子に頼る
性格も母に似て来た大根足
年の瀬は第九と共に駆け抜ける
男とは赤穂浪士を見あさない
どん底の坂を越えと春が来る
てつちに合わぬ意見をさておいて
賜わって仕舞ったままの守り札
世話好きな叔母からメールまた写真
現役でっさ年金暮し河豚の皮
平凡な幸せ望み老い達者

博子
和子
耀一
正春
孝子
かなえ
榮美子
明美
ますみ
宏至
知佐子
美代子
いづみ
宏
晴美
俊子
義明
はじむ
浩三
愛子
一風

すみれ
かおる
彩子
満
惣子
露子
くに子

愛子
一風

あかつき川柳会(大阪) 宮崎シマ子報
福耳の父の笑顔をみる安堵
捨てません揚げれば旨いパンの耳
祖母の声聞きのがさない祖父の耳
遠くなる耳にささやく風の私語
一言が耳から突き抜けて雷雨
女ですヒミコもつけたイヤリング
アフレ不況じつと見て来たパンの耳
指切りで心の鈴が響き合う
流水の響きにのつて春が来る
胸底に響く言葉にならぬもの
家計簿にときどき響く女の子の会
立春のひびきに酔うて風邪をひく
悲しいな心に響く句が出来ぬ
女湯で孫がシャンブーしてるらし
積ん説を崩すわたしの冬籠り
擦れ違ひおはようと言う響き
爆発の春を夢見る冬木立
雪模様熱燗つける冬の宵
ときどきは響かぬ振りもして夫婦
雪の里母ひっそりとひとり住む
被災地の冬を思えと子を論ず
冬の蠅の将軍さまに立ち向う
嫌な世は冬眠中と遣り過ごす
北風が薄い財布を駆け抜ける
九条を守る山河が響き合う
大声で母へご機嫌問う電話
落ちてゆく事しか出来ぬ砂時計
虚と実の狭間で運命が騒ぐ

祥昭
哲男
鉄心
喜八郎
信乃
紀乃
忠昭
浩昭
浩氣
朝子
敏治
賀世子
克己
生枝
敏夫
秀夫
鈍夫
穩夫
信二
柳弘

すみ子
直子
桃花
たもつ
奏子
篤

信二
柳弘

思い上り汗もメダルも色褪せる
体罰は怖いが市長恐ろしい
体罰と言う苛めを子供から学ぶ
沖繩に今日もつんざくオスブレイ
沖繩の民意を聞かぬ民主主義
リーダーに睨みかえせぬ険し海
運命の受け入れ方で幸不幸

柳塔なら

坊農

柳弘報

物わかりいい老人の顔でいる
欲捨てて現状維持の屠蘇祝う
金婚を祝う日までのロスタイム
月末を愚妻へ拝む空財布
しおらしい演技の裏にある野心
夢を抱く二葉を祝うランドセル
演技ではなかつたあの時の涙
東北の民話の里は雪景色
紅白の水引まとう論吉敷
派手な色自分で買った誕生日
演技なら無用金ならたんと有る
ええ加減アメリカ語でやめなはれ
拝んではないが幸せの欠片
拝んでも七福神は冬籠り
人生の門出を締める黒田節
成田屋の隙を見せない瞳の動き
演技派の名優達が消えてゆく
山の神拝んでいれば平和です
目薬とわかつていても泣かされる
新玉に集つて祝う血の絆
濾過すれば紫色になる民話

たかこ 二 昭 勝 弘 の ぶ 久 鮎 子 宏 眞 澄 博 一 史 郎 次 郎 満 作 成 子 萌 子 弘 風 郁 夫 紀 雄 勝 弘 信 子 道 子 ば っ ぱ い さ お 克 己 修 之 國 治

ふる里の川に民話が溢れてる
真つ白な心で拝む無神論
演技には演技で返す虚よ実よ
国民がさつと仕分けた総選挙
究極は五体投地という響き
遠い人祝う独りの赤ワイン
寶石をひとつ手放す祝い事
拜まれて石の地蔵はこそばゆい
拜まれて鬼も仏になつてくる
五体投地深い祈りの中にある
とてもとても拝み上手を開き入れる
移植したいのち祝うている夜明け
古民家にジャズもロックも寛いで
夫婦ならあんなにいちゃつきはしない
柳塔まつえ時社(鳥根) 相見 柳歩報

柳 弘 比 呂 志 森 坊 堅 盛 隆 理 完 次 眞 理 子 富 子 理 恵 朝 子 弥 生 証 子 順 啓 知 恵 子 柳 歩 ち え こ 青 帆 ひ ふ み 寿 代 た け し 桂 子 芳 恵 ゆ き 幸 山 芳 山 崧 丘 畔

まな板の魚に何を語ろうか
タイ・ヒラメ竜宮城が本籍地
耳よりの話が好きな回遊魚
鯛大根上手に炊けて亡母恵ぶ
小魚の骨まで愛しカルシウム
ふぐちりかうなぎか迷う年金日
線香の香りあの世といききする
直線の疲れほぐした宿のお湯
予防線越えて火の粉が舞い降りる
程々で良いと生命線に告ぐ
二人から一人になつた路線バス
暮れるのも早い夕日の湖北線
地に積もる雪を搔いては腰撫でる
頑丈な腰で老いても曲がらない
腰低くして前へ出なさい隠岐の海
出雲そば腰と色黒自慢する

民 久 枝 久 久 千 里 幸 代 昌 枝 左 余 とも 子 草 庵 禮 子 美 智 子 町 紅 聡 美 長 吉 弘 湖 注 一 風 賢 子 清 太 雄 子 森 之 寿 子 慶 子 朝 子 常 男 壽 峰 高 鷲 仁

八尾市民川柳会(大阪) 土田 欣之報
平凡な幸せ抱いてよく笑う
参考にならぬ口裏合わして
犯人追うて追うて生涯デカの靴
純粹な人の命を取る炎
春風に追いかけてられて八分咲き
正直に生きた男の靴の底
鬼の首玉に取つた豆の粒
参考にしたいゆかしいお人柄
演奏会拍手で目覚め席を立つ
先例の見事見事な轍を踏む
賢明な見事はすかさず閉ざす
もう追わぬすべてを過去の戯画にする

建前と本音の辺り嘘がある
口紅を変えて明るい人にする
少しだけ勇氣を出して損を取る
お手玉で遊んだ童女いま検事
あたたかい嘘は話し隠し味

長柳会(大阪) 坂上

淳司

分ける手間省いてやろう遺産ゼロ
分け前が少ないと言う不平顔
無理をして恵方に向かい丸かじり
神様に拾円玉で無理願
素っぴんから美女誕生の化粧技
おーいお茶妻が笑顔でもつてくる
けじめなく教職降ろす退職金
王子かけごはんが旨いすきつ腹
神風が吹くと信じて花と散る
神様に会いたくなって旅に出る
途中下車ばかりしてた娘母となる
美味しそう孫がほうばる握り飯
笑顔という一品添えた我が家の膳
恋という一人芝居のあはらしさ
縁結ぶ神に娘は縁がない
喉もとを過ぎると忘れられた神
過去のこと忘れすつきり明日へ夢
痛快に悪が減びる時代劇
九死に一生神は在わすと信じた日
降り立った駅で種まく事にする
産声に肩の荷降りてママの顔
国境線引いては戦するヒト科
神様もいたずらなざる運不運

紀美代 扶美代 華 耀 欣之

淳司 輝子 修 武男 登美子 正博 三和子 弘光 正子 よしお 正子 篤 光弘 幸子 芳野 靖博 隆彦 敬二 けい子 孝代 正美 久美子

飛び乗った車が分けていた命
忘却と言う神様のプレゼント
バックカスがノンアルコール嘆いてる
川柳塔きやらぼく(鳥取)大塚 恵子報

川柳塔きやらぼく(鳥取)大塚

逃げ足の早い財布と年を越す
年始め一歩踏み出す八十路坂
青い空あれが天国かと眺め
蛇使い毒化を抜いて儲けている
足になり心支えてくれる杖
光るもの持つて生まれたもみじの手
もう年をかぞえず今をけん命に
元氣だと肩身のせまい同期会
平凡な暮らしを幸と思う齡
青年よ私の歌に何故なみだ
わざわいを幸せにするおまじない
ひと呼吸おかねば歌えない私

鶴子

初枝 喜周 惠子 麗 ゆき 寿々子 ちかし 瑞枝 千代 未延子 昌紀 美籠 郁子 満知子 一歩 公平 五月 勝弘 舞夢 半錢 定子

和代 和子 克三 惠子報

産声に振り回されるママとパパ
産声をあげて儂い一週間
産声は愛の讃歌に違いない
産声が酸素吸入してくれる
産声がハモッています双子ちゃん
虐待へあの産声を忘れたか
産声が窓を振らす元氣よさ
オキヤオキヤママおおきにと言っている
拆が入り待ってましたと大向う
良心をたまに無視することがある
良心の呵責仏になった鬼
わが妻は美人じゃ無いが笑顔よし
良い事を聞くのか右の耳痒い
計画が半分できたあたりがたい
地下足袋も軽そに息子よく稼ぐ
生きがいを見つけて靴を磨く朝
良い事はたまにあるからなお嬉し
啓蟄や春のざわめく良い響き
初日の出もそろそろ目を覚ます
竣工を待たず名優幕をひき
始発電車今日一日が走り出す
人の口気にせず通す自分流
おしどりにあるのだろうか倦怠期
あの時の雨が二人をそうさせた

京都塔の会

うっとりに見とれ値段にハツとする
十人の男アルジェの星になり
養生より喋る方が薬です
養われた気など全くない子ども

志津子

りつえ 五月 富美子 柳弘 賢子 典子 克博 克己 桃花 朝子 順子 篤子 美世子 シマ子 日の出 紀子 芳香 妙子 かりん 直子 裕之 ばっは

宏子報

益子 満子 文代 益子 満子 文代 益子 満子 文代

ロボットも用事がないと鬱になる
大病後養生という名を覚え
用済みといわせぬとこい生きてやる
養ってもらって昼寝しています
無念だろうと風花が舞う極
アルジェリア夢のなかばでちる無念
うっとりときいて大事をきき洩らす
日本をテロから守るのは金か
日々出会う苦楽にいつか鍛えられ
愛されて愛する心身につける
モンブラン見上げ至福の息を呑む
長電話用件忘れ又かける
母の涙砂漠に届き池となる
老人用老人用がひつかかる
雨の中振袖眩し及び腰
野暮用という必要悪にせめられる
寒空に見上げる星座うつとりと
面影をうつとり偲ぶ独り酒
青い目の足を止めてる舞妓さん
子に添い寝ほくくる茶筌
白魚の指がくるくくる茶筌
うつとりと沈む夕日に目を止める
何の有るのか妻は又出かけ
遺族年金も夫に養われ
じっくりと聴く用件に虚と実が
三浪の孫を養う二度の職
父さんの方に用事はありません

城北川柳会(大阪) 近藤 正報

則彦 泰夫 英啓 昌乃 小百合 葉子 昭 輝美 宏子 義昭 悦子 弘之 求芽 めぐ 知栄 みどり 美津子 やよい 欣之 庸佑 福子 綾子 五月 牛延 朝子 洋志

顔洗う今日も光っているために
油断した兎の意見聞いておく
口笛にタイムスリッパした青春
ほんのりと灯が点いている起きている
国の借金ずしり未来へ続く額
油断した男に影も付いて来ぬ
愛の巣を繕い直しルビー婚
口笛で心通じる僕と犬
スッピンをもちり見てからウツになる
障子貼り部屋がほんのり暖かい
残り火をさらりと消したためるい酒
公園に誘ってくれた冬日和
いつもならほんのりの妻今宵虎
口笛が聞こえる裕ちゃんの波止場
きっかけを活かせないのも縁だろう
血の雨を砂漠の神は望むまい
ほんのりと匂う京言葉のお洒落
駄菓子屋は口笛も出る小宇宙
無限の夢へ口笛を吹くランドセル
立小便見られ口笛吹いている
緊張を軽いジョークが解きほぐす
お調子にのれば必ず没が来る
一年を笑って暮らす笑魂塚
親は親子は子と言えど柿の渋
ほんのりと香り残してうなじ行く
油断した振り残して敵の裏をかく
ほんのりやめられる胸にかいもう一杯
やさしさがほんのり胸に灯をともし
雪模様今夜は母に電話しよう
何事も輪の中心に居る意気地
去年より大きな円を描いてみる

たもつ 一步 寿子 弘風 和夫 直樹 倫子 仁 正 典子 隆男 いさお 修 榮子 柳弘 麗子 正子 堅坊 義昭 勝弘 千恵子 高志 美智子 集一 賢子 武彦 杖香

レモンほんのり君と僕とのティーカップ
口笛に女優しく戸を開ける
ほたる川柳同好会(大阪) 水野 黒兔 信男 郁夫
パソコンを頼りにし過ぎ文字書けず
ネットでは買物しない世代です
パソコンは便利で怖い武器になる
パソコンもなければないの暮しぶり
いかがですかパソコンを見て医者はお聞き
くわしくはウェブでなにとそっけない
向いてないやらずに言うなあかんたれ
振り向いてはしい二月のチョコレート
何処向いて走るにもせよ吾が祖国
前を向き歩いて行こうもう少し
向き方で機嫌そこねる僕の腰
一人旅振り向くたびに遠くなる
がたがたですがまた使えます古希の妻
あちこちの体弱まり薬増え
節電の夜ガタガタと骨が鳴る
文系か進路に悩む受験生
川柳塔さかい(大阪) 村上 玄也 好 世紀子 日の出 像山 篤子 和幸 敏治 誠一 さくら

育メンも授乳はママにハイ交代
 数え切れない苦勞が語る皺の数
 父ちゃんに所帯任せて翔んでます
 いくつも分けてへそくり仕舞つとく
 いい機嫌と悪酔い乗せて終電車
 いい女私の視線縛りつけ
 いつまでも笑われながらしゃり出る
 毎日の薬飲えて飲んでる
 歳のサバ読むくらいでは追いつかず
 梅一輪二輪咲いてる早春譜
 ヘソクリが数える度に減っている
 八十路過ぎ数えられない豆の数
 傾いてから社をバトンタッチされ
 交代はないと白球渡される
 サングラス外せばもつと怖い顔
 老老介護交代の人待つてます
 交代したい日もあるう仁王様
 新しい父さんが来て家を出る
 父さんが抱くと赤ちゃん泣き止んだ
 同窓が数えるほどになってきた
 詮無いと知りつつ愚痴を並べ立て
 女子アナのとちったとこを数えてる

川柳大阪

森松まつお報

澄空 倅子 五月 健吾 雅明 清のん子 時雄 千代 舞夢 八千代 玄也 願 和夫 朋月 光 としお 冬虹 唯教 半錢 天笑

美人画の鼻をだんごにしてしまふ
 たくさんの丸をもらつた親孝行
 暴力と愛のムチとの履き違い
 指導力問われる前の闊平手
 眼力で客唸らせた花役者
 記憶力自慢じゃながせロ地点
 満身の力を出して締めくくる
 パージンロード父の歩幅が力んでる
 妻の寝顔見ると力抜けてくる
 あの国は世界に刺激まきちらす
 刺激いらん刺激がほしい揺らぎます
 煽られて老いた残り火軽く揺れ
 これ以上刺激をすると暴発だ
 人は皆明日があるよと余裕持ち
 初春の女性のパワーに目をみはる

川柳花の輪(大阪)

岡本

笑風 喜楽 鉄心 彦太 かよこ 一歩 芳香 柳弘 まつお 美世子 和風 紀雄 功司 薰報 あや乃 昭好 みちる 一幸 敬子 泰子 勇太郎 克衛

春や春洗えば消える罪いくつ
 百歳へ尚もまっ赤な血が流れ
 魔法です炬燵はみかん甘くする
 炬燵からの頼まれ事も懐かしい
 角度変えて見たらほんとはいい男

サークル檸檬(大阪)

松尾美智代報

春なのに一人はつちは色気なし
 熱心な誘い嵐の来る予感
 生きると潮の満干に似たるなり
 生かされて今日一日と勝負する
 生きている証拠に腹が減ってきた
 決断が鈍っているか生返事
 六度目の干支まで生きたまあだまだ
 鬼さんも一緒に食べた丸かじり
 愚痴弱音吐き放題で生きている
 生きている日々を浮いたり沈んだり
 ちよこちよこと油さしつつ生きてます
 極楽に行けてもこの世で生きたい
 八十路きてようやく悟る人生か
 人間が好きで長生きするつもり

西宮北口川柳会(兵庫) 久保田千代報

日本列島蓋するように降る黄砂
 寒行の太鼓撞つた風を切る
 ランドセルワクワクブルン春を待つ
 靴磨くどうせ汚れる靴だけど
 叶わぬと知りつつチョコに託す恋
 口笛が自然と出る日楽しい日
 大志ありラーメン店のアルバイト
 入学に喜ぶ親子泣く親子

みつ子 哲子 義子 貴代子 てる 房子 蕉子 いわゑ たもつ 昌紀 光久 加お里 美智代 扶美代 義子 希久子 智恵子 みつ子 楓楽 宏造 玲子 章子 直 勝弘 敏夫 伯備

御入学爺婆四人従えて
 湯たんぽを抱いてあなたの夢を見る
 梅一輪ほころぶ春のころろざし
 志母の背中に書いてある
 一段と輝く星が亡夫かも
 行いは悪いが身体張っている
 行いを十年日記笑っている
 修行僧の赤らむ素足京の露地
 悩みなど小さいことと空の青
 バレンタインは恋の狩人かも知れぬ
 バレンタインチョコより笑みを貰いたい
 行いがいいからきつと明日は晴れ
 四畳半僕にも愛のあとがある
 大志を抱いた同級生と集う古希
 許すとはこんなにつらいことでした
 日行脚いつの間にか古稀の坂
 孫入学免許返上お祝いに
 ホワイトデー忘れてました罪ひとつ
 バレンタイン義理を送られ義理返す
 頑張った瓦礫を突いてひこばえが
 熱燗を叫れば溶けるわだかまり
 無為無策それでも一日たちました
 志ならず桜の散った春
 チョロを買ひブーケを添えてバレンタイン
 外は雪イブモンタンと独り酒
 寒風に芽吹いたバラの本一気
 優しい嘘さし混ぜと寸志なり

倉吉川柳会(鳥取)

竹信

照彦報

淑子 盛夫 秋果 順子 歳子 忠 野鶴 弘子 利子 無限 千賀子 茂 武彦 武臣 ひとみ キヨミ じろう 耕治 浩司 美津子 朋月 求芽 比ろ志 奮水 哲男 義龍 美子

節分がくれた長生きまだ途中
 節分も一人二役福と鬼
 おかしげな動物ですぬ人間は
 おかしくて馬鹿げているが気が楽だ
 可笑しくて馬鹿げているが気が楽だ
 死にたいと言いつつ医者の梯子する
 おかしいな何処へ行ったか知恵袋
 おかしいなおかしいままに日が暮れた
 テレビ切りおかしき頭冷やして
 百歳も二十歳も同じ一票だ
 足湯して何日本の毛が泳ぐ
 百歳が増えずきちゃって価値下落
 百年の恋も冷めるは寝起き顔
 俺もまた百鬼夜行の列に入り
 百までも生きるつもりで保険かけ
 百舌の餌串刺しされて風なびき
 束縛もないのに老けて羽ばたけず
 半世紀縛り縛られ共白髪
 縛られた鎖も解いたリンカーン
 コンサート行きたければまなまらぬ
 古希過ぎて妻が握った縄の端

川柳藤井寺(大阪)

鴨谷瑠美子報

恭子 智恵子 石花菜 けいこ 萩江 美代子 節子 玲子 醉芙蓉 日出国 重忠 次男 貞子 鬼一 祐子 英子 由紀子 茶子 悠子 和子 照彦 龍一 ちづる 光枝 絹男 一歩 勝弘 いさお 一筒

論文と面接合格が決まり
 面接に馴れて相手を甘くみる
 距離すくおしくと外面を甘くみる
 淋しくて飯の中に入れて置くころ
 面食いつれ添ってくる浪費癖
 おたふくの面に似合わぬいい気立て
 面倒な人が胸から出てゆかぬ
 面脱ぐと顔も一緒に取れていた
 来た道のそれぞれ違う面の色
 ヒョットコのお面は涙など見せぬ
 時間掛かったメールの返事娘の早さ
 国の為早く死んでと財務相
 月下美人早い遅いは競わない
 急ぎの返事手つとり早い携帯で
 早いだけでは結果は何も出てこない
 せつかな馬だな来年の予約
 早く嫁け早く嫁くなと親のエゴ

六甲川柳会(兵庫)

伊勢田 毅報

瑠美子 一文 弥生 清之 ヨシ枝 扶美代 信二 婦美枝 六点点 喜代子 紀雄 悦子 みよ子 雄太 美代子 雅枝 光久 無限 和郎 義博 利子 ひとみ 勤 妙子 千賀子 能弘 繁子

水上の芸を窮める浅田真央

激論をきわめたあとのソーダ水

極めたら鯛で終った釣りの技

ねえべたらわしたを何処へ連れて行く

清纯なままでも女は終われない

はずんでる時のわたしは多面体

義理チョコはホワイトデーに気が重い

行列のできるラーメン手際良さ

先がけのプランをひねる冬の底

ポロリポロリ純な気持ちを見せる人

純朴なところがあって憎めない

髭剃つている間に妻が着せせる

無のきわみ眠つてみたが夢をみる

兄弟に採まれ素早さでは負けぬ

きわめてもきわめてもまだ壁がある

清濁を吞んでもぶれぬ純な軸

全盛をきわめた頃にある驕り

脱皮する毎に蛇にもある色気

川柳さんだ(兵庫)

堀

正和報

女形メーク落すとおじいさん
胸張つていよう冴えない頭でも
元彼がウイंक寄越す披露宴
血圧が医者白衣で高くなる
迷つたら大安の日が決め手です
血圧によい食品が棚にない
ふる里で子孫を残し果てる鮭
コレステも高血圧も歳のせい
女房の口に勝てないもどかしさ
夕映えがウイंकしてる私に
ときめきを下さい冬のオリオン座

堅坊 則彦 茂 菜々子 久子 葉子 武臣 美子 美龍 千代 耕治 巴子 かずお 郁夫 幸雀 美智代 靖鬼 哲男 忠 好文 健二 雅尚 章子 キヨミ 歳子 宣子 順子 婦美子

DHA脳の栄養魚から

血圧は低いけれども恋はする

老犬に血圧あるを知らなんだ

金魚すくい時代の波に流されず

負けようが勝とうが明日の陽が昇る

花嫁の涙を見てる睨み鯛

甘言に負けて自分を見失う

大好きな君のお口へチョコレート

鏡見てウイंक漫画の見すぎだよ

お土産は胸に包んだ旅の雪

魚好きあしたへ言む骨密度

税務署でいやと嘔む程られる

粗茶ですとペットボトルでもてなされ

ウイंकして三途の川でもどされる

赤鬼に高血圧か聞いてみる

負けたけど食欲落ちるほどでない

年金を目あてに母の介護する

争わず負けて治める平和主義

飼主に似たかメタボだ金魚まで

川柳塔わかやま吟社

川上

大輪報

幸運を掴む十指を清めてる
運命線うつつすら長く生きている
原点に戻れば運が向いてくる
水栓の洩れも運なのかも知れぬ
幸運が走ってきたぞ戸を開けよう
運ぶのかやってくるのか人の運
不整脈心が風邪をひいている
生き様をさらすと時も脈を打つ
脈ありそうそつと伺い立ててみる
まだ脈のあるうちに言うサヨウナラ

淑子 ひとみ ちあき 喜久子 美龍 朋月 光久 菜々子 千津子 哲夫 ヨシエ 野薫 見 雅司 雄太郎 聖也 一泉 一和 和香 よしこ 准一 あきこ 月史 悟めぐみ 徑子 秀子 夕胡

脈脈と受けつながられていく家紋

静脈の浮き出た母の手をささる

介護の手ポツカリあけて夫が逝く

ぼつかりの雲も春めく梅の里

ぼつかりの穴を癒したスケジュール

抵抗なくぼつかり開いた母の傘

そのうちに自分をはまる落とし穴

ポケットにまさかの秘密蹲る

ポケットの決意伸びたり縮んだり

ポケットからポケットへ有無は言わせない

ポケットにしまった拳バネにする

ポケットに笑い袋を入れて出る

ポケットを探すふりして借る小銭

ポケットにしまい忘れた記憶力

ポケットのむかし話が終わらない

ポケットの夢の花にも水を足す

ポケットに入れた私が出てこない

米子住吉川柳会(鳥取) 渡辺多美子報

とんどさん早朝響く触れ太鼓
十五日運転免許さようなら
預けたい歳また拾い自炊する
都合よく雪になったらまた会える
酔った振りふらりと借りるひざ枕
お賽銭少し弾んだ初詣
酒呑みに酒が集まる年の暮れ
神さまもアルミの音は聞き分ける
不揃いのようなだが夫婦仲は良い
わかあゆ川柳会(鳥根) 松本はるみ報
挫折してもまたも仏の手に纏る

なる子 椒子 美子 泰女 富美子 智三 保州 寿子 紀子 克子 ほのか 英子 紀久子 まさみ 小雪 好男 大輪 礼子 登美枝 正二 宏之 ひろし 多美子 公一 紀の治 未延子 ちよえ

宇宙から見れば浮世は住みにくい
 神仏に頼り浮世の波かぶる
 ひとり芝居浮世のさまを問うてみる
 顔二つ持った狸の盆踊り
 踏み込んで浮世でからんだ蜘蛛の糸
 失った信頼戻す台所
 ひとり住む浮世はなれの髯の延び
 残り火を大事に余白ない浮世

岸和田川柳会(大阪)

佐藤

幸子報

沈黙の群れから一人手を上げる
 まっすぐに歩いてますと酔っぱらい
 マラソンでリードスパート熱い汗
 時事吟で反戦平和リードする
 北国に昔晰の雪が降る
 目をつむり妻の車に乗っている
 年金でなんとかやれるありがたい
 リードしたとたんに気持ゆるみだし
 一泊の妻の荷物が多過ぎる
 雪滂滂そりりそりりの下り坂
 叱り上手後味の良さ感じさせ
 後味がすすりしるレモネード
 此責の後に期待の語を添える
 後味の良さと思さは紙一重
 尊敬が愛に変わった今
 リードされ一度タンゴ踊りたい
 アメリカにいつもリードされている
 味の良さ染みついている母の味
 身内やから言い過ぎ残る帰途の悔い
 リーダーが二足わらじで西東
 終章は閻魔がリードしてくれる

かつ子 英子 はるみ 好栄 恵美子 澄子 昌子 清泉 蛙城 昭益 益祥 いさお 香代 清美 和也 信二 淳風 幸子 珠子 隆昭 大輔 忠太 榎代 保州 房枝 弘子 洋子 ひろ子

美しい嘘はらはらと吐く女よ
 国宝と聞いてその気で見ると
 議論では負けて駄洒落でリードする
 マスメディア時々世論ミスリード
 後ろからついて行くのが性にあう

翠洋会(大阪)

佐々木満作報

有難う言う度とげが丸くなる
 とげのある視線に耐えて銚子振り
 隕石に比べりやとげの一二本
 とげのない言葉は返すきつい棘
 イベントの買物いつも同じもの
 葬儀屋の内覧会に若夫婦
 世話役も老けてイベント先細り
 飢餓の子に悪女の涙見せし
 イヤリングそつとはずしてから悪女
 悪女だが気さくな人で面白い
 おどろおどろしい女が自殺したニュース
 悪女の芽誰の胸にも潜み
 悪女めく妻と暮らして卒寿まで
 電力も太陽の持つ力借り
 節分に寒がりの鬼論し入れ
 沙羅ちゃんジャンソチまで飛んで行け
 君のとげなら喜んで刺れ死ぬ
 深情ポクはもうすぐ薄死れよう
 無防備な男にウソはつきにくい
 良妻を脱皮し消えた肩のこり
 論されて心が解けた青い空
 喜怒哀楽言うことなしの日記綴じ
 ほがらかな母の遺伝を継いで幸

みつ江 まつお 義泰 康信 芳香 希久子 浩二 蕉子 げんえい 舞夢 公平 眞澄 昭子 富子 日の出 恭昌 紀子 知之 善之 滋彦 桃花 楓葉 理惠 捷也 弘子 照子 千歩 満作

何色を着ても妥協はしない影
 鬱の字を分解させる花の風
 思いやりも強さも大事子の自立
 川柳あまがさき(兵庫) 加川 靖鬼報

言葉より心にしみるその笑顔
 なれるまで恥かしかつた車椅子
 勉強はそこそこ出来たらええねんで
 同窓会会いたい彼は御欠席
 少年野球球一点の孫光り
 豆撒きの鬼にかなわぬ恋をして
 過去捨ててそこそ今を生きている
 そこそこの今まででしたありがとう
 どの局も暗いニュースにテレビ消す
 挨拶はそこそこにしてまあ一献
 ハミングをしながら句会向います
 合掌で嫌な思い出始末する
 強面で笑い上戸でいいお酒
 i P S 夢が膨らむ眼に光
 成田離婚どうすりゃいいの此の指輪
 食足りて衣食住みなよしとする
 はきはきと何時も笑顔のバイトの娘
 寒気団とつぶやくだけで眠くなる
 一豊の妻に倣えと嫁に出す
 真剣になれるあなは素敵だな
 ほほ染めて君の声待つ梅の花
 そこそこの悩みが生きる糧になる
 始末屋の嫁で何にも言えぬ姑
 冷やかに笑う我輩猫である
 菜の花の真ん中春の陽を掬う
 笑い声好きな福耳持ってます

集一 志華子 みつ子 初音 寛十郎 泰子 美也子 柳明 幸香 洋子 勝巳 純花 楓菜 雪菜 あり よしひさ 美代子 健二 五月 菜々子 野薫 ひとみ キヨミ 和子 章子 哲夫 ヨシエ 正和

秘められた笑顔の奥にある翳り
 断捨離の枠から外す恋一つ
 豆まきの福が早速チヨコ連れて
 笑顔の種が宅急便ののって来る
 凍てた雪平均台に行く歩き
 如月の月甘えなど寄せつけぬ
 どん底に射す光明にいた仏

大山滝句座(鳥取) 新家 完司報

春の彩そえてカタログどつとくる
 食前に酒食後にはクスリ飲む
 センペイ布団腰にめつぼういい布団
 明日遊ぶために努力をしている今日
 よく忘れメモを頼りに生きている
 玄関は靴が爛漫大家族
 色欲を卒業したらまだら惚け
 脳天にピカソの喝を叩き込む
 歩数計に歩け歩けと責められる
 たんぽぽの黄色の中に白く咲く
 ゆつぱりと歩けば景色よく見える
 カメ歩きだから人には愛される
 悪人の面になるから髭を剃る
 私流大事な人にチヨコあげぬ
 私もと威張つて言えぬ認知症
 やすやすと万円札は拾えない
 死んだ真似したりふらりと歩いたり

靖鬼 かずお 祐康 比ろ志 哲男 美龍 朝子
 美惠子 紀の治 芳山 くにこ 照彦 大鯨 石花菜 麦青 蟹郎 幸大 雄大 幹啓 重忠 鈴野 すみゑ 仁美 完司

絶望のカルテを神は見放さず
 生かされているのを忘れてから墮落
 笹船のキャブテンしてる赤とんぼ

前向きに歩めば夢も見えて来る
 紙オムツしても威厳を崩さない
 まだ生きている命カルテを積み上げる
 カルテ見ると顔見てカルテまた見てる
 どん底も心の花は咲かせたい
 理不尽を平気で通す北の国
 キャブテンの責任捨てて遊びたい
 愛し合う二人でいたい極まで
 胸張って出掛けとほとほ帰る道
 明日への生きるパワーを新芽から
 みどり児の踏み出す大地から春よ
 ありがとう父母の膝から第一歩
 春一番残る椿に匂う梅
 愛しても説明不足で逃げた恋
 監督に自殺しないと誓約書
 若さとは地図にない道歩きたい
 点滴が必要地球儀のカルテ
 説明しなくてもはつきりわかる三面鏡
 いびきかき眠つたままの万歩計
 親思う心うれしきありがたい
 何もないと日記に書く日満ちたりて
 キャブテンの小さな肩にのる鉛
 こつち向いて貧乏神が歩いとる
 人並みに今年も来たぞ花粉症

壽峰 高鷲 仁風 美江 尚世 忠央 仁清 賢子 朝子 かつみ 西風 弘一 弘昭 祥昭 薰泉 博泉 ルイ子 美智子 麗修 さち子
 蟹郎 茶節 圭一郎

岩美川柳会(鳥取) 石谷美惠子報
 啓蟄や雪に首たまた引つ込める
 虫の息それでも金は離さない
 気の早い虫が薫く陽のひかり
 コンセントつなぐと夢があふれ出る
 微熱して待ちつづけてるコンセント

去年から何とかせんといけん膝
 前向きになると何とかなるもんだ
 憎しみの瓦礫の山で奮起する
 頑張れよ瓦礫の下も春が来る
 俺んちの山に瓦礫を置きなはれ
 空き家増えいつか瓦礫の山となる
 辛うじて瓦礫なんか朽ちません
 丸出しのエゴが瓦礫を突っぱねる
 全財産瓦礫にさせた大津波
 タンポポは瓦礫の山に咲いていた
 黙祷を瓦礫の山に捧ぐ旅
 軽トラで行ってやりたいガレキ処理
 人生を何んとか踊り終えた靴

事務所便り

一月末締切りの「ごま川柳」と二月
 二十日締切りの「第二回春の誌上大会」
 に多数のご参加を頂き誠に有難うござ
 いました。「ごま川柳」の入選作は四月
 号で、「春の誌上大会」は五月号でそれ
 ぞれ発表致します。

また「ごま川柳」の入選作には「オ
 ニザキコーポレーション」から、「春の
 誌上大会」の秀句には弊社より賞品を
 お贈り致します。尚、誌上大会の参加
 者名は全員掲載し、会員以外の参加者
 にも掲載誌をお送り致します。楽しみ
 にお待ち下さい。(山岡富美子)

幸安 幸子 忠良 一瑤 はお 是ぬ 菖子 清帆 重忠 公粹 昭弘 美惠子

句会名	日時と題	会場と投句先
豊中 もくせい 川柳会	15日(月) 13時40分締切 出合う・夜明け・減多・自由吟	豊中市中央公民館 4F 阪急曽根駅南東・徒歩5分 〒561-0801 豊中市曽根西町2-8-4 江見見清
川柳 さんだ	16日(火) 12時30分締切 旗・ルール・乗る・はつらつ 自由吟	キッピーモール 6階 (JR三田駅前) 〒669-1546 三田市弥生が丘5-2-4 堀 正和
川柳 塔 みちのく	20日(土) 16時開場 喜劇・ぎりぎり・通う	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ 1階「川柳道場」 〒036-0161 平川市杉館宮元53-1 小寺花峯
川柳 ねやがわ	21日(日) 14時締切 開幕・組織・不便・自由吟	寝屋川市立総合センター 4階 第1研修室 京阪寝屋川市駅からバス 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
川柳 藤井寺	21日(日) 14時締切 甘い・スタート・席題は共選	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール 3F 近鉄南大阪線藤井寺下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子
岬川柳会	21日(日) 13時開場 従う・やんわり・触れる	淡輪17区集会所 南海みさき公園駅・徒歩6分 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
南大阪 川柳会	22日(月) 18時開場 本気・ピカピカ・食べる 遅しい	大阪市立住まい情報センター 5F 研修室 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋6丁目駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
京都 塔の会	22日(月) 14時締切 ゆったり・満・備える	京都ハートピア 地下鉄丸太町駅⑤号出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル 弁財天町328-202 都倉求芽
松露 川柳会	22日(月) 19時30分締切 花・電話・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口194-2 山本正光
川柳クラブ わたの花	26日(金) 10時開場 素朴・突破・卵・自由吟	八尾市生涯学習センター 〒581-0012 八尾市小阪合町1-4-8 西川義明
川柳 塔 すみよし	27日(土) 14時締切 リモコン・へとへと・思い	住吉区民センター 南海高野線沢之町下車3分 〒558-0054 大阪市住吉区帝塚山東2-4-9 古今堂蕉子
和歌山 三幸川 柳会	27日(土) 12時30分開場 入る・利口・煙	和歌山商工会議所 4階 第2会議室 〒640-8570 和歌山市南中間町20 ニュース和歌山編集部「和歌山三幸川柳会」
はびきの 市民 川柳会	28日(日) 14時締切 予算・生きる・エゴ・流れる	綾南の森 公民館 近鉄高鷲駅北東・徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
川柳 ふうもん 社	28日(日) 13時30分開場 シングル・迂闊・わびしい	開発ビル 2Fホール 鳥取市片原1-107 〒689-0202 鳥取市美萩野2-171-3 中村金祥

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6779-3490)へご連絡ください。

4 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句会名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
川柳塔 な	4日(木)14時締切 嫁ぐ・椀・自前	奈良市立中部公民館 4F 近鉄奈良駅④番出口・徒歩5分 〒634-0812 橿原市今井町2-1-24-901 安土理恵
城北会 川柳会	6日(土)13時開場 脱ぐ・幻想・ジंकス・自由吟	旭区老人福祉センター 3F 地下鉄千林大宮③番出口 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18 神夏磯典子
富柳会	6日(土)14時締切 線・四角・自由吟	富田林市中央公民館 近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 TEL0721-25-0603 池 森子
倉吉会 川柳会	6日(土)14時締切 やれやれ・蒸す・いやがらせ	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
八尾市民 川柳会	7日(日)14時締切 気分・毒・酔う・雑詠	八尾神社内 西郷会館3F 近鉄八尾駅西口徒歩5分 〒581-0083 八尾市永畑町2-1-7 土田欣之
西宮北口 川柳会	8日(月)14時締切 制服・笑う・ためらい・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩3分 プレラにしのみや 〒662-0062 西宮市木津山町3-15 亀岡哲子
川柳 あまがさき	9日(火)14時締切 装う・コップ・ゆっくり 自由吟	尼崎女性センター トレビエ 阪急武庫之荘駅南へ200m 〒661-0953 尼崎市東園田町2-45-8 山田耕治
ほたる 川柳 同好会	9日(火)13時30分締切 麺類・占う・うっかり	豊中市立蛍池公民館 阪急・モノレール 蛍池駅駅前ビル 5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒兎
あかつき 川柳会	12日(金)14時締切 笑い・瞳・真剣・時事吟	大阪保育運動センター(新谷町第1ビル 2階) 地下鉄「谷町6丁目」駅③番出口から3分・道路向い側 〒599-0232 阪南市箱作1586-14-102 森村美花
川柳塔 さかい	13日(土)13時開場 上げる・ゆとり 折句=はまち	堺市総合福祉会館 〒590-0016 堺市堺区中田出井町3-4-31 村上玄也
川柳大阪	13日(土)14時締切 騙す・弱・溜息	地下鉄・長堀鶴見緑地線 京橋駅「研修室」 〒533-0004 大阪市東淀川区小松1-18-24-14 長井善純
川柳塔 まつえ	13日(土)13時45分締切 デザイン・たまご・逃げる いろいろ	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0056 松江市雑賀町366 錦織禮子
川柳塔 打 吹	13日(土)14時締切 楽・アイデア・脱ぐ	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光
岸和田 川柳会	13日(土)吟 行	いおやかの里 〒596-0076 岸和田市野田町2丁目13-19 中岡香代
川柳塔 わかやま 吟 社	14日(日)14時10分締切 兼 題 = 柱・それから・近頃 課題吟 = 音	和歌山ビッグ愛 〒640-8319 和歌山市手平2-1-2 兼 題 〒640-8453 和歌山市木ノ本890-12 宮口克子 課題吟 〒592-8349 堺市西区深津寺町東2-208-5 楽原道夫

柳界展望

★第62回西大寺会陽川柳大会は2月11日、西大寺ふれあいセンターにて開催。参加者207名。同人の天位は次の通り。

小島 蘭幸
風になろうなろうと改札を抜ける

新家 完司
しばらくとそのうちにとが凭れ合う

★川柳塔わかやま吟社平成24年度
葵水賞

堂上 泰女
生きているつもりで予約みな受ける

福本 英子
背伸びして包む絆の解けぬよう

あおい賞
第2位 柏原 夕胡
留守電の再生亡父の声を聴く

第3位 坂部紀久子
物捨てる快感もありバチ当り

課題吟賞 米澤 俣子
タオルの陰にひらがな干してある

★南大阪川柳会平成24年度年間賞 1位 小谷集
一、2位 西出楓楽、3位 前たもつ

▽出 版△
◇長柳会(代表・村上直樹)創立二十五周年記念『自選十句集』平成25年3月発行、A5判103頁。

▽新誌友紹介△
神戸市 松井 文香
紹介者 山口 光久

豊中市 南 正代
紹介者 水野 黒兎

つくば市 嶋本 喬
紹介者 奥田みつ子

玉野市 片岡 富子
紹介者 新家 完司

枚方市 伊達 郁夫
紹介者 平尾 定昭
丹後屋 肇
奥田 勝子

紹介者 木本 朱夏
神戸市 奥澤洋次郎
紹介者 山口 光久

尼崎市 中井 楓花
紹介者 長浜 美籠
札幌市 並木 速子

▽お詫びして訂正△
3月号 P105中段12行
目、ばちばちと思ひ絆を切る録↓重い。24行目、拍手受けそれから思ひ荷を背負う↓重い。26行目、静電気はじけて留守の夜しじま↓夜のしじま。

常任理事会 3月7日(木)
①19回川柳塔まつり関連
②合同句集について③近畿を除く各地句会と塔本部との連携緊密化④第二回春の川柳塔まつり誌上大会の応募結果⑤平成26年本社句会・常任理事会日程⑥定例確認事項⑦各部報告事項⑧その他

次回 4月5日(金) 午前10時

木津川 計 著

『ことばの身づくろい』

日本語を愛するがゆえの熱い思いが全編に横溢している。(序文・難波利三)

ことばの身づくろい

— 話す為に・書く為に —
木津川 計

日本語を愛するがゆえの熱い思いが全編に横溢している。

難波利三

B6判 352頁
定価 (1,429円+税)

目次から

- 1 ことばの化粧とことばの襟
- 2 心配りのことば学
- 3 知識の宝庫としての漢字
- 4 ユーモアなくして生きられない
- 5 ことばにどう向き合うか
- 6 土地の文化を生み出した地域語(方言)
- 7 ことば遣いの達人に学ぶ
- 8 ことばへの無関心

発行 「上方芸能」出版センター

TEL 06-64441-3337
FAX 06-64447-0900

第28回 国民文化祭・やまなし2013 川柳作品募集要項（概要）

） 甲斐の国 薫る文化に馳せる夢 はばたけ川柳 ）

1. 応募受付期間 平成25年4月1日（月）～6月30日（日）（当日消印有効）
2. 応募規定

(1) 作品 一人各題二句詠（未発表作品に限る）

(2) 応募料 一人につき1000円（但し、海外投稿者、身体障害者手帳の写しを添付された方、及び小・中・高校生は無料とします。）

(3) 所定の応募用紙及び応募票に必要事項を記入し、郵便振替払込金受領証又はその写しを添えて応募してください。

(4) 応募先 第28回国民文化祭甲府市実行委員会事務局（甲府市教育委員会国民文化祭課内）
〒400-0865 甲府市太田町10番1号

3. 宿題・選者

〈事前投句〉 小学生・中学生の部

「座る」 玉島よ志子（山梨）

〈事前投句〉 高校生・一般の部

「山」 渡辺 松風（秋田）

「ぶどう」 山倉 洋子（新潟）

〈当日投句〉

「石」 島田 駱舟（千葉）

「編む」 小島 蘭幸（広島）

「順番」 安藤 波瑠（東京）

「青い」 砂田 勝行（富山）

「自由を作る」 井上 万歩（長崎）

第二次選者

大野 風柳（新潟） 久保田半蔵門（大阪） 大木 俊秀（神奈川） 田中 新一（大阪） 石田 一郎（長野）

4. 賞（予定） 文部科学大臣賞・国民文化祭実行委員会会長賞・山梨県知事賞 第28回国民文化祭山梨県実行委員会会長賞
山梨県教育委員会教育長賞・甲府市長賞・第28回国民文化祭甲府市実行委員会会長賞・甲府市教育委員会教育長賞

（社）全日本川柳協会会長賞・山梨県川柳協会会長賞

5. 発表会場 川柳大会（当日投句受付、入選発表、選評、表彰式）
平成25年10月27日（日） 11時00分～16時00分 甲府市総合市民会館

6. 問い合わせ先と募集要項の依頼先
入選作品は、「作品集」として刊行し、応募された方（小・中・高校生は入選者）に無料で配布。

〒400-0865 甲府市太田町10番1号 甲府市教育委員会国民文化祭課内

第28回国民文化祭甲府市実行委員会事務局宛 TEL(055) 223-7332 FAX(055) 223-7331

7. 主催者 文化庁・山梨県・山梨県教育委員会・甲府市・甲府市教育委員会・（社）全日本川柳協会・山梨県川柳協会

第28回国民文化祭山梨県実行委員会・第28回国民文化祭甲府市実行委員会

第28回国民文化祭山梨県実行委員会・第28回国民文化祭甲府市実行委員会

第28回国民文化祭山梨県実行委員会・第28回国民文化祭甲府市実行委員会

第28回国民文化祭山梨県実行委員会・第28回国民文化祭甲府市実行委員会

第28回国民文化祭山梨県実行委員会・第28回国民文化祭甲府市実行委員会

第28回国民文化祭山梨県実行委員会・第28回国民文化祭甲府市実行委員会

川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

「発表(6月号) 地名

市都
道府
姓雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201

檸檬抄投句用紙

「リサイクル」(4月15日締切)

6月号発表

奥田みつ子 選 — 共選 — 森山 盛桜 選

		B	A			B	A	
地名	市都 道府	姓雅号		切らないで下さい	地名	市都 道府	姓雅号	

きりとりせん

◎楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

左右に同じ句を書いて下さい

作品募集

6月号発表 (4月15日締切)

初歩教室 「束」(3句) 太田昭担当	一路集 (3句) 「耐える」 「しつこい」 江島谷勝弘選	檸檬抄 (2句) 「真ん中」 「耐える」 長浜美籠選	檸檬抄 「リサイクル」 (奥田山盛共選)	愛染帖 (3句) 新山盛桜選	水煙抄 (8句) 西出楓樂選	川柳塔 (8句) 小島蘭幸選
--------------------------	---------------------------------------	-------------------------------------	-------------------------	-------------------	-------------------	-------------------

7月号
檸檬抄 「常識」
一路集 「帽子」「包む」
「アクセサリ」
初歩教室 「誘う」

本社4月句会

と き 4月5日(金) 午後1時開場・1時40分締切り
 開場時間、締切時間を変更しています。ご注意下さい。
 ところ アウイナ大阪 4階 金剛
 天王寺区石ヶ辻町19-12 電06-6772-1444
 おはなし 「古希からの生き方」
 加島由一
 席題 「」
 大内朝子選
 兼題 「凹む」
 山田耕治選
 「ところ」
 森村美花選
 「奉仕」
 笹倉良一選
 「賢い」
 奥田みつ子選
 「紅」
 小島蘭幸選
 会費 1000円
 投句料 500円(切手可)
 (各題2句以内)

本社5月句会
 7日(火) 午後1時から
 兼題 「流行る」「ツアー」「茶」
 「嬉しい」「偉大」

第31年度 夜市川柳募集

第11回「からだ」大野風柳選
 ハガキに3句 4月20日締切
 投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3
 河内天笑方 川柳塔さかい

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋(本社事務所取り扱い)、檸檬抄は本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
 - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお問い合わせいたします。

定価 八百円(送料84円)

半年分 五千円(送料共)
 一年分 九千八百円(同)

二〇一三年平成二十五年四月一日発行

発行人 小島和幸

編集人 木本朱夏

印刷所 美研アクト

〒543-0052
 大阪市天王寺区大道一丁目一七
 花野ビル201号室

発行所 川柳塔社

電話(06)六七七九三三九〇番
 振替〇〇九八〇一四二八九四七九番

第6回オニザキ「ごま川柳」入選句発表

川柳塔社主幹

小島蘭幸選

なんにでもごま振り元氣もろている
 ごま入りの特製シチューわたし流
 あれ以来つきごま党になりました
 黒ゴマは父さん白ゴマは母さん
 ごま匂う一家に春はすぐ間近
 ごまふるとわが古里が匂い出す
 すりごまに芹のおひたし味深し
 銀シャリにごま塩シンプルイズベスト
 ゴマのお茶きな粉を混ぜてマイサブリ
 艶やかなごまの元氣が肌に出る
 姑来てるらしいごまのいい匂い
 食文化ごまの秘伝を守る祖母
 ノーベル賞を狙っています胡麻パワー
 ごま和えを誉めて一本追加乞う
 ごま摺って厨に温い灯が点る
 絶品のごま和え食べにはあちゃん家
 すりごま一匙ほうれん草が動きだす
 すりごまのパワーで闊歩するいのち
 おまじないバラりとゴマをふりかける
 頑固一徹ゴマひと振りが味まもる

【準 特 選】

おむすびを胡麻で飾ってあげましょう
 ごま足して料亭しのぐ味を盛る

【特 選】

ゴマ料理村一番の嫁となる

- | | |
|------|-------|
| 東大阪 | 北村 賢子 |
| 藤井寺 | 鴨谷瑞美子 |
| 堺 | 志田 千代 |
| 弘前 | 高瀬 霜石 |
| 豊中 | 水野 黒兎 |
| 大阪 | 前 たもつ |
| 熱海 | 三谷 圭角 |
| 神戸 | 山崎 武彦 |
| 大阪 | 藤原千恵子 |
| 紀の川 | 辻内 次根 |
| 大阪 | 神夏磯典子 |
| 堺 | 澤井 敏治 |
| 河内長野 | 山岡富美子 |
| 大阪 | 平嶋美智子 |
| 大阪 | 桑田ゆきの |
| 堺 | 原山由芽加 |
| 竹原 | 岩本 笑子 |
| 香芝 | 大内 朝子 |
| 弘前 | 只野ゆきこ |
| 青森 | 松山 芳生 |
| 和歌山 | 木本 朱夏 |
| 三田 | 上垣キヨミ |
| 鳥取 | 土橋はるお |

杵つき製法の「すりごま」 オニザキの

まひま

長い間親しまれてきた
 オニザキの「すりごま」は
 名称を変更し、パッケージ
 を一新いたしました。

オニザキのすりごまは、
 元々すり鉢ですったゴマで
 はなく、杵と臼を使った杵
 つき製法で出来た「すりご
 ま」です。

今までと変わらぬ、風
 味豊かな味わいをご堪能く
 ださい。



株式会社 オニザキコーポレーションセルズ
 〒862-0951 熊本市中央区上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL 0120-30-5050